# 約束が守られるのを、世界は待っている

紅茶大全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
約束が守られるのを、世界は待っている

【Ｎコード】
Ｎ１８５３Ｕ

【作者名】
紅茶大全

【あらすじ】
これは全てが一度終わった後の物語。レグレシア帝国とハルメニア共和国の大戦から３年。帝国のある街で魔力を持たない青年ライオネルは飄々としながら便利屋をやっていた。のらりくらりと暮らす彼が、大戦時に『狂戦士』と呼ばれるほどの戦士だったことを知る者は少ない。そんな彼のことを謎の女が観察していた・・・。１人の女が動き出す時、世界はその嘘と罪を暴かれる。これは――全てが一度終わった後に残された者たちが必死にあがく物語。三年前の謎と千年前の遺言。そして神々の恋。約束と遺言が残された世界

で彼らは必死に生きていく。≪初の連載となります、いたらぬことが多いとは思いますが、精進していこうかと思います。≫　※８／１追記　第２話連載しております！更新は２日に１回です！

# プロローグ

～オーラント歴２０５３年　ロトワール戦闘区域～

「よう、決まったんだろ？」

冷たい雨が降っていた。

その中でも建物は燃え、横たわった死体からは血が流れ出している。

先頭の後で動いているのは『俺ら』だけだった。

「どうせまた無茶な命令だろ？」

イーサンが笑って俺の肩を叩く。

彼の手も血で汚れている。冷たい雨は多くの血を洗い流してくれるが、爪の間や隊服の布地に染み込んで赤黒く変色した血はもう洗い流せない。こびりついた血を落とす気もなくなったのはいつからだろうか。

「作戦コード１１８だと。上は無味乾燥な番号で示してくる」

「俺、数字は苦手だなあ。ほら隊長、みんな待ってんぜ」

振り返るとみんな揃っていた。傷つきながらも着いてきてくれた仲間たち。

雨雲に覆われて戦場はうす暗い。時々思い出したように、どこかで爆発が起きる。一瞬の光が照らしだすのは破壊しつくされた後の街並みだ。

美しいと言われていた石畳はめちゃくちゃにたたき割られ、その上をかつて家屋の一部だった柱が散乱している。その合間に見える死体。
死んでしまえば、人も家屋も結局のところ物体として等価値なのかもしれない。

「悪いな、みんな」

そういうと隊員のほとんどが笑った。

「そりゃあ今さらっしょ、隊長」
「俺ら結局好きでここにいるんだし」
「最強無敵バカ丸出しってやつ？」
「ゲハハハハハ」

傷を負って満身創痍の男たちが笑う。何人かの仲間は既にもう自分の脚では立てない。
その姿に奇跡はないことを見てとった。
『救国の英雄』などと一時は持ち上げられたけれども、それでも部隊の全員が生きては帰れない。
これは――戦争なのだ。
わかってはいた。そう理解して、多くの仲間を失いながらも戦場を駆け抜けてきたのだった。

「いきましょう、隊長。戦争を終わらせるんでしょう？」

リナリーの言葉が俺の背中を押す。
俺はもう一度、全員を振り返った。俺を信じてついてきてくれた戦友たち。俺の命を救ってくれた戦友たち。
１人の副隊長と４人の班長。

そのうちの1人に目をやる。彼女は血に汚れ、薄暗い光しか届かないこの戦場でもやはり綺麗だと思った。

「…なによ」

勝気な瞳は相変わらずだ。

頬に付いた血を拭う姿からは、迷いも、疲れも見えない。疲れているだろうに、それを見せない。

その姿を美しいと思う。

「別に」

「アタシも行くからね」

「別に何も言ってない」

「ふん、死にやしないわよ」

「約束だぞ」

「わかってるわ。いざとなったら秘密兵器もあるし」

「秘密兵器？」

「秘密よ。レディには秘密があるの」

「…信じてる」

「まったくライくんは心配性なんだから、もう」

「うるさいな」

ししし、と変な笑い方をする女を放っておいて、全員に声をかける。

最後の――任務だ。

「よくここまでついてきてくれた」

全員がニヤニヤしながら頷き、視線を合わせてくる。
部隊の隊長として就任した時はその年齢差もあって色々と揉めたものだが、戦場で共に過ごす時間が信頼を築いてくれた。
視線が、それを物語る。

「リナリー、キャメロン、イーサン、アルさん、レオナ。特にお前たち班長には感謝している」

雨の中、勢いよく剣を抜く。
水しぶきを上げて剣は空中を切り裂いた。

「次の戦いが最後だ。戦争の最後だ。そして最も過酷な戦場となるだろう。だが、やることは変わらない。常に先頭を切って走れ！一番最初にこの戦争の終わりを見届けろ」

次々と全員がそれぞれの武器を掲げる。

「我ら『黒装束』、これより死地に生きる！」

４年後　オーラント歴２０５６年
商都コマーサンド　西地区

「逃げたぞ！　追え！」

鋭い声が後ろから飛んできた。ライはその緊迫した空気に軽く舌打ちをした。

「賊は一人だ！　取り囲んで抑えろ！」

目の前に現れた警備兵が剣を振りかぶる前に肩から体当たりをして吹き飛ばす。左から振り下ろされた剣は短刀で弾き、そのまま腰を落として相手を投げ飛ばした。
顔の半分を覆うマスクの中で呼吸が弾む。
闇夜に溶ける黒髪の間から紫の瞳が前方を睨んだ。

（イケる。このまま突破を……ッ！）

駆け抜けようとしたライの聴覚が風切り音を捉えた。咄嗟に身を引く。その頬を掠めるようにして矢が通り抜けていった。

（危なかった。もっと集中しないと）

頬から垂れる血を軽く拭い、矢を射ってきた方向に向けてナイフ

を放る。手応えはなくとも、相手が怯んだのがわかった。
そうして前方からやってくる警備兵を睨んでライは再び舌打ちをした。

女は屋敷の庭の一角で銀の煌めきが舞うのを屋敷の屋根の上から眺めていた。
不安定な屋根の頂点に立ちながらその姿はぶれたり揺れることはない。
視線の先には黒髪の男。
彼が振るう短刀は艶消しがされており黒い。
その短刀が警備兵の剣を受け流し、弾き、時として警備兵の腕や腹に裂傷をこさえていく。

「あれが『彼』なの？」

女が脇に控える従者に問うた。

「はい。その通りでございます」

黒髪の賊は警備兵に囲まれないよう止まることなく動き続け、そして屋敷の外へ脱出していく。捕縛の魔術が闇夜に光を伴って発動したが、結局捕えられていない。

警備兵の何人かが賊をおって屋敷の外にまで展開していった。

「いくぶん期待はずれね」

女が辛辣にそう言った。従者は何も答えない。

美しい女だった。

背後に輝く月の光を受けて女の髪が銀色に輝く。

その髪をかき上げながら女は赤い瞳を細めた。

「いかがなさいますか？」

月の光に照らされ幻想的な雰囲気を醸し出す女に従者が問う。

「あれが『彼』の全力なのかしら？」

「……」

「まあいいわ。もう少し様子を見ましょう」

はい、と従者は首肯する。

「どちらにせよ、彼は『鍵』になる人物だわ」

そう言って女は微笑んだ。

戦争は終わっていなかった。
2年続いたレグレシア帝国とハルメニア共和国の戦争は泥沼状態となり、3年前に停戦条約が結ばれた。

しかし、それは戦争の終わりを意味するわけではなかった。

それは一時的な停戦措置であり、両国の間には未だ緊張状態が続いている。
だが戦争を再開するほどの国力も蓄えておらず、事態は硬直状態のままであった。

レグレシア帝国において、貴族の特権『霊術』の行使によって民との格差は拡大し、貴族政治を戦前以上に強化するようになった。
ハルメニア共和国は、その内部で急進派が台頭し、『霊化武器』の生産を急がせていた。

戦争状態になくとも不穏な空気を孕む大陸。
今この大陸で、忘れさられた歴史と清算されていない罪が露わにされようとしていた。

## プロローグ（後書き）

初めまして。紅茶大全と申します。
この度、この小説「約束が守られるのを、世界は待っている」を連載開始します。

プロローグで何人か人物名が出てきましたが、まぁさほど覚える必要はありません。

超・長編となる予定ですので、お付き合いよろしくお願いします。

# 第1話「残り火」？

商都コマーサンド　西地区ハバーレス街

朝霧も晴れ、朝の寒さもようやく穏やかな朝の気温にとって変わろうとしていた。
そんな早朝。
通りには露店が所せましと並んでいる。
その中の一角、薄暗い隅で少女は現在進行形で――困っていた。
「俺らだって金とろうってわけじゃねえんだよ。貸してくれればいいわけ。商売してんなら釣銭とか控えてるんだろ？」
な？　と詰め寄ってきているのは3人ほどの小汚い男たちだ。
少女が抱えている箱の中には磨かれたリンゴが入っている。
「リンゴなら売りますけど」
「だーかーらー、リンゴはいらねえんだよ。俺らが欲しいのは金なの。分かる？金。カ・ネ」
3人の男たちはニヤニヤしながら手を差し出してくる。
下手に逆らうのも得策ではないと考えあぐねていると男たちの向こうに知っている顔を見つけた。
「あ、ライ！」
少女はひらひらと手を振る。
目の前の少女が散々自分たちの思い通りにならないだけでなく、

完全に自分たちを無視するような態度に3人の男たちのイライラは限界に達した。

「なんだってんだ！？　あぁ？　このガキが一体どこ見て――」
「邪魔」
「――ぶぎょえっ」

大声を出した直後、背後から自分たちと同じようにイラついた言葉が聞こえたと同時に、3人の男たちは壁に叩きつけられた。
まるでサンドイッチのように3人重なるようにして壁にめり込む。
3人の男を殴りとばした張本人は、何故か朝から少し息を切らしている。

「あんまり隅っこで商売すんな。また面倒に巻き込まれるぞ」
「はーい。気をつけまーす。あ、ライお礼にリンゴあげる」

片手をピンと上に伸ばして返事をする少女に対して、黒髪の痩身の青年―ライ―は呆れ顔だ。
もらったリンゴは丁寧に拭いて磨いてあるのでそのまま口にする。
そんな青年の顔色も知らずに少女は無邪気に話しかける。
無邪気に。

「ねえねえライ、これってアレでしょ？」
「あ？」
「アタシ知ってるんだ。この前教えてもらったから」
「…なんの話だ？」
「これは――――『朝帰り』だよね？」
「ぶふっ」

思わず口からリンゴの欠片を噴き出してしまった。

いたいけな少女から予想外の単語が飛び出てきたことに驚嘆する。
見ると少女は無垢な瞳をキラキラさせながらライを見つめている。
「大人になると許される夜の遊園地なんでしょ？　ベッドの上でも天国が見れるんでしょ？」
「ちょっと待て。お前一体誰から――」

そこまで言いかけてライは視界の隅で倒れていた男が起き上がるのに気づく。
懐からナイフを取り出しながら、右手に魔力を集めている。
「てめえら！　俺ら無視してくっちゃべってんじゃ――」
「邪魔。後にして」
「――ぱぎゃっ」

収束した魔力が魔術として発動する前に、再びライの一撃をくらって壁に激突し昏倒する。
少女のほうも慣れた事らしく一々驚いたりもしない。

「あ、ライ、頬怪我してるよ？」
「ん？　あぁこれはいいんだ。昨晩のだから。今怪我したわけじゃない」
「昨晩？　あ、大人の遊園地？　ライは何して遊んだの？」
「あー？あー…あー…俺は一晩中鬼ごっこしてたんだよ。そんときに少し怪我しただけだよ」
「ふ～ん、アタシもいつか行きたいなあ」
「足が速くなったらな」

少女からもらったリンゴを食べながら、ノびている3人の男の方へ寄る。

二人の人間に挟まれるようにして衝突したおかげか真ん中の男がまだ意識がありうつろな目でライを睨みつけた。

「ツラ覚えたぜ。見てろよ、いつか必ず―」

「ツラだけじゃなく名前も教えておいてやるよ。

ライだ。ライオネル＝スタンドバルド。ここらの便利屋で治安維持もやってる。この地域で暮らしたいんなら気をつけな。

俺もお前らの顔は覚えた。次なんかしてたら容赦しねえぞ」

男の目の前で落ちていたナイフを踏み砕く。

それなりの硬度を持っているはずの鉄片が魔術も使わずに石畳の上で粉々になり、男は呆然とそれを眺めながら意識を失った。

「んじゃ、戻るわ。早く大通りにもどって仕事しろよ」

「うん！　またねー！」

少女の明るい声に送られながら、一晩中走り逃げ続けていたライは目の下の濃い隈を擦りながらその場を後にした。

「あ、帰ってきた！　朝帰り男！」

大通りを抜けて自宅のほうへ戻ってくると赤毛の女がライのことを指さして叫んだ。
手には箒を持ち、その鳶色の目は面白いネタを見つけ楽しんでいる目だ。

「どう？　夜の遊園地は楽しかったの？　なによ疲れてフラフラ？　腰砕け？」
「……ここらのガキどもに変なこと吹き込んでのはお前か、ルミナ…」

大通りを抜けている間に子供たちが意味も知らずに「朝帰り」を連発するので、その親たちにもからかわれ散々だったのだ。
ルミナと呼ばれた女は箒を脇に置いて腰に手を当てる。
説教モードである。

「なによ、朝帰りは朝帰りでしょうが。昨日の晩もアタシがお裾分け持って行った時には、いつの間にかいないしそれに…ってライ、怪我してるの？」

頬の怪我を見つけたのだろう、再びルミナの目が輝く。

「ちょうどいいことに！　昨晩完成したばかりの傷薬がここに！　我らが頼れるケーニッヒ薬局看板娘ルミナが腕によりを掛けてつくった新しい傷薬！　ちょっと塗ればたちまち治る！　痛みも軽減してくれるこの――んぐっ！」
「お前の傷薬はだいたい失敗作だからいいよ。リンゴでも食ってろ」
けたたましく喋り出したルミナの口に食べていたリンゴの残りを突っ込むとライは嘆息した。

「んー！」
「どうせ失敗だって。前も傷は治らないし、痛みは増すし最悪だったろ」
「んー！んー！」
「せめて自分で使ってからにしろって。人を実験台にするなよ」
「んーー！」

そう言い残して家の中にはいってしまう。
やっとリンゴの一部を嚥下したルミナは憤慨しながらも、ライがかじってきたリンゴをシャクシャクかじる。

「ふん、なによ。美味しいけどさ」

そして自分が齧っているところがライが口をつけた場所であることに気づいて顔を急激に赤らめた。

ライの自宅はケーニッヒ薬局の上にある。
ルミナはケーニッヒ薬局に住み込みで働いている。ケーニッヒ夫妻はルミナだけでなく、ライのことも気にかけてくれ、よくルミナに差し入れを持ってこさせてくれていた。

「あ、起きたの？」

結局ライは朝から夕方まで眠りこけていた。
ドアを開けると階下から階段を上がってくるルミナと目があった。
「ん、昨日渡しそびれた差し入れ。おばさんのシチューだよ」
「いつも悪い。ありがと」
「それから下にあった新聞、届いてた本、それとアタシの新作傷薬」
「ん、色々とありがと。はい、傷薬は返す」
「…ちっ」

老夫婦の後を継ぐと豪語しているルミナの調合才能は壊滅的である。１０種類つくって1種類成功するかしないか。失敗作の破壊力はすさまじく、それはもう薬ではなく武器として売った方がレベルである。

薬局は庶民の医療機関として重要な役割を持っている。貴族には霊力による回復術があるのに対し、魔術には回復術がない。そのため薬品を扱う薬局は庶民にとって重要なのだが、ケーニッヒ薬局はいかんせん将来が不安だ。

「どこか出かけるの？」
「ヤズリクのところにね。用事を頼まれていたから」
「ふーん。アタシあの人苦手。どうでもいいけど、連絡のつくところにいてよね」
「悪い」
「なんか最近ライのこと知らないよそ者がたまにこの地域で無茶しようとするのよ」
「今朝も会ったよ。治安維持っつったって俺1人だしね。ごめん」

成り行きから始めた治安維持の用心棒も相変わらずチンピラ相手

ばかりだが、1人では手の回らないことも多い。
ルミナは前掛けの裾をイジイジと握りながら不満そうな顔を伏せながら呟く。

「いいけどさ。最近ライ忙しそうだからさ。アタシと話す時間も―」
「あ、悪い。もう時間だ。行かなきゃ。シチューありがとう。おばさんにも伝えておいて」

手早く鍋と新聞などを部屋に放り込むと、ルミナの横をさっさと通り抜ける。
前掛けを握っていた手が小刻みに震える。
キッと顔を上げたルミナは強烈な前蹴りをライの部屋のドアに食らわせた。

「ふんだ！　ウスノロボケが！」

若干建てつけの悪くなったドアにライが首をかしげるのはもうしばらく後のことである。

## 第1話「残り火」？（後書き）

あと数話ほど展開が非常にゆっくりです。
途中であきらめず読んで頂けると幸いです。

## 第1話「残り火」？

カランとドアの上の鐘がなった。

「いらっしゃい…って、なんだライか」

「なんだとは失礼な」

カウンターに腰かけていつも通りの飲み物を注文する。

このヤッジーという酒場はヤズリクという中年のマスターが経営している。

下町の酒場らしく無精ひげを生やし、その屈強な体躯で酒や料理を運んでいる。

「ほら、いつもの。仕事はうまくいったようだね」

「ちょっと派手なせいで逃げるの大変だったけど」

ヤズリクはこの地域一帯の情報通だ。

そしてライに『仕事』を持ってくる人間でもある。

「一晩中追いかけられてたからクタクタだったよ」

グラスに入った酒を傾けながらライがぼやく。

「それでもライのおかげでこの地域一帯はまた少し楽になるさ」

「そういうもんかねえ？」

「そういうものだよ、この地域は」

カランと氷がグラスの中で揺れて音を立てる。

と、同時にドアが再び開いて数人の男たちが店へと入ってきた。

「お、ライじゃねえか」
「よお、ライの若旦那ひさしぶりー」
「あ、ヤズ、俺にもライが飲んでるのくれ」

三人の男はライの横のカウンターに腰掛けながらそれぞれ挨拶と注文をする。
男たちはこの地域で店を構えている。よく揃ってヤズリクの店に飲みに来ているのだ。

「おう、そうだヤズ、聞いたか？」
「なんです？」
「あの糞うざってえ役人、死んだらしいぜ？」
「そうそう、昨日の夜に暗殺されたって」

三人が口を異にしながら同じ事柄について興奮して喋る。

「マザラフ商人の家に宿泊してたところを賊に襲われて殺されたって話だ」
「賊がなかなかのやり手らしくってな、警備兵を振り切って逃げたらしいぞ」
「警備兵も諦めないで夜中じゅう街中を追いかけまわしたんだが、捕まらなかったそうだ」

酒も回りながら饒舌に話していく男たち。
その横でライは素知らぬ顔をして話を聞いていた。

「それにしても、言っちゃ悪いが因果応報だよな。あの役人」
「散々俺らの経営に難癖つけて、税金搾り取っていきやがったからな」

「あぁこれで少しは経営が楽になるな。またヤズの店にも頻繁に顔を出せるぜ」
「それはそれは。いつでもお待ちしてますよ」
ヤズリクはそう穏やかに答えながら、ライのほうをみて微笑する。
ライはその意味ありげな笑みからわざとらしく目をそらしグラスを煽った。

「ライオネル＝スタンドバルドは時々ヤズリク＝ハーリッシュから暗殺の依頼を受けているようですね」
従者が女へと報告をした。
「ずいぶんと落ちぶれたものね。そのヤズリクという者のバックは誰なのかしら？」
女は相変わらず屋根の上に立っていながらその高貴さを失っていなかった。
下のアングルから見れば月が綺麗な夜空にさぞ映えたであろう。
しかし上のアングルから見下ろせば、女の足元にあるのは薄汚れた貧民街だ。
そしてその目線はヤズリクの店ヤッジーに向けられている。

「ヤズリクのバックはいないようです。ソロの情報屋ですね。依頼もヤズリク自身がライオネルに行っているようです」
「情報屋自身が？」
「はい」
「それは不思議ね。彼自身になにか大きなメリットがあるのかしら？」
「メリットというか…ここは『放棄された街』ですから」
「『放棄された街』？」

ええ、と従者が頷く。
流麗に立ち続ける女主人の傍らで膝をついたまま淡々と述べる。
その姿は主人の影たる従者にふさわしい。

「このハバーレス街一帯は、本来ならこの都市の西地区の守備隊の警護地域なのですが、ある時から難民や貧民が多く流入してしまったことから守備隊が警備を放棄してしまった地域なのです」
「守備隊が…警備を放棄？」
「はい。そのせいでこの地域の治安は荒れ、無法地帯となってしまったのですが、それを西地区の守備隊はいいことに問題を全てこの地域に押し込め、他との境界の警備を強化してしまったのです」
「つまり、ごみ溜め、というわけね。悪いものは全てここに持ってきて捨ててしまおう、と」

その通りです、と従者が頷く。
女はその美しい顔を少しだけしかめた。

「どの場所でも責任の押し付け合い、ね…」
「一ヶ所そのような場所をつくれば、他の管理が楽になるのでしょう。その中でライオネルは、この地域一帯の治安維持を1人でやっ

ているようです。事実彼が来てから治安はずいぶんよくなっているようですから」
「まあチンピラ程度なら全くの問題にならないでしょうね」
「はい。ですから情報屋ヤズリクが依頼しているのも治安維持の一端なのでしょう」
「なるほど。昨日彼が殺した役人は横領をしていたんでしたっけ？
なるほど」

女は1人腕を組んでなるほど、と何度か頷いた。
そして眼下のバーをもう一度眺める。
そこには数人の男たちが歩いてくるところだった。ハバーレシ街に似つかわしくない整った鎧姿。

「あら、お客さんのようね」
「あれは…西地区守備隊の紋章ですね」
「あら。この地区の警備を放棄したその守備隊？」
「ええ、そのようです。あの真ん中の男が西地区守備隊長のファーヴェルですから」
「面白いことになりそうね」
「面白いこと…ですか？」

少し喜色を見せた主人に従者は首をかしげる。

「そうよ。ケンカとかにならないかしら？」

高貴で美しい顔を少し悪戯に微笑みながら女が言う。
従者はため息をついた。

「そのような事を期待なさらないでください、姫」

酒は飲んでも呑まれるな。
古(いにしえ)からの教えである。
しかし避けようのない事態というものもある。
それは呑まれた人間に絡まれる、という事態である。

「だーかーらーよおー？　結局戦争が終わっても大して俺たちの生活は変わらなかったっちゅーことなのよ、ねえ？」

ライの心情を端的に表すなら『めんどくさい』である。
しかしまだ残っている酒を置き去りにして店を出るのも忍びない。
結局、酔っ払ってしまった三人の男の相手を適当にしながら時間が経つのを待っているのだ。
今までの経験上あとしばらく飲み続ければ彼らも潰れるだろう。
そして彼らの女房が呼ばれてきて彼らを叱咤しながら連れて帰ってくれるはずである。

「ラーイー、お前もこんな酒飲みやがって、え？　今お前いくつだっけ？」
「１９だよ」
「まーだ十代かよお。がははははは」

飲酒は正式には１８歳から許されているが、この地域では１５歳

くらいから飲むものが多い。

「結局よ、戦争で儲けたのは貴族連中ってことさ」
「違えねぇ。武勲を上げたのだって貴族連中ばっかだろ？」
「割を食うのはいつも平民さ。『ヌフラの大罪』だってそうだ」

帝国はその突出した軍事力を基礎とした軍事国家である。
先の大戦でも、停戦となったとはいえ領地は失っていなかった。
しかし、大戦中にヌフラと呼ばれる地域だけ、一度共和国に支配されたことがある。
その時に領民はほとんど皆殺しにされたのだった。

「三将軍に鬼将軍、ファイデンの鷹、神速の詠唱…ぜーんぶ騎士候たちだもんな」

騎士というのは貴族階級によって構成される軍部である。
軍部は主に貴族による騎士隊と平民による練兵団の二つによって構成される。

「あと雷雲の…なんとかってのもいたな」
「やっぱ貴族様は『霊術』が使える分、練兵団とかより断然強いよなあ」
「仕方ねえよ、霊術あってこその貴族だからなあ」
「魔力の１０倍だろ？　霊術の威力って」
「お、でもよ！　『黒装束』がいるじゃねえか！」
「おぉ、忘れてた！　救国の正体不明部隊だろ？」

男たちが俄然色めきたつ。

『黒装束』

正確には部隊名ではなく通り名ではあるが、その名前を聞いた瞬間ライは顔をそむけ、残っていた酒を飲み干した。喉を焼けるような熱さが通り抜けていく。

「あれはー…結局どういう部隊だったんだ？」
「騎士と平民と傭兵の混成部隊だったって話らしいぜ」
「圧倒的だったからなあ。戦況をひっくり返す勢いだったよな」
「あれぞ、民衆の味方ってか？」
「でもあの部隊も結局全滅したじゃねえか。結局民衆の味方ってーのは死んじまうんだ」

少しだけ空気が湿っぽくなる。
救国の秘密部隊。
そう言われた黒装束は終戦間際に全滅していた。

「ロトワール戦役だっけ？　あの部隊が全滅したのは」
「でもそのおかげでロトワールは帝国の領内に組み込まれたしな」
「黒装束が全滅してなかったらきっと共和国も全部帝国が占領してたよな」
「違えねえ！　あはっはははは！　ん？　なんだ、ライ帰るのか？」

帰り支度をしながら席を立ったライに気がついて男たちは、ライの両脇へ移動してライを席へと押し戻す。
おーちょい待て待て、と千鳥足でグラスを抱えたままカウンターへと押し戻してくる三人の男にライは苦笑する。

「なんだよ、俺はそろそろ帰るぞ」
「な～に言ってんだよお。もっと付き合って飲んでけよお」

「今日は俺たちが奢ってやっからさあ」
「がははは」

よほど横領役人が殺されたことが嬉しかったらしい。
赤ら顔の男たちは興奮してその顔をさらに赤くしていく。

「おら、ライなんて戦争のことなんか覚えてねえんじゃねえの？」
「黒装束ってーのは聞いたことあるか？」
「そこの隊長ってのは狂戦士って呼ばれるくらい強かったらしいぜ？」

はあ、とため息を吐く。
面倒なことになってしまった。早く帰りたいな、と切に思う。

「…聞いたことはあるよ」

さらに男たちが黒装束の功績について語ろうと近寄ってきたとき、酒場のドアが開いて冷たい空気が入り込んできた。
ドアを開けて入ってきたのは三人の男だ。

「失礼するよ」

そういって屋内に入ってきた真ん中の男が一歩前に出る。
その服装は簡素な鎧で、腰に吊り下げられているのは使いこまれた長剣だ。
鎧と剣に刻まれた印に誰もが見覚えがあった。

「…西地区守備隊」

誰ともなしに呟いたその言葉を受けて男が頷く。

「私は西地区守備隊隊長のファーヴェル＝ライスだ。この酒場にこの辺のチンピラを押さえつけてくれている『ボランティア守備隊』のライという男がいると聞いたのだが、どなたかな？」

面倒事があっちからやってきた。そう気付いたライは、三人の男の酒臭い息に囲まれながら眉をしかめた。

# 第1話「残り火」？

いい天気である。
空にはちぎれ雲がいくつか浮かび、空気は適度に乾燥して澄んでいる。
太陽は柔らかく輝き、陽のあたる場所はじんわりと暖かい。
そんないい天気の中、１人の青年が怒っていた。

「こら！　お前、いつまで寝てるんだよ！」

サンツは荷台の上の男を乱暴に叩き起こす。
サンツは簡略な鎧を身につけている。ヘルメットはないので、彼の茶色の髪は風に揺られている。そしてその鎧には東地区守備隊の鷹のマークが刻まれている。
一方荷台の上にいる黒髪の男は鎧をつけていない。細身の体に普段着をまとい、短剣を抱えるようにして荷台の上で眠りこけている。

「ほら、起きろってば。俺たちこれから夜盗退治に行くんだぜ！？」

荷台の上で男が身じろぎした。
眉を寄せ、迷惑そうな顔をして目を開く。
紫の瞳がサンツを捉えた。

「またお前か…」
「いつでも俺だよ。いい加減起きろよ」
「お前…名前なんだっけ？」
「サンツだよ。そろそろ覚えろよ。東地区守備隊第４部隊のサンツ＝ニッカだってば」
「あぁ、そうだったな。俺は…」

「ライオネル＝スタンドバルドだろ？　西地区守備隊の代表の。もう3回も聞いたよ。ってか4回目だぞ、このやりとり」
「そうか…御苦労だったな。じゃあ目的地に着いたら起こしてくれ」
「あぁ了解……って違う違う違ーーう！！」

滑らかな流れで再び眠りに就こうとするライに流されそうになってサンツは慌ててライを再び叩き起こす。

「寝るな！」
「なんだ、もしかしてもう目的地か」
「それも違う！　まだ街の城壁出てすぐの農村地帯だけど！」
「そうか…じゃあおやすみ」
「起きろおおお！」

ハアハアと息を荒げてサンツが騒ぐ。
一方ライのほうは非常に迷惑そうな顔だ。

「お前、わかってんのか？」

サンツが息を切らしながらライに問う。

「この夜盗退治の任務はな、貴族から直々の命令で都市全守備隊合同の正式な任務なんだぞ！　もっとシャキッとしろ、シャキッと」

無駄に力の入っているサンツを見ながら、必要以上に脱力しているライはため息を吐いた。
短刀を抱え直し再び暖かい陽に目を閉じながら、ライは昨日の晩のことを思い出していた。

◇　◇　◇　◇　◇

「私は西地区守備隊隊長のファーヴェル＝マイスだ。この酒場にこの辺のチンピラを押さえつけてくれている『ボランティア守備隊』のライという男がいると聞いたのだが、どなたかな？」

そうファーヴェルが言った瞬間、酒場の空気が若干凍りついたのをライは感じ取った。

『ボランティア守備隊』

正式な守備隊員ではないライが「放棄された街」の治安維持を行っていることは周知の事実だが、このような言い方をすればこの酒場にいる者の反感を買うことは確かだ。

既にこめかみに血管を浮かせている者もいる。

乱闘騒ぎというのも面倒なのでライは立ち上がって合図する。

「君か。君と少し話がしたい。いいかな」

ヤズリクがテーブルを一つ片付けて用意してくれる。

そこに座ると隊長のファーヴェルの後ろに護衛のように二人の守備隊員が、ライの後ろを応援団のように酒場にいる男たちが取り囲んだ。見事なまでの対立構造である。

「それで？　今まで放棄された街になんの手も打ってこなかった『お飾りの守備隊』様がどのような御用件で？」

挑発的なライのもの言いに酒場の人間はそうだそうだと盛り上がり、二人の守備隊員は腰の剣に手を掛ける。

その二人の隊員を手を上げて押しとどめると、ファーヴェルはもったいぶって話しだした。

「実は、先日貴族委員会のほうから緊急の召集がこの街の全守備隊に対して発せられた。内容は夜盗退治。最近街の郊外で頻発している夜盗の排除だ。これを受けて全守備隊はそれぞれ代表をだして混合守備隊を結成、それを貴族のマーヴェル卿が率いてこの任に当たることが決定した」

ここまで言われればライにもファーヴェルの狙いが見えてきた。

「それで？　もしかして、その混合部隊への代表に俺が行けってことなのかな？」

「話が早くて助かるよ」

ファーヴェルがにっこりと笑う。人を食った笑いだと思った。

「俺一人でいいわけ？」

「西地区守備隊は商業地区の警備と貴族街への警備、それに「放棄された街」の周辺警備とこの街でも重要任務を負っているからね。そちらの方面で功績が認められて今回はこの任務には派兵しなくて

もよい、と言われたのだよ。しかし合同任務という名で招集が掛けられている故に誰も派遣しない、というわけにもいかない」

そこで君の出番だよ、とファーヴェルが微笑む。ライの後ろで酒場の人間の空気がざわりと熱で膨らんだ気がした。

ライもあけすけにスケープゴートとして行けと言われて気分が良いわけではなかった。

「俺が断ったら？」

そう言うと後ろに構えている酒場の男たちが「そうだ、誰がてめえらのしりぬぐいなんか」と吠える。

それを見てファーヴェルは頬の右だけをあげるような嫌な笑い方をした。

「断ってくれても構わないよ。近々、西地区守備隊は大規模な『掃除』を予定していてね」

「掃除？」

「そう、掃除だ。私達は近々キミが活躍しているこの地区の区画整理を計画していてね。あの地域には道などに不法建築などが多いそうだから、その住人ともども排除しようかと考えていてね」

私達も少しここを放置しすぎたようだから、と白々しく言う。

このハバーレス街は貧民街だ。家を持たないものは路上で寝るしかないし、ストリートチルドレンは多い。

さらに路上には多くの露店が立ち並びそれで市場を形成している場所もあるのだ。

区画整理とはこれらの排除を意味する。

「ふざけんな！」

背後から野太い声で吠えた男がいた。
「ごみ溜めに押し込めていて、それを今さら排除だと！？　じゃあ俺たちはどこで生きていけばいいんだよ！」
もっともな言い分だった。その男は路上に生鮮食品の露店を広げているのだ。テナントを持っていない以上、守備隊のいう区画整理は店を取り上げられることに等しい。
そうだそうだ、と後ろで賛同するものが騒ぎだす。
「隊長さん、それは俺、もとい俺たちを脅しているってこと？」
「そうは言ってないさ。だが、どう捉えるかは君たちの自由だがね」
酒場の男たちの怒りにも動じずファーヴェルは涼しそうに言う。
気に食わない目をしている、とライは思った。
自分の地位に絶対の自信をもち、それより下のものを自分とは別の生き物だと思っている目だ。
「それで、どうする？」
再びの問いかけに、男たちは静かになってライの反応をうかがった。
「――いいよ。引き受けよう」
しばらく押し黙った痕にライは答えをだした。
ファーヴェルが満足そうにうなずき握手を求めてくる。
その手を握り返しながらライは言う。

「今回だけさ」
「そうなることをこちらも願っているさ。だがこれからも協力はしていきたいもので――」
「いいや」
「？」

ファーヴェルの言葉を遮ってライは手に力を込める。ファーヴェルの籠手が握りしめられて鈍い音をたてた。

「これっきりだ。今後、金輪際うちらへの干渉をやめてもらいたいね」
「…もし断ったら？」

ライは満面の笑みで微笑むと――ファーヴェルの手を籠手ごと握りつぶした。

「がああああっ」

籠手が変形してファーヴェルの手に食い込む。その激痛にたまらず声があがる。

「隊長！―貴様！」

背後で控えていた守備隊員の一人が素早く剣を抜き振りかぶる。しかし振りかぶり終わる前にライは素早く間合いを詰めた。その素早さに反射的に魔術障壁を展開するが、その障壁はあっさりと打ち抜かれる。
ドスッと鈍い音がすると、そのまま隊員はライにもたれかかるように崩れ落ちた。

「もう一度言う。これっきりだ」

腹に強烈な一撃をくらわせ気絶させた隊員の体を片手で持ちあげ、残っているもう一人の隊員の方へ放る。

それを握りつぶされた右手を抑えて呻きながらファーヴェルは呆然と見ていた。

ハバーレス街は治安が悪いということは百も承知だった。

だから今日の自分の護衛には隊で一番の実力者を二人連れてきていたのだ。剣技だけでなく魔術にも自信のある退院だ。彼らなら素人なら例え十人に囲まれたとしても問題はなかった。

だが、実際今の状況はなんだ。

守備隊員でもないただの細身の若い男にあっさりとやられた？

馬鹿な。ありえない。

信じられない光景に全てが停止していた。

「持って帰れ。そして二度と来るんじゃねえ」

ライがそう吐き捨てると、一瞬の静寂の後背後で男たちが爆発的な声を上げた。

グラスなどが守備隊三人めがけて飛んでいき、彼らはそれに追い出されるように外へと逃げるしかなかった。

◇　◇　◇　◇　◇

「今回は、貴族直々同行しているんだ。ここで活躍を見せられたら練兵団への推薦ももらえるかもしれないんだぜ」

サンツはまだ興奮したまま喋り続けていた。

基本的に守備隊は都市に所属するものである。この場合ライたちがいる都市は商都コマーサンドであるため、都市の中心は主に商人である。

商都コマーサンドには大きく４つの商館がある。その４つに対応するように街は東西南北に分かれており、それぞれに守備隊が設置されているのである。

一方で軍部の一部である練兵団は、都市のさらに上の帝国それ自体に所属している。そのため守備隊より地位は高く、また内部の兵の質も格段に高い。同じく軍部の一部である騎士団は貴族のみで構成されるため、平民が軍部に入ろうと思ったら練兵団を目指すのが普通なのである。

つまり練兵団は男の職業のなかでも憧れの一つなのである。

「だから俺は今回の任務でできるだけ活躍をするんだ！」

「へースゴイスゴイ」

「へへ…そうかな」

「あーうん、スゴイスゴイ」

「確かに俺はまだまだ下っ端で、隊のなかでも弱いかもしれないけど・・・」

「へえ、スゴイスゴイ」

「いやほめられることじゃなくて……って適当に相槌打つなよ！！」

「へえ、スゴイスゴイ」
「聞けえええええ、そしてせめてこっちぐらい見ろおおお」
サンツの熱い思いにもライは相変わらず簡素な返ししかしない。
ムキになってサンツが騒ぐと、荷台の上で背を向けて寝ていたライがくるっとこちらへ向き直った。
紫色の瞳がサンツを射抜く。

「なに練兵団に入りたいの？」
「おぉ、平民の憧れじゃん！」
「はいってどうすんの？」
「強くなるんじゃん！」
「強くなってどうすんの？」
「国を守るんじゃないか！」
「守りたいんだ」
「みんなを守れるようになるのさ！」
「ふ～ん、まあどうでもいいや」
「って、どうでもいいのかよ！もっとちゃんと聞けよ！」
「お前暑苦しいなー。キラーイ」

ぐっと押し込められたサンツを見て、ライは苦笑しながら「冗談だよ」と呟いた。「暑苦しいのはホントだけど」とも付け加える。
「戦争が終わったばっかりでよく練兵団なんかに入りたいと思うな」
「思うさ！　俺は『黒装束』に憧れているんだ」
ライは表情を変えずに押し黙った。
そんなライの様子には気付かず、サンツは捲したてる。
「俺の憧れなんだ、黒装束は。終戦間際だったけど、俺の家族はこ

の商都コマーサンドを目指して移動してたんだ。けれどもサン＝ライス地区が共和国軍に占拠されて、俺たちの背後から共和国の先遣隊が追ってきているという話があったんだ」
「…」
「怖かったね。背後から追い詰められるってのは本当に肝が冷える。でもそんな時に、黒装束がサン＝ライスへ攻勢を掛けてくれた。結果的にサン＝ライスまで奪い返してくれたからな。サン＝ライス攻防戦っていうらしいぜ。おかげで俺の家族は生き延びることができたんだ。な、凄いだろ…って寝るなよ！人の話を聞け！」

ライはいつの間にか再び睡魔に捕らわれていた。
そんな様子のライを見てサンツは口をとがらせる。

「ライはそういうのに興味ないんだな」
「ないね」
「やる気なさそうだもんな」
「まあね」
「西地区の代表のくせして馬もなしだもんな」
「馬もってないんだよ。手間もかかるしな」
「西地区では飼ってないのか？」
「いや、俺埋め合わせだから」

西地区以外の地区はそれぞれ５０名の隊員を派遣し、そのうちの半数が騎乗していた。
総勢１０名ほどの騎士は全員騎乗している。
この混成部隊は１６０名ほどで、そのうちの半分が騎乗しているなか、たった一人の西地区代表であるライが馬に乗っていないというのは奇妙な事態だった。
それに加え、野営物資を運ぶ荷台の上で昼寝をするという愚行。
他の代表からは「西地区守備隊は数に数えない」という見方がされ

ていた。
ライに言わせれば「西地区守備隊の評価がどうなろうが知ったことではない」と痛くもかゆくもない状況である。
「貴族の作戦には参加したっていう名目は欲しいけど、団員をこんな危険な任務に当たらせたくないっていう臆病者の隊長様が俺をよこしたんだよ」
「？　よくわかんないけど、大変なんだなお前も」
「そういうお前こそ馬ないじゃないか」
「俺はまだ乗れないんだ！」
「…胸を張って言えることではないと思うぞ」

まだ守備隊に入ったばかりのサンツには馬がない。
それなりの重量になる鎧を身につけ、手には槍を持ったまま徒歩で行軍している。

「いいんだ、まだ下っ端だから。でもいずれ乗れるようになるから」
「荷台に乗っけてやろうか？」
「いや、大丈夫！　すでに任務は始まっているんだ！　目的地まで歩いていくことも任務さ！」
「お前ってきまじめだな」
「そうかな？」
「絶対、帰るまでが遠足です、っていうタイプだよな」
「遠足？」
「いや、なんでもない」

目的地に着いたら起こしてくれ、と再び言い残して目を閉じるライ。
その様子にサンツもさすがに諦めた。
横で鎧をガチャガチャいわせながら、荷台からすぐに聞こえてき

た寝息に呆れかえる。

「ホント興味ないんだな」

サンツは諦めたように呟き、空を見上げた。

突き抜けるような青い空だった。

## 第1話「残り火」？（後書き）

次から急展開！
お楽しみに！

## 第1話「残り火」？

「――っ！！」

ガバリッと跳ね起きた。
日はとっくに暮れていた。
ライが寝ているのは相変わらず荷台の上だが荷物はすでに下ろされ、そしてライの上には毛布が掛けられていた。

「よお、坊主。起きたのか」

横では野営の火を焚いている集団があった。その中の男が話しかけてくる。周囲はいつのまにか森林に囲まれていて、闇夜がひんやりとした空気を運んできていた。

「サンツが怒ってたぜ。目的地に着いても起きないってよ」

体の上に掛けられていた毛布をどける。
サンツが掛けてくれていたのだろう。面倒見のいいやつだ。毛布の感触を確かめながらライは少し苦笑した。

「ここに着いてからどれくらい経つ？」
「数刻ってところかな。野営の準備が終わったのが先ほどってところさ。そろそろ飯の配給があるころだと思うぜ」

随分と寝過してしまったようだ。
危険がないときに寝るという習性は、逆をいえば危険が来ない限り眠り続けられることなのかもしれない。
ライは密かに唇を噛んだ。

腕に覚えはあったとしても油断は容易に死を招く。ライはそれを経験として知っていた。
そしてライにとって現在のこの野営地を囲む気配には身に覚えがあった。
普段と変わらないような空気の中に微かにまざる不安を煽るような圧迫感。

「――戦場の空気だ」

敵が――近い。

「サンツ、そんなに力むな。見張り番でそんなに神経を張り詰めてても仕方がないぞ」
「は、はい！」

肩を同じ隊の先輩に叩かれてサンツは力を抜いた。
野営地からみて9時の方向の警備がサンツのいる隊の任務だった。
かがり火をたきながら闇夜が支配する森の中を眺める。

「首尾はどうかね？」
「はっ問題ありません」

そのような会話に振り返ると、そこには本部のほうから巡回に来たのであろう貴族が護衛を引き連れていた。

（き、き、貴族だ！）

内心興奮する。そして慌てて他の隊員とともに敬礼を行った。

商都コマーサンドでは貴族を見かけることはあまりない。商人の力が強い街でもあるし、貴族は貴族街と呼ばれる街の中心地からあまり外に出てこないのである。

「どちらにしろ目的地に着くのは明日なのであろう？　ここは野営地でなのだからそこまで気を張らなくてもいいではないか」

傷一つない白銀の鎧を着込み肩まで伸ばした髪を丁寧に編みこんだ貴族が愚痴を言う。どうやら巡回には無理やり連れ出されたようだ。

「マーヴェル卿、そうは言いましても部隊の把握をするのも指揮官の務めですから。なにとぞご付き合いくださいませ」

貴族の付き人であろうか、その横でサンツの小隊長と話していた男が柔らかく諌める。

そうして見張りのローテーションなどを確認していると、野営地の中心から伝令がやってきた。

「失礼します！　今商都の方から伝令がやってきて、商都にアデス＝ワーニー候が到着し、本隊への合流を目指しているとのことです」

「なにっ！？　アデス候とはあの双竜の片割れか？」

マーヴェル卿が編みこまれた髪を振り乱して慌てだす。

「何故、帝都待機の騎士がわざわざ夜盗退治などにやってくるのだ！？」
「そう言われましても…そのような連絡があっただけですから」
「ぬぬぬ…軽薄な若造のくせに…さては私の手柄を横取りしようという魂胆だな」
「卿、どうなさいますか？」
「今すぐ本部へ戻るぞ。他のものとも相談してできるだけ早くこの任務を片付けねばなるまい。あの軽薄なアデス候に手柄を持っていかれるというのも癪だからな」

そう言ってマーヴェル卿が本部へ戻ろうとしたときだった。

「敵襲だ！」

鋭い声とカンカンカンと警告の鐘の音が聞こえてきた。

「どこからだ！？」
「4時の方向！　ここからほぼ真逆です！」
「くそっ。しかし状況は私の味方だ。アデス候が来る前に夜盗を全滅させるのだ」

そういって部下を率いて本部へと戻っていく。
残されたサンツたちは呆然としていた。
貴族の世界も駆け引きなど随分大変なんだなあと場にそぐわない事をぼんやりと考えていた。
商人の街であるコマーサンドの貴族であるマーヴェル卿にとって、この任務の手柄というのは重要なのだろう。上手くいけば帝都に呼ばれることだってあるかもしれない。
貴族が自分のことだけでこんなに必死なら、貴族の推薦を受けて

練兵団に入りたいという夢も叶えるのは難しいかもしれない。サンツは少し落胆した。

「よし、では数名をここに残して俺たちも本部へ向かおう。後方支援に回るのだ」

隊長が全体にそう声をかけ、隊員を振り分けていく。

サンツは残ることになった。

今から行っても後方支援なのだから活躍できるチャンスは少ないだろう。それに貴族自身が手柄を求めている中サンツが手柄をたて認めてもらえる可能性は少ない。

大半の隊員が去ってしまった後、かがり火で暖を取りながら自分の槍を取り出して手入れをする。

ぼーっと見つめた森には先ほどと変わらず闇夜があるだけであった。

（———なにかがおかしい）

人の流れの中でライはそう感じていた。

空気がーー奇妙だ。

これはただの夜盗退治の任務だったはずだ。

しかし、この野営地一帯に満ちている空気は明らかに戦場のもの

だ。
張り詰め、肌が表面からぞわりぞわりとする。
ただの夜盗にこのような雰囲気は出せない。
（夜盗ではないのか？　第一、夜盗があからさまな襲撃を掛けるか？）
夜盗が正面きっての戦闘というのは違和感が残る。
しかも野営地は全体的に浮足立っていた。
１６０人いるとはいえ、ほとんどがもともと商都の守備を担当していたものたちである。
このような地理の不確かなところで戦闘行為をしたことはないはずだ。
貴族の連中もほとんどが実戦経験がないようだった。おそらく騎士にもならず領主貴族として税金で暮らしてきただけなのだろう。
貴族も大きく３種類に分けられる。１つ目は領主貴族。これは自分の治める地域の統治であり、そこの税収は貴族の収入源である。２つ目は騎士貴族。軍部の騎士団にはいり軍属となること。３つ目は官僚貴族。帝国全体の統治に関わる元老院に入り政治を行うものである。
騎士貴族には貴族の子息が多く入り経験を積む。除隊後に故郷にもどって領主貴族になったり、帝都で官僚貴族になったりするものもいる。
しかし今回のマーヴェル卿を筆頭とする貴族たちは領主貴族である。実戦経験などほとんどない。誰もが今回の手柄を鍵として帝都の官僚貴族とのつながりをつくろうとしている者たちだ。
（手柄を焦って大勢が見えていない。これでは負けるぞ）

浮足立った部隊ほど負けやすいものはない。
こういう部隊ほど奇襲に弱いのだ。

（奇襲…そうか！　最初の敵襲はおとりか！）

今部隊の注目は最初に襲撃されたところへと集まっている。
所詮寄せ集めの部隊に経験のない指揮官だ。
その結果生まれた穴は大きい。

（奇襲を掛けるとするなら、最初の襲撃があったところの――真逆！）

ライは武器をもって集結する隊員の流れに逆流するように移動しはじめた。
おい、お前逃げるな戦え。そういう声がどこからか飛んできたが無視した。
しかし、とライは走りながら思考する。

（もし背後からの奇襲があったとしたら――この夜盗、ただの夜盗ではない）

抱えていた短刀を走りながら抜く。
腰だめに握りながらライは予測する。

（恐らく優秀な指揮官がいるか。もしくは訓練されている可能性がある！）

いつものくせで最悪の場合を予測する。
そして舌打ちをした。

（もしそうだとしたら…混成部隊に勝ち目はない！）

「どうやら彼はある程度勘づいているようね。この任務の裏側にある真実に」

野営地から程よく離れたところに背の高い一本の杉が生えていた。
その天辺の枝に腰掛けながら女は双眼鏡から目を外す。

「もともとそういうことに関する頭のキレは持ち合わせいますから」

その後ろにはいつも通り従者が控えていた。
地上から数十メートルという高さにいながらにして2人には微塵の恐怖もない。
それどころか――

「紅茶が入りました」
「ありがとう」

枝の上で固形燃料を燃やして湯を沸かし紅茶まで入れていた。
彼らにとってこの幅数十センチの木の枝が野営地であった。

「先ほどはいった情報によりますと、この任務の裏に気付いたアデス＝ワーニーがあの野営地に向かって馬を飛ばしているようです」
「あら、双龍の彼？」
「はい、双子の弟の方です」

くすりと女が笑って紅茶を飲む。
おいしいわ、と女が言うと従者が黙って頭を下げた。
女の銀髪が夜風に舞い上がる。
その髪先を赤い瞳で追いながら女は誰ともなしに呟いた。

「戦争の――残り火、か」

夜空には満月が美しくそして冷たく輝いていた。

## 第1話「残り火」？

かがり火を焚いている薪が音を立てて崩れた。
サンツはそこに新しい薪を足そうとして当たりを見渡し薪がないことに気付いた。

「あー、ちょっと薪とってきまーす」

そう言って森の周囲を離れ、中央に積まれている薪のもとへと歩み寄る。
サンツが2，3本の薪を手に取り乾き具合を確かめ持ち場へ戻ろうとしたときだった。

「ぐぎゃあああ」

悲鳴とどさっと人が崩れ落ちる音が背後から聞こえてきた。
慌てて振り返ると、さきほどサンツの横で見張りをしていたものが地面に倒れ血を流していた。
敵襲だ。
ハッ気がついたものの、足がすくんでしまう。
隊の一人が慌てて警鐘に近づいて他の場所へと連絡をしようとするが、更に森の中からでてきた別の野盗の魔術によって射られてしまう。
森の中から機敏な動きで姿を現した夜盗は２０名いるかいないか。
しかしここの見張り番として残されているのは１０人もいないのだ。

「敵襲だ！　他の場所へ連絡しろ！　背後を突かれた！」

残っている隊員のなかでも年配の男がそう叫んで抜剣する。
それにつられるようにして他の者も抜剣する。数人は同時に魔術の展開準備もする。
サンツも震える手で慌てて槍を構えた。
そうして両者は息を吸う暇もなく、激突した。

剣同士がぶつかり合う金属音が夜の森に響いている。

「サンツ！　お前はここから他の所へ襲撃があったことを知らせにいけ！　貴様はここにいても役に立たん！」
「は、は、はい！」

見張りの指揮をとっていた男がサンツへと怒鳴る。
しかしその直後切り結んでいた相手に首をはね飛ばされる。
鮮血を噴き出しながら首のない死体が地面へと倒れこんだ。

「あ、ああ、ああああ」

サンツは歯がガチガチというのを感じた。
指揮を執っていた男は自分の隊のなかで2番目ぐらいの実力を持っていたのだ。

それがあっさりと殺された。
足がすくみそうな恐怖の中で槍を抱えたまま必死に駆けだす。
「逃がすな」
そのサンツの前に夜盗の一人が躍り出てきた。
「うわあ！　くそっくそっくそ！」
「くっ…」
必死に手に持った槍を突き出して応戦する。
最初はその槍に手間取ったようだった夜盗もあっさりとリズムをつかんだのか剣で捌いてくる。
ガギン、という音がして槍の穂先が強烈に弾かれた。
その衝撃が手元にまで伝わりサンツは槍を手放しそうになる。
なんとか落とさずに済んだと思ったが、その態勢が崩れたところを逃す夜盗ではなかった。
「終わりだ、死ね」
銀色の幅広の剣が振り上げられる。魔術が得意でない自分では剣を防げるだけの魔術障壁を瞬時に展開することはできない。
終わりだ、と思った。死ぬんだ、と。
自分に訪れる痛みと死を予感してサンツはぎゅっと目をつぶった。
しかし、その衝撃は予測していたところとは違うところからやってきた。
――ドン
サンツの体は横からの衝撃を受け、激しく揺さぶられながら地面

を転がった。
顔の表面に地面の感触を感じながら、目を開けると数刻ぶりに懐かしい顔が見えた。
いつも眠そうにしていた黒髪の青年。

「ライ！」
「よう。どうにか間に合ったようでよかったよ」

相手の剣を短刀で受け止めながら、サンツの体を弾き飛ばした張本人は状況にそぐわないほど飄々とした感じでそう言い放った。

ぎゃりっと嫌な音が短刀と剣が交差しているところから聞こえてきた。
ライは素早く剣を跳ねあげて距離を取る。

「助っ人は一人、か。まだ他の援軍が来るまでまだ余裕がありそうだな」

盗賊が剣を構え直しながら呟く。
背後では盗賊によって守備隊がほぼ全員が倒されていた。
絶命しているものもいれば大けがをして動けないものもいる。
同僚の惨劇にサンツは思わず目をそむけた。

「残りはお前ら2人だ。さっさと片付けて中央へ突破させてもらう」
「どうぞ、できるんなら」

凄む盗賊に対しライは短刀をヒラヒラさせながら相変わらず飄々とした様子である。余裕があるというよりは関心がない、という方が正しい。

盗賊が素早くライへと踏み込んだ。

強力に振られた剣をライは受け留めることはせず、脇へと捌く。

まともに受ければ短刀が一度で折れてしまうため、相手の剣は全て脇へと捌いていく。

サンツはその光景を後ろで呆然と見ていた。

どちらもレベルが高い。

「なるほど、できるな」
「そりゃ、どーも」

守備隊が簡単に撃破されたことからこの盗賊団は相当な戦闘力をもっているらしい。先ほどの剣技や魔術をみていてもそれが伺える。

その盗賊とライは互角に戦っている。

あのぼーっとしてたライが、である。サンツは何かの冗談のように思えた。

ヒュオッ

鋭く振るわれた剣を避けようとして一歩下がったライを追撃するように盗賊は前に出た。振り切った後の勢いを利用して肘うちが打ち込まれる。

「うおっと、おっと。危ねっ！」

後ろへ押されるようにして下がっていく。
短刀というリーチ差のある獲物で長剣を捌くのもやっとというように見える。
と、足元のバランスを崩したのかライが地面へと尻もちをつくようにして腰を落とした。

「死ねッ！」
「ライっ！」

その上から剣を振るわれる光景をみてサンツが心配の声をあげる。
しかし――

「危なかったー」

飄々とした調子を崩さずにライは盗賊の長剣を右手にいつの間にか持っている長剣で受け止めた。

「いやね、やっぱりリーチが違うからさ。ちょっとこの人の長剣を借りようと思って」

ライが尻もちをついた場所の横に転がっていた長剣を掲げて見せる。
その横では既に絶命した隊員が横たわっており、ライはその長剣を借りるために後退したり転んだりしていたようである。
相手の剣を受け止めながら器用に立ち上がると、今度は打って変わって猛反撃に出た。
ライの剣がしなり、鞭のように相手へと迫った。
実際は剣は曲がっていないのだが、サンツにはそのあまりにも早いスピードによって歪んで見えた。

「ぐっ、バカな」

盗賊の顔が苦戦に歪む。

もの凄い勢いで迫ってくるライの剣にカウンター―のように剣を滑らせる。

しかしそのどれも避けられてしまう。

「チェックメイト」

「ぐおっ」

そうしてライは一人目をあっさりと切り捨てた。

残っていた盗賊が唖然としてサンツとライに注目した。

そして徐々に彼らの殺気が膨らんでいく。

当り前である。自分たちの仲間の一人が目の前で死んだ。

その事を彼らが理解すると、彼らはそれぞれ各々の武器を手にじりじりと距離を詰めてきている。

「なんだ、まだ突破していなかったのか」

「ふ、ふ…ダジリスさん。すみません」

そんな空気を森の中からでかい斧を担いだ男が現れて回りを一喝した。

「頭領たちが本部に突っ込む前に俺たちでいくらかかき回せって言われてんだぞ。急げよ」

「それが…」

「あん？」

「たったいまノールの奴があの小僧に倒されまして」

「ほう」

斧を持った大男がそのままライとサンツのほうを睨む。その眼力の強さにサンツはビビりライのほうを助けを求めてみるが、ライは「あいつ今俺のこと小僧って言ったよな」などとどうでもいいところに怒っていた。

「たかが2人だろ。人数で潰せ。5人くらいでかかってさっさと仕留めて次の段階に行くぞ」

「し、しかし副長…」

「バ、バカ！」

盗賊の男の「副長」の呼びかけにダジリスと呼ばれていた男が慌てる。

そしてチラリとライとサンツのほうを伺う。

サンツが疑問符を頭の上に並べたのに対し、ライは意味ありげな笑みで微笑んだ。

「なんとなく知ってた」

そして剣を持ち前方へ構えながら、相手を挑発するように言い切った。

「あんたら盗賊団は———練兵団出身なんだろ？」

## 第1話「残り火」？

重苦しい沈黙が流れた。
風が柔らかく吹いて頬を撫ぜる。

「何故、わかった」

「副長」と練兵団の階級で呼ばれいたダジリスが斧を肩に担ぎ直しながら問う。

「兵の配置の仕方、典型的な奇襲戦法を取ったところから多少予想はしてたんだ。だけど確信を持ったのはついさっき。剣の型が明らかに練兵団で鍛えられたものだったから」
「ノールと手合わせをして見抜いたというのか」
「そういうこと」

サンツはライがノールと言われている盗賊のカウンターを全て軽々とかわしていたことを思い出した。
そして盗賊に次々と倒される守備隊の仲間たちのことも思い出していた。
練兵団は軍部所属だ。警備が主体の守備隊と戦争が本業の練兵団では実力差がありすぎる。短い時間で守備隊が全滅に追い込まれたのも納得がいく。

「で、で、でもなんで練兵団が？」

帝国軍なら帝国領内で盗賊行為をすることは厳禁のはずだ。

「勘違いするなよ、サンツ。こいつらは『元』練兵団であって、今

は違う。いわゆる練兵団くずれってやつだ」

ぞわり、と盗賊たちの殺気が増した気がした。

それを知ってか知らないのか、相変わらず気軽な調子で相手を挑発する。

「お前がなぜ色々とそこまで知っているのかはわからないが、時間がない。通らせてもらうぞ」

ずらっと前衛の４人が剣を構える。

後ろで斧を構えたダジリスが合図を出すのと同時に４人は滑らかな動きで間合いを詰めてくる。

「ラ、ラ、ライ」

「ん？」

「こ、これってやばくない？」

訓練された滑らかさで移動してくる敵を見ながらサンツは震えながらライに問う。

「んー…あんまり良い状況とはいえないね」

「ちょ、ちょっとお」

情けない声をだすが、ライはそれを聞き終わる盗賊の前へと踊りだしていた。

途端に滑らかな動きで四本の剣がライめがけて振るわれる。

それを体をずらしながらライは捌く。

正面から受ければさすがに防ぎきれないが、左に体を大きくそらし態勢が崩れた状態の剣を四本まとめて受け止めることに成功する。

「ほお」

その背後でダジリスが斧を構えながら感嘆の声を上げる。

「なるほど、確かにできるようだ。だが、これはどうかな」

ダジリスが跳躍してライへと飛びかかる。ライと切り結んでいた4人はさっとその場を離れた。

ギャリン

金属がぶつかる嫌な音がした。

「ぐっ」

ライの口からうめき声が漏れた。

どうにか受け止めた斧は、しかしそれでも勢いを殺せなかった。左側へとどうにか流すがその時に左肩を削っていかれる。

怯んだライに対して今度は残りの敵から魔術攻撃が仕掛けられる。火球を紙一重でよけ、魔術の矢を剣で弾く。

多勢に無勢である。

どうやらダジリスはサンツよりライを片付けることに専念するらしかった。サンツはいつでも殺せるということなのだろう。

「ライ！」

ライは剣と魔術の暴風域にいるようだった。

無数の剣と魔術を受けてライの体には裂傷が増えていく。

どうにか剣をかわしその集団の外にでようとするが、人数の差と遠距離からの魔術攻撃がそれを許さない。

傷口から流れる血が宙を舞い、口へと流れ込んだ。
血の、味。
状況は圧倒的に不利だ。
しかしそれでもライは笑った。
それは、暗く深く――そして黒い笑いだった。

同時刻、木の上から遠くの戦闘を見つめていた女が同様にクスリと笑った。

「思い出したのかしら？」

そして低く冷徹な声で呟いた。

「目覚めなさい」

奇妙な違和感がダジリスを襲った。
多対一で圧倒的な優位に立っている状況で、形勢は膠着しているようだった。

（なんだ？）

黒髪の青年に対しては致命的なほどの人数差だ。残された守備隊の青年が逃げ出そうとすれば自分が対応することができる。
何も問題はない。
それなのに――

（なんだ、この感覚は…）

皮膚が粟立つ。
黒髪の青年は倒れない。
無数の剣戟を受けているにも関わらず、致命傷は全て避けている。
皮膚は裂け、血は舞っているものの、それらは全て軽傷だ。

「いつまで時間を掛けている！　どけ！」

しびれを切らしてダジリスは仲間を割って、黒髪の青年に躍りかかる。飛び上がると同時に体を魔術で身体強化する。
仲間が割れるように道を開けた先にいた青年に渾身の力で斧を振り下ろした。

「っ！」

相手の剣をへし折るつもりだった。

所詮そこらへんの守備隊がもっていた剣だ。
耐久度もそう高くはない。
ダジリスはその斧で大戦中に幾人もの剣を折った経験から、相手の剣も折ることができると思っていた。さらに今は魔術で身体強化しているのだ。通常の斬撃とはパワーが違う。
が、――

（受け止められた！？）

内心で驚愕する。
と、同時に体を伝わってきた衝撃が今起きたことを瞬時に理解させる。

（剣で衝撃を吸収されたというのか！）

獲物同士がぶつかった時の衝撃が柔らかかったのだ。
絶妙なタイミングで剣を引き、衝撃を吸収されたらしい。
少しで早ければ剣はへし折られ、遅ければ剣ごと自分の体にめり込んでしまうだろう。
先ほどは殺せなかった勢いを完全に殺されて斧は受け止められてしまっていた。

（このガキ！　一体…！？）

瞬間、交差する獲物の向こうに黒髪の間から相手の瞳が見えた。
紫金の瞳。
その瞬間、ダジリス背筋から脳髄にまで今まで経験したことのない寒気が走る。

「っ！？」

とっさに距離を取った。
何かを考えるよりも早く、戦場で染み付いた危機意識がダジリスの体を動かした。反射的に薄いながらも魔術障壁まで展開してしまう。

「今の…は、殺気？」

一瞬で体が汗を吹き、心拍数が跳ね上がる。
戦場でも数回しか味わったことのない心臓を鷲掴みにされたような圧倒的な恐怖。
そして黒髪の間から覗く紫金の瞳。

「ま、まさか――」
「貴様！　いい加減に死ね！」
「っ！　やめろ！」

ダジリスが下がった後を二人の仲間が切りかかる。
青年は二人の剣をやすやすと受け止めると一人を切り捨て、もう一人を殴り飛ばした。
殴り飛ばされた仲間は血を吐いて事切れる。
その鎧を見てダジリスは確信した

（や、やはり…信じがたいが、こいつは…）

殴り飛ばされた仲間の鎧は、鉄でできているはずなのに、拳の跡がついている。魔術による身体強化の気配はなかった。
素の力で鎧がめり込むほどの力で殴られたのだ。
拳の跡がつくほどの力。
多対一でも引かない実力。

圧倒的な殺気。

そして――紫金の瞳。

それらの特徴をもつ人物にダジリスは戦場で一度だけ会ったことがある。

その浴びた血の多さ故に隊服が黒く染まってしまったといういわくつきの部隊。

あまりの圧倒的な実力ゆえに英雄か悪魔かと恐れられた部隊。

その荒くれ者の部隊を統率していた男。

その部隊の――隊長。

「黒装束の…狂戦士！」

## 第1話「残り火」？

◆　◆　◆　◆　◆

「副長！　ここはもう無理だ！」

ノールが金切り声のような悲鳴を上げた。

彼の体もまた血にまみれていた。

剣は既に血でよく切れない、ただのこん棒となっていた。

「まだだ！　ここで引くわけにはいかない！」

同じように切れ味の悪くなった斧を相手から引き抜きながらダジリスは怒鳴り返した。

「ここで引けばこのサン＝ライス地区は相手の手に落ちる！」

「けど！　物量的に不利過ぎる！」

絶え間なく波状攻撃をしかけてくる共和国軍との数のうえでの差は致命的である。

何度目かもう数えることも忘れた攻撃をなんとかしのいで地面に膝をつく。

「ダジリス、無事か？」

「マートン隊長！」

幅広の剣を肩に担いだ男が寄ってくる。
彼の普段から自慢にしている刈りそろえられたヒゲにも敵の血がべったりとついていた。

「隊長、いったいコレはいつまで続くんですか？　もうみんな体力も精神も限界ですよ」
「わからん。だが、アデス様がこのまま耐久戦を続けるほど頭が固いとは思わん。恐らく何か手を打ってくださってるはずだ」
「双竜の片割れですもんね」

大戦中にその実績で指揮官の地位にまで上り詰めた男は、どんな戦地でも部隊を生き残らせてきた。
初めて目通りした時はおちゃらけた感じで心配になったものだが、実際に戦闘が始まると彼自身の強さもさることながら部隊の指揮も他の貴族より心得られていた。

「だが、アデス様でもこの状況で打てる手は限られているはずだ。できて援軍を呼ぶことぐらいかもしれん」
「援軍、ですか。できるだけ実力者か人数がいるとこ、できれば両方欲しいですね」
「全くだな」

体についた敵の血は最初は生温かいもののすぐに体を冷やしていく。
まるで死者が体温を奪っていくようだ。
だが、体の血を落とすまえにそれぞれ獲物の血を拭う。そうでなければ次は自分が体温のない死体になってしまう。

「サン＝ライス地区の近くに展開している友軍っていえば、第五突

撃部隊とかでしたっけ？」
「そうなるかな。くそっ、南方というひとくくりでいえばアンドリュー将軍とバルエル将軍もいるというのに」
「あ、そういえば噂で聞いたんですけど」
「なんだ？　ノール」

横で剣の油を必死に拭き取っていたノールが顔を上げる。

「ラディバル奪還作戦ってあったじゃないですか？」
「あぁ、奇襲強奪作戦だろ？」
「あれ成功したらしいですよ」
「本当か！」
「だからあそこの遊撃部隊とかこっちに回されてくるんじゃないですか？」
「あそこはどこがいたっけ？」
「黒装束ですよ、黒装束」

ざわり、と部隊に波がたつ。希望と畏怖の感情がないまぜになった声があがる。

「黒装束！？　まじかよ。今一番勢いのある部隊だろ？」
「第２５１独立遊撃部隊だっけ？　まじで強いらしいしな」

色めき立つ隊員たち。
戦争が始まってすでに3年が経過している。
戦地というものに慣れはするものの誰もがそこに居たいとは思わない。
３年目にして現れた『黒装束』と呼ばれる謎の部隊の活躍は帝国軍に「勝利」という希望を見させるだけの実力を持っていた。

「ええい、静まれ！　まだ来るとは決まっていないんだぞ！」

マートン隊長が浮足立った部隊を叱責する。

「来るとしてもあと数日は無理だ。ラディバルからここまでどれくらいの距離があると思ってるんだ」

まだあと数日は耐えねばならん。

そう叱責を続けようとしたときににわかに周囲の騒がしさが増した。

「敵襲だ！　各部隊持ち場につけ！魔術展開用意！」

伝令が馬を駆って友軍への伝達を行っている。

その伝達を聞くやいなや、全員装備をもう一度身につけ整列を始め、そして再び戦いに身を投じた。

「一人たりとも通すな！　ここを抜けられたら商都まで道が開けちまうぞ！」

目の前にいた敵兵の剣ごと叩き切りながらダジリスは周囲を鼓舞した。

勢いをもって突っ込んできては撤退していくという攻撃パターンをしていた敵は、今度は粘り強く味方の戦力を削っていく。

「マートン隊長！　波状攻撃の感覚が狭まってきているようです！」
「うむ、ダジリス。これは最終的に全力で押し切ってくるかもしれん。ここが正念場だろう。耐えるぞ！　魔力に余裕のあるものは敵の遠距離攻撃に対して障壁を展開しろ！」
「はい！　聞いたか、野郎ども！　耐えやがれ！」

そういって斧を振るう。
もう手足の感覚などとうになくなっていた。
手はしびれ小刻みに痙攣している。
それでも武器を通して敵の剣を折り、肉を断つ感覚は体へと伝わってくる。
戦い慣れた体は無意識のうちに斧に魔術を薄くまとわせる。
だがーー

「隊長！　副長！　新手だ！」

切り伏せた敵兵の向こうに新たな敵影が見える。

「…時間差で連続…突撃？」
「バカな…」

絶望が心を満たしていく。
態勢を整える暇すらない。
このままでは勢いのまま突っ込んできた敵兵にすべての味方が引きちぎられてしまう。
せめて、家族のあるものだけでも逃がせないのか。自分の残り魔力と防壁の強度を急いで考えながらも思考は絶望に喰われていく。

目の前に迫る敵兵をぼんやりと眺めながら自分の無力さを怨んだ。

その時だった。

マートンたちの部隊の右後方から信じられないスピードで敵軍へと突進した部隊があった。

横殴りのような奇襲。

そのカウンターのような一撃を受けて敵部隊はたちまちマートンたちの数十メートル先で混戦となった。乱戦の中で魔術が暴発した光が時々光る。

「お、おい…あんな無茶どこの部隊だよ」

死を前に決死の特攻をかけたというのか。

「おい、ぼさっと見てる暇はねえぞ！　援護しろ！」

「はっ、はい！」

必死に悲鳴をあげる体に鞭うって援護に駆けつける。

しかし、それは結局徒労に終わった。

「うわっ…」

たどりつく頃には敵の部隊は壊滅していた。

敵の死体の間にポツリポツリと立っている２０人弱の小人数の部隊。

その隊服は血を浴びて赤黒く変色している。

ダジリスは目の前の光景が信じられなかった。

（たった一つの部隊でこれだけの敵をやったのか…）

敵の死体は無残に破壊されている。
鋼の鎧は貫かれ血を溢れさせているものもあれば、その鋼に拳の形が残っているものまである。
この部隊のものからすれば鋼など体を守るには不十分すぎるのだろう。

「黒…装束」

畏怖の念をもって部隊名が口をついて出た。
それが聞こえたのか、部隊の中心にいた小柄な男がこちらを見る。
ダジリスはその男の紫金の瞳に射ぬかれた瞬間、心臓が止まりそうになるほどの圧迫感を覚えた。

◆◆◆◆◆

そして今、あの時と同じ瞳がダジリスを捉えていた。
戦争がおわってから3年だ。
ダジリスが戦場で黒装束の隊長である狂戦士とよばれる男を見てから4年の月日がたっていた。

それでも、間違えるわけがなかった。
あの呑みこまれそうな圧倒的な存在。

（だが、思っていたより若いな）

四年たった現在でも、目の前にたつ黒髪の青年は二十前後のようにみえる。

「く、黒装束って…ライが？　え、え、え？　狂戦士？　え、まじで、え？」

連れの青年は知らなかったようだ。
ダジリスの周囲にいる仲間も動揺を隠せない。
ダジリスたちは戦場で一度黒装束と遭遇して彼らに命を助けられている。
感謝の気持ちもあるが、それ以上に黒装束の実力を知っているのだ。

「どこかで会った？」

黒髪の青年が血を拭いながら問う。

「3年前の大戦時に、サン＝ライス攻防戦に参加していてな。そこで見かけたことがある」
「あぁ、あの時の部隊」

沈黙があたりを満たした。
かがり火はまだ残っているが、数を減らしている。
闇が背後にまで忍び寄っていた。
かつて戦場をともにした友軍同士が今は敵味方に分かれて対立し

ていた。

「なんでだよ」

ぽつりと漏れた呟きが沈黙を破った。

それは今まで端のほうで槍をもったまま立ち尽くしていた守備隊の青年の呟きだった。

素直な疑問が口をついて出る。

サンツは槍を持ったまま肩を震わせていた。

「なんでだよ、それってなんでだよ！　チクショウ！」

## 第1話「残り火」？

サンツには訳が分からなかった。
ライが黒装束の隊長？　狂戦士？
それも衝撃的だったが、それよりも――

『3年前の大戦時に、サン＝ライス攻防戦に参加していてな』

ダジリスと呼ばれていた元・練兵団の副長はサン＝ライス攻防戦に参加していたらしい。
サン＝ライス攻防戦。
商都へ母と妹とともに逃げている途中に耳にした。
商都への進軍を企てる共和国軍とそれを阻もうとした帝国軍がサン＝ライスで衝突したと。
サン＝ライスを突破されれば商都へ辿り着くのも難しく、また辿り着いたとしても安全ではない、とも。
サン＝ライスで共和国軍を足止めしてくれた帝国軍がいなければ。
そして黒装束がいなければ。

（俺たち家族はみんな死んでたってのに…）

「なんでだよ！」

叫びが口をついで出た。

「なんであんたらは盗賊やってんだよ。俺はあんたらのおかげで助かったんだよ。商都へ逃げ込めたんだ。俺はあんたらみたいになりたかったんだ。逃げる人の後ろで敵を止められるような練兵になり

たかったんだ。それなのになんであんたらは盗賊なんてやってんだよ！」

涙が頬を伝った。
槍を握る手が震えた。

「どうして…どうしてだよ」

俺が憧れていたのは…一体…。

「黙れ、小僧」

低く唸るような声が応えた。
顔を上げると、ダジリスと呼ばれていた男が斧を構え直しながら、怒りをあらわにしていた。

「お前になにが分かる、戦場にいったことのないお前に」

憤怒が。
言葉となって宙を満たしていく。

「俺たちだって、自分たちの故郷を守ろうと、愛すべき人間を守ろうと必死に戦っていたんだ」

炎が音を立てて爆ぜた。
また1つかがり火が消える。

「だが、お前に分かるか。死よりも濃い血臭が漂う戦場で、仲間を一人また一人と失っていく辛さが。そして何よりも停戦し、故郷へ戻った時の俺たちの気持ちが！？」

「故郷？」
「サンツ。彼らは――彼ら第５２統合師団４３連隊にいた練兵は、ヌフラ地方の出身だ」
「ヌフラの…」

大戦中に唯一共和国に奪われたことのある地域。
奪われた地域では虐殺があったと言われている。
通称、ヌフラの大罪。

「俺たちの故郷は蹂躙されていた。住人は全て皆殺しだ。誰も…誰も生きている者はいなかった。それなのに！」

今でも脳裏にありありと甦るのだ。
故郷の状況を冷淡に告げる軍部上層部。仲間とともに励まし合いながら、お互いにこれは嘘さと言い合いながら故郷へ帰る旅路。
そして辿り着いた――何もない村。蹂躙され、何も残されず、更地になってしまったヌフラ。

ダジリスが声を張る。
怒りが。
怒りが見えるようだった。彼の眼の奥には未だに恨みの、怒りの炎が燃え狂っているようだった。むき出しの感情に気圧される。

「それなのに！　貴族はのうのうと暮らしている。戦時中に立てた手柄の大半を自分のものとして、のうのうと。俺たちは傷つき全てを失った。それなのにあいつらは利権をむさぼり、民の命を糧として繁栄を続けるのか！？　それが許されるとでも！？」
「…だから野に下ったのか」

野に下るとは、隠語で軍隊を抜けることを指す。

「野に下り、貴族が所有する家畜や農耕物だけを襲う盗賊となったのか」

ライが事前に調べた情報では、盗賊によって荒らされているのは貴族の所有物のものが多かった。そのために貴族が早くに動いたのだった。

「そうだ」
「貴族を殺すためにか」
「そうだ」

ダジリスは即答する。

「貴族を皆殺しにしてやらねば俺たちの気が治まらないのだ。世の中の『義』ではない。正義ではない、そんなこと百も承知だ。だが、それで俺たちが納得するとでも？　仲間を奪われ、妻と娘を失った。例えこの魂が地獄に堕ちようと俺たちには慰めが必要なのだ。貴族の血という慰めが、な」

悲痛なまでの訴えだった。
魂の救いを求めているわけではない。清らかで正しくあることを求めているわけではない。神の言葉が命を生み出したのは遥か昔の話だ。世の中に神の救いがないことを彼らは戦場で身をもって経験しているのだ。

ただ安寧を。

他人から見て、それがどんなに茨の中や業火の中に見えようとも。
復讐の愚かさなど今さら人に説かれたくはない。

いくら愚かであろうとも、復讐は彼らの痛みを一瞬だけ和らげるのだ。
だから復讐による、安寧を。
「言葉は尽くした。もはや語るべきことは何もない」
ダジリスが再び斧を構える。
それに呼応するように後ろでダジリスの仲間がそれぞれの獲物を構え直す。
言葉は、時として役に立たない。
畏れを知らぬ者、後ろを振り向かぬ者。それらの者にとって言葉は彼らの足取りを止められるほど重くはない。
「俺らが例えここで倒れようとも、マートン隊長率いる更なる別働隊が本陣へと特攻を仕掛けているはずだ。どちらにしろ、お前らに勝ち目などない」
言葉は俺らには役に立たない。サンツの声と悲鳴は役に立たない。
闇夜を背にして、紫金の目をもつ青年が剣を構える。
そうだ。
結局のところ俺たちは剣で語り合うしかないのだ。
ダジリスは誰にも気付かれないようにひっそりと笑みをこぼした。
あのライという黒装束の元隊長は、戦場の礼儀を知っていた。そのことに感謝する。
そうして再び戦いは仕切り直され、両者は剣戟の世界へと舞い戻った。

「第５２統合師団４３連隊、元・連隊長マートン・ディアスと申します。お見知りおきを、マーヴェル卿」

剣戟と喧騒が騒がしい本陣の中でその男の名乗りは明朗としていて、マーヴェル卿の耳に届いた。

既に護衛の２人はこの男に切り捨てられていた。

地面に横たわる護衛の生気のない目を見て、この現実を嫌でも理解してしまう。

「唐突ですが、お命頂戴に参りました」

「な、なな、なぜだ！　お前ら練兵団は我ら貴族の手足となりて帝国を守りし部隊ではないか」

「あなたたちは手足を粗末に扱いすぎた。そういうことでしょう。なんなら卿の手足の指を１つずつ切り落としてあげましょうか。粗末にされる側の気持ちがわかるかもしれません」

そう言いながら一度鞘に納めていた剣を再び引き抜く。

その鈍色の剣に自分がもっている剣にはない怪しい光を認めてマーヴェル卿は腰を抜かす。あのような剣など見たことはない。戦場で血を吸い、敵の魂をも宿してきているのではないか。そうとまで思わせる。

「や、やめろ。なにが望みだ。先の大戦での報償が不満だったか。俺の膝元だったら多少好き勝手させてやれるぞ」

「俺たちが求めているのは、お前には一生かかっても用意できない」
そういって剣を上段に構える。
周囲では混成討伐隊が分散され押し負けていた。
元々練兵ということもあり実力差も大きい。
「死んで償ってもらおう。せめてもの情けとして苦しくないように……ぐッッ！」
マートンの体が衝撃を受けて後ろへと後退する。
マートンがマーヴェル卿の首を刎ねようとした瞬間、横の森から馬が飛び出しマートンへと体当たりをかましてきたのだ。
それを辛うじて体をひねって直撃を避けながら、マートンは馬を素早く見据えた。
良い馬だ。だが、相当に疲労している。走らせ続けたのだろう。馬は泡を吹く寸前だ。口元を苦しそうに歪めながら呼吸を休めているようだ。おそらく身体強化をかけられて実力以上の走行をしてきたのだろう。
そして、『彼』はその騎乗にいた。
「久しぶりじゃん。マートン」
肩口で切りそろえられた金髪を後ろへと流しながら鮮やかに下馬する。
顔に残る大きな切り傷は彼を双子の兄と区別する重要な役割を持っている。
双竜の片割れ、と言われる男に対し、マートンは慌てることなく返答した。
「お久しぶりです。よもやこんなところでお会いするとは思いませ

んでした」

少し悲しそうな顔をしながら剣先を地面に向けて軽く礼をする。

「第５２統合師団、師団長アデス・ワーニー候」

それに対しアデスと呼ばれたかつての上司は目を細めながら軽く応える。

「戦場で別れて以来？」

「えぇ、３年ぶりです」

そうして言葉を交わしたかつての戦友同士は、既にお互いがかつてのような関係を紡げないことをよく分かっていた。

## 第1話「残り火」？

◆◆◆◆◆

最初にあったときは軽薄な男だと思った。

「アンドリューのおっさんから話は聞いてる？　新しく第５２師団の師団長になったアデスです。よろしこ」

およそ貴族らしからぬ言動。

貴族にも平民に対しても軽薄な態度。前の師団長は貴族意識の高い付き合いにくい男だったが、今回はその対極のようである。

「４３連隊で隊長を務めております、マートンと申します」

「ん、まあ気張らずにいきましょ。ここで気を使うより本番でうまくやりたいもんね」

軽薄な男だと思った。

威厳もなく、傲慢さもなく、思慮深いところもない。マートンが初めてアデスに会った時、そんな感想を抱いた。

だが、そう言って一笑に付すほど彼の実績は軽いものではなかった。

『破炎のアデス』

彼が術技で操る炎は敵に破滅をもたらす。死ではない。彼が力を

振るった後には敵がいた痕跡すらなくなるという話だった。
存在を抹消する炎の術技。それがアデスの力だ、と。
若干27歳で師団長にまで昇り詰めた若き騎士のホープ。戦場で叩きあげられた若き実力者。
それを示すように、彼の軽薄な態度とは別に彼の身につける武具はどれも使いこまれていた。戦場で戦ってきた者の証だった。

「戦争ってーのは、あれだね、くそったれだねー」

アデスがそんなことを言い出したのはいつだっただろう。酒を煽る彼の頬が野営の炎に照らされ赤くなり、吐く息は白かったから寒い夜だったはずだ。
連隊長を束ねた軍議が終わり、隊長たちが散った後、アデスはマートンを誘って自分のテントの脇で酒を飲んでいた。

「…師団長の騎士様がそんなことを言っていいんですか？」
「マートン厳しいー」
「あなたが緩すぎるだけだと思います」

ハハッとアデスが笑う。
話していると本当に彼はそこら辺にいる人間のようだった。およそ騎士らしくない。どちらかと言えば商人などのほうが合っていそう

だ。
だが、彼と戦場をいくつか共にしたマートンにはそれとは違う彼の面も知っていた。
冷酷無比に敵を焼き払う破炎の異名をもつ理由をまざまざと見ていた。

「一昨日の指揮は見事でしたよ」
「なーにー？　褒め殺し？」
「そこまで褒めてません。調子に乗らないでください」
「ひっでー！」

戦場にいる時のアデスと、こうして酒を飲みかわしている時のアデスはまるで別人だ。

「よくあの場面で左翼へ展開しましたね。結果的に良かったわけですけど、南東のほうから別働隊が本陣にくる可能性はなかったんですか？」
「あったかもねー」
「…え？」
「でも、ホラ。別働隊ったって数十人でしょ、あっちの兵力的な余裕からいって」
「はあ…まあ」
「数十人だったら問題ないよ」
「でも――」
「俺だけで消し炭に変えられる」

反論しようとしたマートンを遮ってアデスが言い切る。
アデスが操る術技は強力だ。
貴族と平民の違いをまざまざと見せつけられる。
彼が『破炎』であることを恐れる練兵も多い。

だが、マートンは違った感想を持っていた。
このアデスという貴族は「守るために切り捨てることができる男」なのだ。彼は自分が率いる第５２師団を生き残らせることを第一に考えているのだ。そのためになら敵を焼き払おうが何をしようが関係ないと考えている。だから味方から畏怖の対象となろうとも力を振るうことを厭わない。
彼が『破炎』と呼ばれる理由はその圧倒的な火力にある。その火力でさえ、敵に苦しみを感じさせないほど一瞬で殺すための彼の情けにすぎない。相手を殺すだけなら体の一部を炎で破壊すればいいだけなのだ。
畏怖の対象となりながらも彼が師団全体から慕われているのはこういう事をどことなしに感じている者が少なからずいるということだろう。

「数十人を相手にできますか。さすがは騎士ですね」
「騎士、ねえ。騎士じゃなくてもできるやつもいるって」
「まさか！　そんなの――」
「黒装束、とか」

酒を煽りながらアデスが自嘲的に笑う。

「…会ったことがあるのですか？」
「４つ前の戦場で、かな？　凄いね、彼らは」
「そんなに…」
「ちょっとやそっとじゃ攻略方法が思い浮かばないよ。単純に力負けしそう」

彼らがここにいれば戦場はもっと楽だろうねー、と言いながら酒の最後を飲み干してしまう。

「彼らは今は？」
「確かラディバル奪還作戦で動いているはずだよ」
「…また厳しい戦地ですね」
「だねー」

目の前で焚かれていた火が弾けた。パチパチと音を立てて火の粉を噴出させる焚火を見ながらアデスが誰ともなしに呟く。

「まあ生きていれば会えるよ。何事も生きていることが重要だと思うけどねー」

◆
◆
◆
◆
◆

シャリン、と剣を引き抜くと鞘が音をたてた。
アデスが使っている剣は3年前と全く変わりがない。使いこまれた剣だ。
それをマートンに向けて構える。

「…構えなよ」
「できることならあなたとは戦いたくなかった」

「知ってるよ」

アデスが悲しそうに微笑む。

その笑みをみてマートンはやはりこの人は人の上にたつ人なのだと思い知った。軽薄さは彼の一部ではあったけれども、それ以上に表面的であったのだ。

「わざわざこんなところまで来たのですか？」

「部下の不始末は俺の不始末だしねー」

「…相変わらずよく分からないことをおっしゃる。もう部下ではないというのに」

「気にすんなって」

「アデス候！　何をのんびりとしているのか！　早くその男を殺さなくては！」

アデスという味方を得たマーヴェル卿が強気になって叫ぶ。

アデスが来るまでは散々アデスのことを疎ましく思っていたが、自分の命の危機であるならそのような事には構っていられない。

「なんたる汚点だ、練兵団が盗賊になるなど！　貴様こそ死をもって帝国に償え！」

盗賊団が練兵団崩れだということには衝撃を受けた。確かに彼らの強さは街の守備隊を遥かに凌駕していた。だが、もと練兵団といえども貴族に逆らうものは許されない。

「さあ、アデス候。さっさと貴殿の術技で彼らを倒して街で祝杯といきましょう。ささやかながら我が屋敷には秘蔵の酒がぐへあっ」

アデスにすり寄りながら今後の関係性をつくろうとするマーヴェ

ル卿の頬にアデスの裏拳が綺麗に入る。
「まあ、お前がなんでこんな事をしているのかは想像がつくよ」
「…」
「俺だって、イライラするからな、こういうクズみたいな貴族を見ると」
そう言って侮蔑のまなざしをマーヴェル卿に向ける。
「マーヴェル卿、貴行の拳についている紋章は飾りなんですか？ 所詮紋章をかざして平民に膝をつかせて満足していたのですか？ 王家に与えられた紋章が何のためであるかを忘れたのですか？ その紋章をもって術技という強大な力行使し民を守れ。そう皇帝はおっしゃってなかったですか？ 特権能力という意味を深く考えられよ。霊術を使って民を守ることができないものが貴族を名乗るな！」
そこまで一息に言って少し満足したように息を吐く。
「…正しいけれども綺麗事ですね」
その背中にマートンが語りかける。
「そうかもしれないねー。現にこういう状況になってるし」
「あなたらしいといえば、あなたらしいとも思います」
「そーか？ よく分かんねぇや」
お互いそう言って笑い合う。
もうかつての関係には戻れない。師団長と連隊長という関係性には。片方は軍を抜け、反旗をひるがえしている。片方は軍部で力をつけて、政治の領域で才を発揮している兄とともに双竜と言われる

までになっている。
境遇を恨んだりはしない。互いの道が逸れた、ただそれだけのこと。
どちらかが死なないと終わらない戦い。
それはマートンが剣を構えたときから静かに始まった。

## 第1話「残り火」？

世の中の術には大きく大別して魔術と霊術がある。魔術は魔力を使い、霊術は霊力を使う。

魔術のほうが一般的だ。人は大抵生まれながらに大なり小なり魔力をもって生まれているために、生活のなかでもそして戦争のなかでも魔術は一般的に使われる。

しかし霊術は違う。大気中に満ちていると言われる霊力を集約し発動する。その威力は魔術の約３０倍と言われるほどに強力だが、大気中の霊力を集約できるのは『紋章』を持った貴族にしかできない。紋章は大気中の霊力を集約するためのものであり、またその紋様の違いによって普通の霊術とは違う独技＜ユニークスキル＞といわれる特殊攻撃が可能になっている。

魔術も霊術もそれぞれ気配でなんとなく存在がわかるものだ。アデスとマートンの周囲にいる者は、２人がそれぞれ魔術と霊術を発動したことを感じ取った。

戦いが――始まる。

幾度となく剣が打ちあわされる。

その苛烈さと美しさに周囲で争っていた守備隊と元練兵も自分たちの戦いを緩めて目を奪われる。

「…情けなら無用です、アデス様！」

剣を振るいながらマートンが叫ぶ。

「我らはもう行くところがない！　そして帰る地もない！　全てを失ってしまったのです」

喋りながら剣を振るうことは体力を消耗する。だが、そんなことはもうどうでもよかった。魔術で限界まで身体を強化する。後先など考えずに、全力で。

剣を振っていると戦場を思い出す。

何年も振り続けた剣は手によく馴染む。

もう、戻れないのだ。

マートンはそう感じていた。

剣が受ける衝撃からアデスが手を抜かずに剣を合わせてきていることがうかがえる。

彼は、そういう人間だ。

こちらの意図を組んで躊躇いない本気で相手をしてくれる。

もう、戻れないのだ。

剣を握るのに慣れることはすなわち人を殺すのにも慣れてしまったことを意味する。
鎧を貫き、割り砕き、肉を裂いてきた。
人の命が自分の剣の先で失せ、肉体が死体へと脱力していくのをこの手でいくつも確かめてきた。

もう、戻れないのだ。

部下の目が自分を見返すときに、そう感じたのだ。
帰る場所のなくなった者たちの切実な想い。
それが例え憎しみであったとしても、それをマートンは否定することができなかった。

俺は、隊長だから。

だから彼らが望むのなら、先頭に立とう。
行き先が地獄であったとしても、先頭に立とう。
誰も助けてくれないのなら、せめて俺が彼らを救わなければ。
だから――
だから――

マートンは自分の鎧の胸板を見た。
赤い――染みが広がり始めていた。
それなりの強度をもっていたはずの鎧から剣が突きだしている。
一瞬の隙をついて霊術による『加速』を使い、背後からの刺突を見舞ったアデスは剣を更にえぐりこむ。

「――ッ」

痛みはなかった。アデスが突いてきたのは急所の一つだ。痛みを感じるよりも先に神経のほうが麻痺してくる。
体の、力が抜ける。
後ろ向きに倒れていくマートンの体をアデスは後ろから体を寄せて支えた。

「…すまなかったね」

アデスがマートンの耳元で囁く。
マートンの手から剣が滑り落ち地面へと転がった。

「停戦条約が結ばれた時にお前たちを殺しておくべきだったのかもしれない。ヌフラの大罪のことを知らないうちに、停戦の喜びに沸いているうちにお前たちを殺しておくべきだったのかもしれない」

第５２師団には情報統制が掛けられていた。ヌフラの大罪の事実は、４３連隊の士気を下げるとして教えられていなかったのだ。

「絶望を味あわせてすまなかった」

喜びの絶頂にあるうちに、故郷の絶望的な悲報を聞く前に、死んだということも分らないほど圧倒的に焼きつくしてやるべきだった

とアデスは後悔した。

「…相、変わらず……よ、く分からな、い方だ…」

最後の力を振り絞って言葉を紡ぐ。

「…でもあ、なたで…よかった…」

この男に殺されるなら文句はない。

貴族の地位でありながら平民のために霊術を振るう心やさしき男。

普通の貴族は師団のために霊術を行使しない。霊術は術者に負担をかける。だから自分のいる司令部を守るためか、騎士隊の進撃のときにしか霊術を使わないのがセオリーだった。

だが、彼はそれをしなかった。

他の傲慢な貴族と相打ちになって憎悪の中で死ぬだろうと思っていた。それよりはかつての戦友に命を奪ってもらう方がマートンにとってはよっぽど良かった。

「…アデス様……部下を…彼ら、も既に…行く、ところがありません……」

最後の頼みを。

傲慢ともいえる頼みを。かつての上官に頼むには相当に重い頼み。

「わかってる」

それでもアデスは頷いた。

そうやさしく囁く。と同時にアデスの右手の紋様が輝く。紋様に集められた霊力が展開した。

「だから、もう休め」
マートンが安堵の笑みを浮かべるのと同時に、彼の体が内部から炎に包まれて一瞬で灰になった。

マートンの体が闇夜のなかでひと際明るく輝いて、消えた。
何も残らなかった。死ぬ前に手放した剣だけが地面に転がっていた。
彼が身に着けていた鎧も何もかもが蒸発していた。
その光景に誰もが動きを止めていた。
守備隊も貴族も。元４３連隊の練兵たちも。
だが、一番早くに状況を把握して行動したのは元練兵たちだった。
「――ぐぅッ」
守備隊相手の攻撃を止め、その剣を自らの胸に突きたてる。
一人がそのように自決を図ると、次々と連鎖するように元練兵たちは自決していく。そうして全員が自ら命を断とうとした。
だが、自決というのは簡単ではない。
介錯する人間もおらず、一人で命を断つには相当の苦しみが伴う。
「わかっているよ、マートン」

苦しんでいる元練兵たちを見て、アデスは空中に向かってそう呟くと、右手をかかげた。

「≪展開≫」

右手の紋様が光り、霊力を充填していく。そして目の前に赤い発動陣が展開された。アデスの手に彫られていたワーニー家の紋章が陣には写しこまれている。

「ワーニー家の独技で送らせていただこう。安らかに休め、帝国の戦士たちよ」

そういって少しだけ言葉を区切る。

そして次の瞬間――

「”破炎”」

そうアデスが呟くと展開されていた紋様が光り輝いて四散し、それと同時に赤き閃光が元練兵たちへと奔った。

その眩しさに守備隊が目を覆い、再び目を開けたとき目の前には焼け焦げた地面があるだけで、人のいた痕跡は何もなくなっていたのだった。

## 第1話「残り火」？

「停戦条約。くそったれの条約だ。戦争が終わったようにみせた、見せかけの希望」
「…」
「戦争は終わっちゃいない」
「…」
「お前にも分かるんじゃないのか、狂戦士とまで言われたお前なら」
剣と斧を打ち合わせた状態から全体重をかけて力を込める。体格差も使ってライを押し込めていく。
「黒装束は全滅したと聞いたぞ。お前も仲間を失ったんじゃないのか」
剣を折る方法は衝撃だけではない。へし折るように力を掛けていく。
「お前の戦争は終わってしまったのかよ！　えぇ！？」
「…俺の戦争、だと？」
下から見上げるライの瞳が見開かれる。
一瞬の隙を見て、ダジリスの腹部を蹴りあげて距離をとる。
ライの頭に、雨のなかで花の大輪のように微笑む女性の姿がよぎった。
女が――血にまみれながら、笑う。
あれからどれくらいの時間が経ったのだろう。未だに風化しない

記憶だ。
戦場の記憶はそこで終わっている。
（俺の戦争…）
剣戟の合間に見える女の笑顔が、どうしても頭から離れない。
ライは熱に浮かされたような気分で剣を振るい続けた。

◆◆◆◆◆

女が笑う。
雨に打たれ、流れていく血はすぐに泥と混じる。
つい先刻まで溢れていた狂気は霧散していた。
ロトワールの地は荒れ果てていた。地面には大きな穴がいくつもあり陥没している。亀裂の間に原型を失った死体がいくつも横たわっていた。
『…ごめんね』
女が笑う。その笑みは引きつっていた。
抱きかかえる女は冷たい。ライを包みこんでいた暖かさも柔らかさもない。

悲しみでもなく、憎しみでもない感情が高ぶってくる。
俺は――
視界が白く、白く、染められていく。
頭の中が白熱していく――。

◆◆◆◆◆

「――――ッッ」
女は杉の木の枝の上で体を震わせた。
バランスを崩すほどではなかったが、少なくない衝撃が女の心を襲う。
同時に夜だと言うのに周囲の木々から鳥が本能的に飛び去ろうとしている。
離れた場所へと目を向ける。
「これほどまでのっ、殺気とは――」
肌がビリビリと震えるような圧力である。並大抵のものでなけれ

ばパニック状態になってしまうだろう。それか気絶である。それほどまでにこの気配は恐ろしかった。

「これが、狂戦士」

彼の2つ名を呟く。

後ろで従者が静かに同意した。

「ひぃぃぃぃぃ」

マーヴェル卿はパニックになっていた。一瞬ぞわりと背筋が寒くなったと思ったら体中が粟立つような感覚に陥る。

体中を何か不快なものが這いずりまわっていく。得も知れない恐怖が湧きあがる。

もし彼に余裕があって、周りを見渡すことができたなら守備隊のほとんどが同じようにパニック状態になっているのが分かっただろう。

パニックになっていないのは一人だけだった。

「――静まれッッ」

鋭い一喝が耳に届くと同時に体がまた別種の気配に支配される。

圧迫感はあるものの皮膚が粟立つようなものではない。浮足立ちそうになる体を無理やり地面に押さえつけてくるような圧力。

「落ち着けッ！　取り乱すなッ」

鋭く、それでいて焦らせない落ち着いた声でアデスが叫ぶ。
守備隊も体を覆う別種の圧力がアデスから発せられていることを理解したのだろう。素直に言葉に従う。

（これが…戦地帰りの騎士か…）

驚嘆すべき存在感に守備隊は安堵する。
一方、アデスのほうは周りに悟られないように、胸の奥から湧き上がる焦燥感を必死に押さえつけていた。

（この気配…ただ事ではないぞ、マジやべえ。戦場でも滅多にお目にかかったことがねぇぞ。
これは――一体！？）

目の前の青年から信じられないほどの殺気がほとばしっている。
体格差を利用して斧で押し込めていたはずだが、気配だけで吹き飛ばされそうになる。

「――くそっ」

思わず再び距離を取る。

ゆらり、と緩やかに立ち上がった青年の背後に殺気が具現化しているようだった。

暗く黒い影が青年の背後から滲み出ている。

「！？」

立ち上がった彼の体から傷がもの凄い勢いで癒えていく。

流れていた血は一瞬で固まって剥がれ落ちていき、その下には真新しい皮膚が見える。

軽い切り傷は跡かたもなく治っていく。深い傷も血は止まっているようだ。

常軌を逸した光景と彼の殺気が混ざって非現実的な感覚が増していく。

「それは…一体何だ？」

だが、その殺気は行き場所を求めて蠢いているようだった。

これほどの強烈な殺気を自分に向けて発せられていたら、いくら戦地がえりのダジリスでも動きが鈍る。しかし、この殺気は明確に誰かに向けて発せられているものではないような気がした。

（何に怒っているんだ…この狂戦士は）

◆◆◆◆◆

『生きて、ライ』

女はそう言った。残されたわずかな体力。
喋らなくてもいつかは尽きるその命を最大限に使おうと、女は必死に言葉を紡いだ。
それがわかっていたからライも素直にその言葉を聞いていた。

『そして狂わないで』

狂戦士と言われた小柄な隊長に女は囁く。
すでに死の淵へと魂が離れていっている。
それでも、彼に伝えるべきことがあった。

『愛してるわ、ライ』

◆◆◆◆◆

（これは…悲しみ？）

大気に満ちる殺気が微妙に変化する。

その変化を敏感にダジリスは察知した。戦闘中に感じられる殺気ではない。むしろ戦闘が終わった後に戦友の死を悼んで自軍に満ちる気配に似ていた。

少し離れた所でライが剣を構える。

そして――姿が掻き消えた。

目で捉えきれないスピード。

反応できないほどのスピードであっても、彼のその気配がダジリスにはありありと把握できた。

目の前に迫った彼と目線がかち合う。

ダジリスにはライの浮かべている表情やその瞳に映る感情すら見ることができた。

（あぁ。お前は…狂わなかったんだな）

戦友が死に、帰る地すらなくなった。だからダジリス達４３連隊は狂った。絶望と諦観が体を満たし、狂った。狂って貴族の血を求めた。

狂ってしまえば楽だった。

（俺はもう、戦友や家族が死んだことが…悲しくなかったから）

狂ってしまったから。
だからもう目の前に迫る青年と同じ気配は出すことができない。
怒り狂うことはできても悲しみ暴れることはできなかったのだ。

（ライオネル、と言ったか…）

若くして黒装束の隊長であった青年の名を思い出す。
恐らく多感な少年時代を戦場で過ごしたのだろう。
それでも彼は狂わなかった。
繋ぎとめられていた。

（彼のように…俺はなれない）

諦めといくばくかの羨望に包まれながら、ダジリスは自分の体が鉄の剣で切り裂かれるのを感じていた。
目を閉じると同時に今までの仲間たちが全員見えた。
マートン隊長に多くの部下。
そして――妻と娘。
彼らが微笑む。お疲れ様、と。
痛みなどもう既になかった。ただ、狂ってから久しく感じていなかった悲しみが、胸の奥から湧き上がってきた。その強烈さに涙腺が緩む。
ダジリスは涙を浮かべ微笑みながら絶命した。

## 第1話「残り火」？

「……ろ。…きろ！……起き……のバッ……きろっ！」

誰かが怒鳴っている。
ゆっくりと意識が浮上していく。
ゆっくりと――そして最後は急激に。

「起きろ！　サンツ！　この野郎！」
「うわっ、は、は、はいっ！」

守備隊長の顔が目の前にあって驚く。
既に夜は明けていたらしい。
まだ薄暗い中を兵士が歩き回っている。

「あれ？　あれ？　へっ？」
「お前、気絶してたんんだよ」

隊長がため息を吐きながら立ち上がる。
サンツも立ち上がろうとして力を入れたが、立てなかった。

「あの…」
「ん？　どうした？」
「あの…腰ぬけちゃったみたいっス」
「アホか！　情っけない！　それでも守備隊か！」

馬鹿にされながら手を借りて立ち上がる。隊長の肩を借りながら
しばらく立っていると足の感覚が戻ってきた。
視界が広くなると、周りの惨状が目に入ってくる。

「これは…」
「お前以外は全滅だ。お前だけでも生きててくれてよかったよ」
沈んだ声で隊長が言う。部下を残していったことを後悔しているのだろう。
死体が顔に布を掛けられた状態で並べられている。
慌ててその中に『彼』の姿を探す。
鎧をつけていない死体はいくつかあったが、それはどれも『彼』ではなかった。
そのことにホッとする。
「気絶して生き残ってたってのは君？」
後ろから軽い声が聞こえた。
振り返ると、少し長めの金髪を後ろに流しながら男が立っていた。
「あ、はい。俺っす」
「あー、じゃあ覚えていること話してくれる？　ちょっち色々聞きたいことあるし」
「はぁ」
気のない返事をしながら横にいる隊長を見る。誰ですか、この人。という視線を受けた隊長は戸惑った顔をしながら返答する。
「帝都騎士候のアデス・ワーニー様だ」
「へー、帝都騎士の……て、て、て、帝都騎士！？」
「の、アデス・ワーニー様な」
「アアアアア、ア、ア、アデス様！？　双竜の！？　破炎の！？」

慌ててアデスに視線を戻すと、本人は気にした様子もなくへにゃりと笑う。

「もも、も、申し訳ありませんでした！　自分は東地区守備隊第4部隊のサンツ・ニッカです！」

「あー、いーよ、あんまり緊張しなくて」

「ははははいっ！　緊張しないように努めさせていただきますっ！」

全く緊張の解けないサンツにアデスは苦笑する。

「この子、面白いね」

「恐縮です。私どもの教育が足りず…」

「あー、いーよ、いーよ。じゃあ君はあっちで死体に関する指揮を取ってくれる？」

「はっ。では失礼します」

彼も真面目だねー、と隊長の背中を見ながらアデスはぼやく。

そしてサンツの目の前で手をひらひらさせる。呆然としていたサンツはその動きでハッと我にかえる。

「す、すいません」

「いーよ。でさ、隊長くんにも離れてもらって君に聞きたかったことなんだけど」

そう言われて隊長がわざわざ別の場所に行かされ、アデスと二人っきりになっていることにサンツは今さらながら気付いた。

そんなサンツに先ほどとは打って変わって真剣な目つきになったアデスが問う。

「君は見たー？」

「何を、ですか？」

アデスがにっこりとほほ笑む。そのやさしい笑みに肩の力を抜いた瞬間だった。

「ライオネル・スタンドバルド」

その名前にビクリと体が震える。その様子をアデスは注意深く見ている。

その目線に射抜かれながら、サンツは必至に色々と考えていた。ライは自分の命の恩人だ。自分では絶対に敵わない敵から救ってくれた。命の恩人。黒装束の狂戦士。

ライを見たのか。その問いに素直に頷いてもよかった。

だが、本当に良いのか。黒装束は全滅していた、という話だった。その隊長が生きていた、というのは何か軍に問題を呼び起こすのではないだろうか。

アデスの視線からその様な雰囲気を感じる。

そのことが素直に頷くことを引き止めていた。

「ははっ、そう警戒しなくていいよ。君は意外と用心深いね。それに聡い」

アデスが視線を緩めて笑う。先ほどの軽薄さは少し薄れ、真剣さが覗いている。

その言葉からライの事がバレているとわかってサンツは少し慌てた。

「あの…」

「心配しなくても大丈夫。元々ここにある惨状を見れば大体想像はつくんだ」

そういってアデスは後ろ手に持っていたモノを掲げて見せる。
それは４３連隊の元練兵が着ていた鎧だった。
しかしそれは歪み、その歪みの中心にははっきりと指の本数がわかるほど拳の跡がついていた。

「拳の跡が残るほどの打撃。大男の体を上下一刀両断するほどの力量。俺の知り合いでこれができるものは多くない」

死体が並んでいるほうを見ると大男の上半身だけの死体が袋に入れられているところだった。見覚えがある。副長でダジリスと名乗っていた男だ。腹の所で一刀両断されたらしい。

「そしてこの短剣が残ってた」

黒い艶消しのされた短剣。小刀ともいえるような短剣を持ってアデスが笑う。

「ライが生きていたらまあ軍部としては色々黙っちゃいられないことも多いんだろうけど」
「…」
「でも俺は素直に嬉しいよ。かつての戦友だからね」

その言葉を聞いて安心する。
そんなサンツにアデスは短刀を投げてよこす。

「それをライに返してあげてくんない？　彼にとって大事な短刀のはずだし。自分、ライの居場所知ってんでしょ？」
「は、はい」

それじゃ俺からのお話は終わりー、と言って去ろうとするアデスをサンツは慌てて呼びとめた。

「アデス様！」

「んー？」

アデスが振り返ると、腰を９０度に折って頭を下げているサンツがいた。

「自分は、４年前、商都コマーサンドに戦火を避けて母と妹と共に逃れてきました！」

「…」

「必死に共和国軍から逃げている中、背後のサン＝ライズで帝国軍第５２師団が共和国軍を押しとどめていてくれたと聞いております！　その指揮をとってくださったのがアデス様だとも！

陳腐な言葉で申し訳ありませんが、感謝しております！　自分がここにいられるのもアデス様のお陰です！」

頭を下げたまま一息に言う。

アデスがこちらへ向き直ったのが気配で分かった。

「…『彼ら』と話した？」

「…副長のダジリス、様と、少しだけ」

『彼ら』が誰の事を指すのかすぐに分かった。

そう、と呟いてアデスはしばらく黙った。

「彼らを責めないで欲しい。身勝手な要求だとは思うけど」

「…もとより自分には、その資格がないと思っています」

「そう…ありがとう」

サンツの答えにアデスは心底ホッとした様子だった。

「…母親と妹さんは？」

「今も商都にて元気に暮らしております。豊かとは言えませんが、幸せだと思っています」

「そう、それはよかった」

彼らも、とアデスが言葉を続ける。

「彼らも自分たちの行動が誰かを生かしていたと知っていただろうに。忘れてしまったんだろうね」

「…」

「ありがとう、サンツ。彼らの炎は消えてしまったけれども、形を変えて君たちが残していってくれると信じてるよ」

「…はい」

ありがとう、と肩を叩かれる。

その強くはないものの重く何かが流れ込んでくるような手のひらを感じながらサンツは涙をこらえていた。

## 第1話「残り火」？

大地が燃えていた。
地面はひび割れ、陥没している。
至る所に血が散っているものの、地面に吸い込まれて既に曖昧だ。

誰も生きていない。

体は既にその身を包む鎧と同じ温度になっている。
冷たい。
その事実が重い。

『一番最初にこの戦争の終わりを見届けろ』

その言葉に頷いた仲間はもう動かない。
仲間が命を散らしたその大地。
その地の名前を俺はきっと一生忘れない。

ロトワール

いつかこの地にも花が咲くのだろうか。

夜盗退治の任務が終わって2日が経った。
他の混成部隊より早く商都に帰還したライは、いつも通りの朝を迎えていた。
目覚め、顔を洗い、窓を開けて空気を入れ替える。
冷たい空気に体を震わせながら、体の屈伸運動を行う。
まだ傷が癒えずに痛みが走る左肩をいたわりながら体を動かし終えると、ドアの下に突っ込まれていた新聞を取り上げて読む。新聞といってもハバーレス街の近況を知らせる数枚の紙で2日置きに発行されているものだ。
その中から自分に必要な情報をピックアップしながら同時にパンをかじりながら朝食を済ませる。
その後、簡単に身支度を整えると、腰にいつもの短刀がないことに少し顔をしかめ、代わりに別の短刀を腰に差して家を出た。

「おはよう、ライ」
「ライだ、おはよー！」
「あぁ、おはよう」

市場にでると朝早くから店を構えている住人から挨拶が飛び交う。
それに律義に答えながらライは市場を巡回した。

「おい、珍しい果物が入ったぞ、食ってけ」

そう言って投げられた果物を手元のナイフで手早く皮を剥く。
半分を群がってきた子供に与え、残り半分を齧りながら店主と話をする。

「最近はどう？」
「悪かねえな。良くも悪くも変化なしってとこだ」
「そう」

そうやって近況を聞きながら歩く。
途中でケンカ腰のチンピラを適当にあしらい、座り込んだままの浮浪者の前に小銭を放る。
ゆっくりと時間をかけてハバーレス街を見回り、自宅のほうへと帰ってきたライはそこで包帯を持って待ちかまえているルミナに出会った。

「さあ！　ライ、治療のお時間ですよ！」
「…まともな薬はできたのかよ」
「安心して！　昨日よりはバッチシ！　治りはもっと早いわ」
「俺が言ってるのは痛みの方だバカヤロウ。お前の薬は痛みが伴うからダメなんだってば」
「良薬は体に痛いのよ」
「聞いた事ねえよ！」
「自然治癒を高める薬なのよ？　ちょっと痛みとか匂いとかがきついだけじゃない」
「充分なマイナスだよ！」

通りの中心で言い合う二人を周囲はいつものように笑ってやりすごしている。
埒が明かない押し問答を続けているとにわかに通りの向こうが騒がしくなった。

「ん？　何かあった？」
「あ！　ちょっとライ！　逃げないでよ。治療するの、ちぃーりょぉーうぅー」

「あああああ、もうちょっと待てよ。向こう少し見てくるから！」
「にぃーげぇーるぅーなぁぁああ」

服を引っ張るルミナをそのまま引きずりながら騒ぎの中心へ向かう。

「どうした？」
「お、ライ、ちょうどいい所に。いやな、こいつが――」
「いてえって、離せよ！　俺は人に会いに来ただけだってば！」
「何をてめえ、守備隊の制服着て人に会いに来た、だあ？　調子乗ってんのか！？」
「乗ってねえよ！　マジで知り合いに会いに――」
「大方、うちらハバーレス街を馬鹿にしに来たんだろう！？　ふざけやがって」
「違えっつってんだろ！　俺は、人に、会いに、来たの！」
「じゃあそいつの名前を行ってみろよ、ああん？」
「痛え、痛え！　髪ひっぱるな！　ライだよ、ライオネル・スタンドバルドに会いに来たんだよ！」

その言葉を聞いて周囲が静かになる。
人並みが割れるようにして、ライの目の前に道ができる。

「呼んだ？」

その声にうずくまっていた青年は顔を上げる。

「ライ！」
「なんだお前――」

ライの姿を認めて心底ホッとした顔をする。

「えっと……名前なんだっけ？」

安堵していた青年がずるっと再び崩れ落ちた。

「サンツだよ！　東地区守備隊第４部隊のサンツ・ニッカだ！」

「……あぁ、うん。大丈夫、実は覚えてた」

「嘘つけ！　妙に間が空いたぞ！」

相変わらず騒がしいサンツを適当にあしらいながら、服をずっと引っ張っているルミナを見やりライは大きくため息をついた。

## 第1話「残り火」？

「東の守備隊とはいえ、守備隊服を着てハバーレス街へ来るなんて、自殺行為だぞ」
「仕方なかったんだよ。勤務のあと直接来たし、こんなに絡まれるとは思ってなかったし」

ライはそう言いながらテーブルの上にお茶を置いてやる。
そのお茶を受け取って息を吹きかけて冷ましながらサンツは反省したように呟いた。
今は隊服を脱いで、ライから借りた服を着ている。

「これ、ちょっと小さくね？」
「お前の横幅がでかいんだろ」
「なにぃ！？　デブってことかよ！？」
「そう、ともいうね」
「いや、それ以外ないっしょ！」
「……ふくよか、とか？」
「遠まわしなだけじゃん！　…ってか熱い、お茶熱い！」
「…もう少し静かにしてらんないのかよ」

舌火傷した！と騒ぐサンツに水をぶっかけたくなる衝動を抑える。
代わりにだしてやった水をサンツが飲み干すと、ようやく話が先に進んだ。

「で、何しに来たの？」
「ん？　あぁ、そうだ、忘れてた」
「…忘れてたのかよ」

落胆するライを尻目に、サンツは懐から探り出したものをテーブルに置く。
黒塗りで艶消しのされた短剣。
「これは――」
「大切なものなんだろ？」
革の鞘にはいったそれはよくよく見れば使いこまれているがとても質のいいものだった。
片刃で、丁寧に艶消しがされている。
ナイフは肉厚でも薄くもないが、その鋭利さは他に類を見ない。
飾り気のないシンプルで美しい短剣。
「この前の場所に落ちてたんだ。ライの大切な物だって聞いたから」
「…誰から？」
「アデス・ワーニー様から」
「…アデス？　なんであいつの名前が出てくんの」
「この前の夜盗のことでこちらにいらしてたんだよ」
「…そうか、あいつ…あぁわかった」
短い会話の中から夜盗となった４３連隊の元練兵とアデスの関係性を把握したらしい。
口をつぐんだまま短剣に手を伸ばす。
「大事な、ものだったんだ？」
その手つき、目つき、雰囲気そのものが柔らかくなる。
短剣に込めている想いの一端がサンツにも見えた気がした。
「黒装束のときのもの？」

「あぁ」

静かに革のナイフから短剣を抜く。
全く光を反射させないその短剣は、それでもなお鋭利さを誇示していた。

「形見だ」

そうライが呟く。

「隊の剣だったからな」

全滅した、隊の。黒装束の。
皆が持っていた短剣だという。
模様もなく、隊章も彫られているわけではない。
シンプルで、そして鋭利な短剣。
それが黒装束の隊を表していたらしい。

「あ、あのさ」

妙な沈黙を破ってサンツが切りだす。
言い忘れていたが言わなくてはいけないことがあった。

「この前の、あの時だけどさ、その…助けてくれてホントに――――」
「ラーーーーぁああイーーーーーぃぃぃぃ」

ありがとう、と改めてお礼を言おうとした空気を、けたたましく開いたドアが中断した。
ドアの向こうでは包帯と薬瓶を抱えたルミナが仁王立ちしている。

「ちーりょーうーのお時間ですよー。さっきからのらりくらりと避けているけど、このルミナ様を誤魔化せるとおもっているんでしょーかぁあああ？」

薬瓶をガチャガチャいわせながら入ってくる様は、どう見ても治療をする人間には見えない。罰を与えに来た悪役人といったところだ。

「ちょ、ちょっと待て。今ちょうど話こんでいるところで…」
「ええ、ええ。存じ上げてますともー。どうぞ話はお続けになってください。私は一刻も早くこの新薬の効果が知りたいのですー」
「お前の都合じゃねえか！」

先ほどまで短剣を握りしめてしんみりした空気だった部屋の中が一気に慌ただしくなる。

「はい、上脱いでー、肩出してー」
「ちょ、ちょっと待て。おいルミナ、おいちょっと待て」
「はいはい、暴れない。暴れるとどうなるのかなー」
「痛え痛え！　傷口を押す奴があるか！　お前ホントに人の傷治す気あんのか！？」
「痛い思いをしなければさっさと脱いで！　じゃないと傷口に指捻じ込むわよ」
「なんちゅー強引なやつだ！」

無理やり上を脱がされ、肩の包帯を乱雑に取られる。

「い〝っ！？　お前もっと丁寧に剥がせ！」
「知らないわよ。あたしのやることは薬を塗ることだけであって、包帯を巻いたり解いたりは専門外なのよ」

「お前の専門領域は狭すぎだ！」
続けて文句を言おうとしたライの肩口へ乳白色の軟膏がルミナの手によって塗りこまれる。
「――――ッッ！？！？！？！」
瞬間、ライは目を見開いて体を硬直させる。
しばらくすると汗が噴き出てきて、体が小刻みに震えだした。
「どうどう？　今回のやつは見た目も乳白色で綺麗だし、薬の匂いも結構苦労して抑えたのよ。でも効果は落ちないようにヨンモルギの花とタケサトイの根はいつもの倍入れたのよね」
嬉々として効果を聞きたがるルミナに対してライは震えながら顔を上げる。
「毎回、聞いている気がするんだけど…」
「ん？」
「ルミナの『いい薬』の定義って何？」
「えー？　まず治りが早いことでしょ、それから匂わないこと、それから見た目の綺麗さかな？」
「薬が引き起こす痛み、とかは？」
「えー？　どうせ治るんだからいいじゃん。一時の痛みくらい我慢しなさいよ」
「我慢できるレベルじゃねえんだよ！」
うっすらと涙すら浮かべてライが叫ぶ。
「刺すような痛みとか染みるような痛みとか熱を持つような痛みと

か1つならまだ耐えられるけど、お前のは全部入ってるんだよ！激痛で患者を殺す気か！？」
「なによー、ライなら耐えられるじゃない！」
「俺でギリギリとか、他の人だったら致命傷だぞ！？」
「だから最初にライで実験してるんじゃない！」
「あっ、お前、それが本音か！　やっぱり実験なのか！」

ルミナが新しく作った薬品をライに使ってもらう、もとい強制的にライに対して使うときに毎回起きる口論を繰り返す。
その様子を傍で取り残されたサンツは呆然と見ていた。

「ぷっ」

そして思わず笑ってしまう。
その笑い声に、サンツの存在を思い出したようにライとルミナが振り返る。

「なんだよ…」
「いや。ライ、あんたともあろう人がそこまでムキになってるのが面白くってさ」

そう言うとライの目つきが変わる。
まるで、自分の代わりの獲物を見つけたかのように。

「あー、ルミナ？」
「なによ」
「実はそこにいるのは、さっきちょっと下で騒動を起こしかけた東守備隊のサンツ・ニッカさんなんだが」
「へー、さっきのあの人か」
「実は彼は、さっきの騒動で少し擦り傷などを負っているようでね。

是非ケーニッヒ薬局の看板娘であるルミナさんの新薬で治してほしいそうだ」
「い〝い〝っ！？」
「え、本当？　嬉しい！」

ライの発言に、一人は顔を青ざめさせ、一人は嬉しいそうに微笑んだ。

「こんにちは。あたしルミナと申します。じゃあ早速治療しますねー」
「え、ちょっといや」
「あ、頬と首筋のところですねー」
「いえ、これくらい大した傷ではないので。というか俺そろそろ勤務の時間なんで失礼しまぎゃああ痛あああああ！？」
「あ、こっちも擦り向けてますねー」
「いや、結構であぎゃあああああ！　痛っ染みるっえぇっ！？
染み、いや激痛ってか熱い何これ何これ何これ！？」
「大丈夫ですよー。擦り傷にも聞きますからねー」

ケーニッヒ薬局の上のライの住居からは阿鼻叫喚の叫び声が響き、周囲の住人が心配そうな顔で様子を見守っていた。

## 第1話「残り火」？（後書き）

第1話はこれで終了となります。

テンポの遅い話ですが、ここまで読んで下さり本当にありがとうございます。

お気に入り小説に登録してくださった方々、本当にありがとうございます。これからも精進してまいります。

次は幕間を1つ挟んで、第2話へと参ります。

## 幕間　～三者三様～

「じゃあまた新しい薬ができたら来るね♪　サンツさんもまた是非いらしてください！」
「……」
「……」
「…サンツ生きてるか？」
「……いや、俺生きてる？」
「返事ができれば上等だ」
「……てか薬だけじゃなくて、包帯とかきつくて痛いんですけど」
「これがデフォルトだ。慣れろ」
「無茶な…」
「それに、今回はアタリらしい」
「アタリ？」
「まだこの薬は効き目があるみたいだからな」
「ハズレだと？」
「痛みがあるだけで、傷は治らない」
「拷問用だね…」
「違いない…」
「あー…言い忘れてたけど、あの時助けてくれてありがとうね」
「あぁ、別にいいよ。どういたしまして」
「いや、ありがとう。けど、これに巻き込まれたことに関しては文句を言いたい」
「週に一度、これを体験している俺の気持ちにもなれ」
「…同情するよ」

結局陽が陰って、部屋に斜陽が入ってくるまで二人の男は動かずに痛みに耐えていたとか。
もちろん、勤務に遅刻したサンツは隊長から更に怒られた。

◇　◇　◇　◇　◇

「姫、どうなさいました？」
「いや、なんていうか、今『彼』を観察してたんだけど…」
「ライオネル、ですか？」
「うん、なんかよく分からないものね」
「そういうものですよ。あの狂戦士を理解しようなんて無理です」
「うん、でも…不思議ね」
「？」
「市販の薬ってそんなに痛いのかしら？」
「姫？」
「ううん、なんでもない」

ハバーレス街から少し離れたところで銀髪の頭をふるふると振りながら赤い目をした美少女は従者に向かって次の指示を出していた。

「さぁ、計画を進めましょう」

歌うように、口から言葉が紡がれる。

「約束の時から千年が経過したわ。今こそ帝国は罪を償わなくては

いけない」
銀髪の隙間から赤い瞳が輝いた。
「贖罪の時よ」

◇　◇　◇　◇　◇

「おっちゃん！」
「うおっ！　なんだ、アデス、お前か。後ろからいきなり飛び付くな」
「いやー、熊みたいな巨体が見えたからさ」
「相変わらず上官に対する態度がなってないな」
「何言ってんの、俺とアンドリューのおっちゃんの間柄じゃない」
「おっちゃん言うな！　というか、お前また単独で行動したらしいな」
「あぁうん、後でその話をしに行こうと思ってたんだよねー」
「何があった」
「悪い事と良い事が１つずつ、かな」
「なんとも言えんな」
「まあ、後で部屋に言ってから話すよ。てかさ、おっちゃん来週くらいに視察あったよねー？」
「ああ、商都コマーサンドのほうへ４日ほどな」

「あーなるほどねー。いいね、いいね」
「何がいいんだ？」
「いやーそれも後で話すよー」
「今すぐではないのか？」
「ちょっと後でねー。俺この剣を自分の部屋に置いてきたいからさー」
「布に包んで…抜き身か？」
「まあねー。んじゃ、また後でー」
「おう」

そう言って自分の上官と一端別れアデスは自室へ戻る。
刃の部分を布で包んであったマートンの剣を取り出し、自室の一番日の当たる壁に掛けた。
そしてしばらく陽光を反射する剣を眺めたあと、自分の顔をパンっと一叩きして、再び部屋を出て行った。

## 幕間　～三者三様～（後書き）

改めまして、作者の紅茶大全と申します。

まずは、ここまで読んでくださり、ありがとうございます。
ここまで１６日間連続更新を行ってきましたが、ここで１週間ほど
お休みをいただきます。
次話の作成と、あとは誤字脱字を直したいと思っています。

さて、物語は始まったばかりです。

傷跡を残しつつも終わっていない戦争
救国の英雄と呼ばれ全滅した『黒装束』
その隊長で狂戦士と呼ばれたライオネル
戦友である破炎のアデス
その上司であるアンドリュー

そして、ライオネルを遠くから見つめる「姫」と呼ばれる女は一体
何者なのか！？

彼らを中心として物語は回り始めます。いえ、まだもう少し登場人
物は増えるのですが。
それでは続きは２話で！

## 第2話「芽吹く」？

◆　◆　◆　◆　◆

「決めたのか」

背後からかけられた声に体がビクッとする。

「アルさんか、びっくりさせないでよ」

「俺の気配に気づかないほど、考え込んでいたのか？　フィオナ班長」

背後の暗闇からゆっくりと近づいてくる熊のような体格をした男を、頭だけ後ろに回して軽く睨みつけるとフィオナは抜きかけていた手元の双剣を腰の鞘に戻した。

月光が彼女の髪とアルガレイの頬を青白く照らす。

場所はファーレン要塞の中庭だ。ラビアンス地方の中腹に位置する。黒装束は、ラビアンス地方を通り抜けて東部のロトワール地区へと移動している途中だった。補給を受け、部隊を休めるために隊長のライオネルは丸2日この砦で休息を取ることにしていた。

「で？　決めたんだろ？」

再びアルガレイが問う。

鎧を着ていると巨人のように大きい体は、鎧を脱いでいても大きい。分厚い筋肉の鎧を着込んでいると言った方がいいくらいに、ガタイがいい。

その体の大きさや、顔に生えているいるヒゲの濃さから熊男と揶揄される第三班長のアルガレイはその大きな体を中庭にあったベン

チに下ろす。
ベンチが軋みを上げた。
「…なにが？」
「誤魔化すなよ。俺に気づかないくらい思いつめていたんだろ」
「……」
「俺だってあの『薬』の意味くらい分かる」
「…アタシ、アルさんのそういう頭のいいところキライよ」

フィオナは唇を尖らせて、中庭の中央へ足を進めると目にも止まらぬ速さで腰の双剣を抜いた。
そして流れるような動作で剣を振るう。
剣舞。
月光を受けて双剣が煌めく。ピッピピッ、と剣が空を鋭く切り裂く音とフィオナが刻むステップの音だけが中庭に響いた。
時には剣を手放し、宙で回転させて再び手にとって空を切る。
剣はフィオナの体の周囲を飛び回り、月光を周囲へと反射させていく。
まるで月光を切っているかのようだった。
「…今さら迷うようなことでもなかったわ」

地面に膝をつく格好で剣舞を終えたフィオナが呟く。
アルガレイはベンチに座ったまま軽く拍手をして、言葉の続きを待った。
「元々、そういう条件でこの部隊に入ったのよ」
「ＥＦ２５１独立遊撃部隊、か。もう『黒装束』の呼称のほうが有名になっちまったな」

正式な部隊名を呟く。大戦が始まってから2年後に招集された特殊部隊。
その正式呼称は、その後の活躍から畏怖を込めて『黒装束』と呼ばれることのほうが多くなっていた。

「守るものが増えただけよ」

再び双剣を目にもとまらぬ速さで鞘に戻すとフィオナは立ち上がる。
その表情は毅然として硬い。

「ライは絶対に死なせない。アタシが守るわ」

妙な圧力すら発する目の前の小柄な女兵士をアルガレイは見やる。
その純粋な、力強い宣言に「参ったね」と呟いた。

「最近の若いヤツは凄いもんだ」
「２０才の女の子を舐めないことね。恋心だけは強いわよ。クサいセリフもなんでも言えるんだから」

相好を崩してニヘヘと笑うまだ少女といってもいい年代の同僚を見て、アルガレイはボリボリと頭を掻く。

「３０代半ばのオヤジも舐めちゃいかんぜ。俺にだって大事な息子がいる。息子のためなら時間も場所も乗り越えられるさ。あの世からだってメッセージぐらい送れる」

二人して顔を見合わせて笑い合う。

「そのためなら『薬』だって武器になる。立派な秘密兵器だわ」

「そうかもしれん。だが、使いどころは間違えるなよ」
「分かってる」

そう言い返してフィオナは自分の胸元を探った。3日前に本部から極秘裏に支給された『薬』。誰もがその意味を口にしないものの分かってはいるのだ。ただ一人を除いて。

「こうして見てみると綺麗なのにね」

ロケットに入った『薬』を月光に翳してみる。
微かな光を受けて『薬』は透明な薄緑色に発光していた。

◆
◆
◆
◆
◆

第2話「芽吹く」

「え？　ライって魔術使えないの！？」

ヤッジーに昼飯を食べに来ていたサンツがびっくりして叫ぶ。口に運ぼうとしていたポテトが空中で停止したフォークから滑り落ちた。サンツが頼んでいたステーキセットのソースの中に落下して、ソースが飛び散る。

「おい、机汚すなよ」
「あ、…うん。え、じゃなくて！」
「なにが？」
「え、マジで魔術使えないの？」
「だからそう言ってるじゃん」

呆然としながらも、素早くソースのついたポテトをもう一度口に放り込んで、もう一度サンツが口を開く。

「え、でもさ――」
「物を食いながら喋るな！　ポテトがこっち飛んでくる！」

慌てて口を抑えるサンツ。
一方のライはサンドイッチだけの食事を終えており、食後にヤズリクが出してくれたコーヒーを飲んでいる。
ポテトを飲み込み、水で軽く口をゆすいだサンツが声をひそめて再び問う。

「ライってさ、あれだよね、大戦時の『狂戦士』なんだよね」
「いや、俺自身はそう名乗ったことはないけど」

「でも、そうなんでしょ？」
「まぁ、そうだね」

3年前に停戦条約が結ばれた大戦。レグレシア帝国と隣国のハルメニア共和国のデルザビエ山脈における霊硝石の採掘権をめぐる戦争。霊硝石は加工されると、霊結石としてレグレシア帝国では貴族の紋章の核となり、またハルメニア帝国では霊化武器の核となる霊術を扱う上での重要な鉱物資源である。霊硝石を制する者は霊術を制し、そして果てには世界を制する、そう言われている。

その大戦の末期において圧倒的な活躍をした特殊部隊『黒装束』。その隊長で『狂戦士』と呼ばれた人物が、今目の前にいるこの男だと言う。

この――コーヒーに大量のミルクと砂糖を入れている、この男が。

「いやいや、嘘でしょ」
「なにが」
「魔術、使えるっしょ？」
「いや、だから使えないって。生まれつき魔力がないらしいんだわ。俺のこと探ってみろよ。魔力感じないのわかるだろ？」
「いや、確かに魔力の気配が薄いなとは思ってたけど…。え、でもそれでどうやって戦ってきたの！？」

通常の戦闘は武器と魔術の両方を使って行う。武器による戦闘が得意な者は魔術を身体強化など補助的に使い、魔術が得意な者は魔術をメインに武器を防御などに使用する。魔術に特化した魔術師という職業はあれども、武器だけに特化した戦士というのはあまり聞かない。
だが――

「肉段戦と剣術」

目の前にいる男は違ったらしい。

「まじで！？」
「いや、うん。まじだけど」
「魔術で攻撃されたらどうしてたの？」
「え、弾き飛ばしてたよ」
「は？」
「いや、剣とか素手で」
「素手！？」
「まぁ、うん」
「…魔術障壁とかは？」
「いや、あれ大体力ずくで撃ち抜けるし」

どうやら目の前の男は本当に規格外らしい。

考えてみれば、この男の力は本当におかしい。午前中、行動を共にしただけでも、溝にはまった荷車を1人で持ち上げて道に戻すこと2回、八百屋の棚卸の手伝いでは大の大人が1人1つしか持てないような木箱を1人で5つほど軽々と持っていた。細身の体からは信じられないパワーだ。あれは魔術で身体強化してたからではなかったのか。

そして今も――。

「ライ、いまからしばらく暇？　暇だったらこの店のテーブルちょっと裏に出そうかと思ってるんだけど。久々に洗いたいんだ」
「いいよ、ヤズリク。この店にはいつも世話になってるから、手伝うよ」
「ありがとう」
「この長机から行こうか。ドア開けてくれる？」

そういってコーヒーを飲みほしたライが手をかけたのは、サンツの隣にあった１０人ぐらいが食卓を囲めそうな大きな机。厚い樫の木で頑丈な天板と太い丸太で作られた脚。運ぶのには大の大人が４人ほど必要そうなガッシリとした机をライは片手で持ち上げてしまう。そして両手を使って軽々と机を横にすると店主のヤズリクが明けている裏口への扉へと運んでいく。

その光景を呆然と眺めながら、サンツは再びポテトをソースの中に落下させていた。

## 第2話「芽吹く」？

「そういえばサンツ、おまえ仕事はいいの？」

ヤズリクの手伝いが終わった後、ライははバーレス街をぶらぶらと歩く。これも一応、治安警備の一環である。

サンツもそれに同行していた。というよりも、ここ数日サンツはライとともに行動をしている。本来東警備団の一員であるサンツが「放棄された街」であるハバーレス街を歩くのを、最初は住民は怪訝な目で見ていたが、2日目からサンツが警備団の服ではなく普段着で来てからは何も言わなくなった。

「あぁ今ね、休暇なんだ」

「休暇？　下っ端のお前が？」

「下っ端って…コノヤロウ。でも、ほら、この前の盗賊退治任務で警備団も人数少し減っちゃってさ。今再編中なんだ。で、あの任務に行った者は1週間の休暇をもらってんの」

「へー、なるほど。よく分かんねぇけど、よかったな」

「分かってないのかよ！　…まぁもういいや。そういうわけであと数日は暇かなぁ」

そんなことをぼやきながら2人で歩く。周囲はいつの間にか違法建築の建物が増えていた。4解建ての建物の上にさらに2階ほど建て増してある。さらに建物と建物の間にはロープが張られ洗濯物が干されている。そのため周囲は非常に薄暗い。

「お、イテ！　悪いな」

「あ、すみません。お兄さん」

張り巡らされた頭上の洗濯ロープを見上げていたサンツの腰あたりに少年がぶつかってきた。慌てて視線を落としてぶつかってしまった少年に謝る。少年のほうも申し訳なさそうに謝りながら、走り去――ろうとした。

「待て、リック」
「げ、ライ」
「え？」

走り去ろうとした少年の襟首を捕まえたのは数歩先を歩いていたはずのライだった。走りだそうとした直後に遠慮なく襟首を捕まれ、引きずり戻される。

「ちょちょちょ、ライ！？」

その遠慮のなさにサンツが慌てる。相手は年端もいかない少年だ。ライは襟首を持ったまま5メートルほど引きずりながらサンツの元へ戻ってくる。

「ほら、財布。スられてんぞ」
「え？……うわっマジだ！　財布ねぇ！」

投げて返されたのはまさしく自分の財布。慌てて上着の内ポケットを探ると先ほどまであった財布は影も形もなかった。

「ちぇー。ライ、邪魔すんなよ。せっかくトロそうなカモだったのに」
「と、トロそう？」

「悪いな、これは俺のツレだから勘弁してやれ」
襟首を捕まれて宙に浮いたまま少年が文句を垂れる。その態度には微塵も反省とか焦りはない。
「ちぇー」
「もっとちゃんと周りを見て、人を選んでスリな。あんなシミったれたヤツじゃなくて、裕福そうなやつがたまに来るだろう」
「えー。ぶーぶー」
「し、シミったれた？」
第一そのアドバイスはどうなのだろう。治安維持も彼の仕事ではなかったか。サンツはトロそうとかシミったれたなど言われて凹みながら膝をついた。
「じゃあいつもの勝負だ！」
「リックもコリないな。どうせお前の負けなのに」
そんなサンツを放っておいて話は進んでいく。どうやらリックと呼ばれたスリの少年はライに定番の勝負を挑んだらしい。
「ほら、サンツ。そんなことで膝ついてないで行くぞ。ちょっと移動するんだ」
「あ、あぁ」

移動した場所は程近い河原だった。石が敷き詰められた場所に着くなり少年は手頃な石を拾い始める。

「いつも通り２０個勝負な！　ライに石を当てられたらさっきの財布を寄越せ！」

「俺が全部避けきったら、お前はスリじゃない仕事で一週間働けよ」

「わかってるよ！　いくぞ！　うおりゃっ！！」

振りかぶって投げられた小石は意外にも鋭く速さを持ってライに迫る。しかし、ライはそれをあっさり避ける。

が、――。

「ぶへぇあっ」

「あ、サンツ悪い。そこに居たのか」

後ろにいたサンツに直撃した。

それを見たリック少年がにやりと笑う。

「どうする、ライ。避けると後ろのトロいヤツに当たるぞ！　ちなみに受け止めてもダメだからな！」

そう言って、ライとサンツを結ぶ直線上へ移動しながら石を投げてくる。

「うーむ、面倒だなぁ」

そういってライは軽くしゃがみ込んで足下に落ちている小石を数個拾った。

「ほい、ほいっと」

カツン　カツン

ライが何げなしに投げた石はリックが投げてきた石を正確に打ち落とした。

「!?　な、なんだそれ!　卑怯だぞ!」

「いいじゃん、別に。俺に石が当たった訳じゃないんだから」

「こ、コノヤロウ!」

卑怯という言葉ではくくれないものがそこにはあった。投げられた石を空中で打ち落とすなんて。サンツは鼻血を押さえながら、それを呆然として見ていた。

散弾のように5個まとめて投げられた石もすべて打ち落とし、結局ライは全ての石を避けもせずに叩き落としてしまった。

「ちくしょー。また負けかぁ」

「約束は守れよ」

「わかあってるよ!　明日からヤズリクんとこで一週間働くってば」

「飯がなくなったら、俺んち来いよ」

「行かねえよ!　べー、っだ!」

そういってあっという間に走り去ってしまう。

「大丈夫?」

ライが覗き込んでくる。やっと鼻血が止まった鼻を押さえながらサンツは立ち上がった。

「ライ、なんであの子を捕まえたり説教しなかったの？」
「うん？　リックのこと？」
「うん、スリなんて良くないじゃん」
「まぁね。けど、それでしか生きられない者にスリをやめろっていうのは死ねっていうことと同じだからね」

ハバーレス街にはストリートチルドレンも多く存在する。彼らの多くはスリや非合法な仕事で飢えを凌いでいるのだ。ライは彼らにもできる仕事を時々紹介もするが、基本的にスリをやめろとはあまり言わない。
それは彼らがそれを非合法であったり悪いことであることを認識した上で、生きるために仕方なく選択した結果であることをライが知っているからだった。

「ライ！」

などということを話していると、先ほどの少年―リック―が戻ってきた。息を切らしての全力疾走だ。

「どうした？」
「ライ、喧嘩だ！　大通りのほうのマルライさんとこの屋台で喧嘩！　屋台がもうぶっ壊れそう！」
「マジか…、サンツ走れる？」
「あぁ大丈夫だ。向かおうか」

3人で走り出す。一番走るのが遅いリックに合わせて走りながら、ライは状況を聞き出す。

「喧嘩してるのは誰？」

「めっちゃ大きい大男とあとは知らない男の子と女の子」
「知らない？」
「2日前くらいにやってきた新顔なんだ。女の子のほうが病気みたいで、男の子のほうは無愛想だったから放っておいたんだよ」
子供相手の大人の喧嘩らしい。それを聞いてライはリックを抱えて走り出す。格段にスピードが上がった。
「サンツ、あとから来い！　俺は先に行く！」
そう言い残してあっと言う間に見えなくなってしまった。

## 第2話「芽吹く」？

「ハーヴェ！」

少女の叫び声が響く。

ハーヴェと呼ばれた少年の体はいとも簡単に宙を飛び、積んであった果実の山に突っ込んだ。木材でできていた屋台は既に傾いており、果実や野菜が周囲に飛び散っている。

「ちっくしょう！この筋肉ダルマ！」

柑橘系の匂いが体にまとわりつく。手が果汁で少しベタついたが、幸い目には入らなかった。

相手は体格の大きな獣人だ。帝国内で獣人はどちらかというと少数派である。それは人間種の貴族による貴族政治が行われているせいもあるだろう。大きな体と毛皮。その特徴的な毛皮からイノシシの獣人だとわかる。丸太のような腕と厚みのある体からは底知れないパワーを感じる。それに対してハーヴェは小柄で相手の腰あたりまでしかない。１０代前半ぐらいの少年である。

体格差は仕方がない。ハーヴェは自分にできること――すなわち駆け回るって攻撃するしかなかった。

「ハーヴェ、だめ！」

だが回り込もうとしたハーヴェの腹に巨漢の靴のつま先がめり込んだ。

胃液が逆流するのを喉の奥で感じながら、ハーヴェは地面にうずくまる。目に映る無骨な石畳がチカチカしている。

「や、めろ…フランに近づくな…」

胃液で焼けた喉で必死に言葉を吐くが、それでも獣人の男は泣き叫んでいる少女――フラン――のもとへとゆっくり歩みを進める。

（情けねぇ…フランのこと助けたいのに、あの筋肉ダルマのクソったれ野郎が！）

ハーヴェは悔しさに涙が溢れそうになる。最近、泣いたことなどなかった。泣いてはいけないと思っていたから。泣いてしまっては今まで我慢していたものが全て溢れてしまうと思っていたから。

だから、まだ泣けない。

まだ。

フランを助けるまでは！

「おたくらさぁ、うちのマーケットでなにしてくれてんの？」

場違いなほどのんびりとした声が響いた。

見ると痩身の男が獣人の正面に立って、腕を組んでいた。その横には投げ捨てられたのだろうか、少年が1人ひっくり返っていた。

「降ろす時はもっと優しく降ろせ！　頭割れるかと思ったぞ！」

「降ろしたんじゃない。放り投げたんだ」

「余計に酷いよ！」

「ライ遅いよ！　うちの屋台ぶっ壊れちまったよ！」

「ごめん、マライルさん。ちょっと遅れた」

「俺に対しての謝罪は！？」

そんな声が聞こえてくる。
一方でその声を無視するように巨漢の男は、手で痩身の男を押しのけ、少女へと歩みを進める。
「ちょっとおたくさ、話聞いてる？」
「…邪魔だ」
それを押しとどめようとする痩身の男だが、獣人の男はそれを無視するようにその脇を通り過ぎようとする。
「人の話は聞けよな、っと」
突然、パンっという音とともに、獣人の顎が跳ね上がった。空を見上げる格好になった獣人がフラフラっとバランスを崩して膝をついた。
あまりの素早さに何が起こったか一瞬分からなかったが、すれ違いざまに痩身の男が獣人の顎を裏拳で叩き上げたらしい。
（チャンスだ！）
今ならタックルして足を取ればあいつを倒せる。あいつを倒したら顔でも踏みつけておいてフランの手を引いて一目散に逃げてやる。そうハーヴェは一瞬で思考する。ここは「放棄された街」のハバーレス街だ。逃げ込むのには好都合である。
少年は、そう計算して痛む体を押さえて全速力で走りだした。
だが――。
「はいはい、君もおとなしくしてようねー」

そんなハーヴェに痩身の男はかがむようにして親指と中指で円を作って差し出した。

（デコピン？　なんのためにそんな――の〝っッ！？）

頭がのけぞるほどの衝撃を受けて――ハーヴェは意識を失った。

「ハーヴェ！」

バゴンッという凄い音がしてデコピンされたハーヴェがゆっくりと後ろに倒れた。

血の気が引く。ハーヴェは悪くないのに。私のせいなのに。どうしよう？

「まぁ気を失ってるだけだから」

途中から割り込んできた黒髪の男がフランの方を見て丁寧に説明してくれる。

不思議な雰囲気を持つ男。争いごとの中心に割り込んでるのに、とっても静かな雰囲気を崩さない。飛び散った果物や木片のなかで存在が浮いていしまうくらい超然としている。一瞬違和感を持たせるのに、次の瞬間にはもう馴染んでいて違和感がない。

「…お前。殺す」
「っ！　後ろ！」

先ほどまでフラフラして膝をついていた獣人が痩身の男の後ろから殴りかかろうとしていた。丸太のような腕には、血管やら筋などが浮き出ているほど力が込められている。唸りをあげて振り下ろされる拳に男が殴られる図が想像できてフランは悲鳴を上げそうになる。

だが、次の瞬間フランは信じられないものを見た。

「お前には手加減する必要がなさそうだな」

振り向きもしないで大男の拳をくぐりぬけた痩身の男は、大男の背後に立ち、一瞬にして足を払うと地面に仰向けに倒れ伏した大男の腹を踏み抜いた。それでも立ち上がってこようとする顎を掌打で撃ち抜き脳を揺らし、地面に完全に倒すと、とどめに頭を蹴り飛ばす。

その間――ほんの一瞬。

蹴り飛ばされた獣人は地面を滑って屋台のかろうじて残っていた土台のところへ突っ込む。派手な音をたてた後に、舌をだらんと伸ばして気絶している獣人の姿が露わになる。

圧倒的な早業で大男を昏倒させると、痩身の男は、驚いて口が閉じれなくなっているフランにこう言った。

「俺、ここで便利屋やっているライってんだけど、話聞かせてもらっていいかな？」

その紫金の綺麗な瞳を見ながら、口が閉じれないフランは、コク

コクと頷くしかなかった。
ちなみに全てが終わってから追いついてきたサンツは、マライルさんの屋台を片付けるのに扱き使われたとかしないとか。

## 第2話「芽吹く」？

◇　◇　◇　◇　◇

大輪の花のように笑う少女だと思った。

「あたし、フランっていうの。あなた誰？　どうしたの？」

出会った日はジメジメとした雨が降っていた。嫌な、天気だった。湿気が肌に纏わりついてうっとおしい。湿気で丸まった髪の毛を掻きむしるように抱え込みながらハーヴェは泣いていた。

「泣いてるの？」

そう聞いてくる少女は、自分とは対極にいるように思えた。湿気にまみれた天気の中で、うっとおしさとは無縁の存在のように笑顔を振りまいている。

ハーヴェは右手にあるものを堅く握りしめた。

――母親の骨を。

「母さんが…死んだんだ…」

それだけを必死に絞り出す。先ほど火葬してきた時の風景がよみがえる。焼き場の老人が焼き終わったあとの焼け跡から骨を１つだけ取り出してハーヴェに放った。

『形見の骨じゃけぇ、もっとけ』

泣きながら骨を握りしめて焼き場を走り去った。街にでるまでに3回転び、2回目で手の中の骨はさらに細かく砕けた。
炭で黒くなった骨は、母の病気のせいだろうか、脆くなっていたのだった。どの部位なのか分からないが、堅くしっかりした骨の部分だけが結局手に残った。

「家族がいなくなっちゃったの？」

腕に覚えのあった父親は結局大戦が終わってからも帰ってこなかった。病床の母も死んだ。兄弟もいない。家族は、もう誰もいない。
家はなくなった。父親の軍属手当は終戦と同時に配給されなくなっていたから、家賃が払えなくなっていたのだ。家賃が払えない者を居座らせるほど、この街の大家は優しくなかった。
何も残っていない。
母親が病床で繕ってくれた衣服があるだけだ。靴は底が破けてしまって捨てた。裸足で歩くのは最初は痛かったけど、数日すればもう慣れてしまった。
今のハーヴェが持っている者といえば母親の骨だけだった。

「じゃあ――」

ストンと少女が腰を落とした。
座り込んでいるハーヴェと目線を合わせるように顔をのぞき込んだ少女が、朗らかに笑う。

「じゃあ、あたしがアンタのお姉ちゃんになってあげるね」

ハーヴェの目に少女の足が写った。
それは、ハーヴェと同様に靴を履かずに薄汚れた裸足だった。
裸足で――独りで生きてきた者の足だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「――ハッ」

呼吸荒く目が覚める。何かとても懐かしい夢を見ていた気がしたが、目が覚めると同時に体と頭が鈍痛を訴えてくる。その鈍痛が今まで自分が気を失ってきたことを如実に教えてくれた。

周りを見渡す。知らない部屋だ。

「起きたか、ボーズ」

ベッドサイドにいる男がパタンと本を閉じて話しかけてくる。ハーヴェのことをデコピンで気絶させた痩身の男だ。真っ黒な髪に、紫金の瞳。その瞳が、ハーヴェのことを鋭く捕らえた。

「ここは？」

「俺の家だ。起きたんならとりあえずお礼を言ってほしいもんだね」

「なんで、お前なんかに！　このデコピン野郎！」

「シッ、静かに。隣のお姫様が起きちまう」

「お姫様？」

そこでやっとハーヴェの隣にフランが寝かされていることに気づく。その呼吸は荒い。顔は多少赤らみ、額には塗れタオルが絞って当てられている。

「フラン！」

「だから、静かにしろっちゅーのに。少し熱がでているだけだ。大丈夫。ちょっと待ってろ」

そう言ってドアをでていく。

ベッドを降りてフランの様子を見る。ベッドで横になったのなんて久しぶりで名残惜しかったが仕方ない。あの青年は悪い人間ではなさそうだが、信用できるわけではない。できることならさっさと立ち去りたいが、フランの体力が持つだろうか。だが、迷っている暇はない。

頬に手を当てるとやはり熱を持っている。フランの右手にしっかりと包帯が巻かれているのを確認してホッと息を吐く。

「意外だな、サンツが料理できるなんて」

「いや、警備団の昼飯つくったりするからな」

「下っ端だもんな」

「うるせえ！　下っ端言うな！　ライこそ料理しねえの？」

「魔術が使えないと火も簡単に起こせねぇしなぁ」

「不便だな。いつもどうしてんの？」

「外に食いに行ったり、ルミナのオバさんが差し入れくれたりするよ」

「悠々自適だなぁ、ここの生活」

「そうでもないさ。２階で騒ぐとルミナがすぐに怒鳴り込んでくる」

部屋の外から2人の男の会話がハーヴェの耳に聞こえてきた。１

人は先ほどの黒髪の男だろう。もう1人は聞き覚えがない。
急いで魔術の準備に取りかかる。魔術がまだ未熟なハーヴェは宙に簡単な火の変性陣を描く。唯一父親に習い、使える攻撃魔術。火の術だ。時間を掛けないので威力はあまり強くないが、不意打ちで当てれば、窓からフランを担いで逃げるぐらいの時間は稼げるだろう。ハーヴェはそう考えていた。

「火が必要な時とかないの？　冬とかストーブないと寒いじゃん」
「あぁそういうときはさ、ナイフを2本ほど油につけてさ」
「ナイフ？　油？」
「そ。で、カチーンと」
「いやいやいやいや！　おかしいでしょ！？　火花で火を起こすの？」
「まぁ」
「まぁ…じゃねぇし！　第一熱くないのかよ、手とかにも炎まわるんじゃないの？」
「いや、熱かったことはないけど…。てか火ってそんなに熱くないよな」
「…でたよ、規格外」

声が部屋の前で止まる。と、同時に魔力が変性陣を通して、目の前で頭ぐらいの大きさの火球として顕現した。あとは投げるだけである。ドアが開くやいなや全力で投げ放つ。

「おーい、飯持ってきたぞ…って、ぎゃあああ！？」
「うお、鍋の中身こぼすな、コラ！」

狙いは正確だった。鍋をもって入ってきたサンツは驚いて、少し鍋の中身を床にこぼしている。威力も申し分なかった。相手にも致命傷にはならないが、着弾の爆発で少しは煙幕の役割もしてくれる

はずだ。軌道を目で軽く追いながら、フランの脇に手をいれて抱き起こす。だが窓ガラスを割ろうとしたとき――――。

「なんだコレ。ほりゃっ！」

――パンッ――

着弾にしては乾いた軽い音しかしなかった。それもそのはずだ。火球は着弾しなかった。ハーヴェは横目でしか見ていなかったが、間違いない。

火球は男に――ライに握りつぶされてしまったのだ。

ライがサンツの後ろから手を伸ばして、火球を両手で挟みこむように叩き合わせると空中を奔っていた火球は跡かたもなく霧散した。魔術拡散とか魔術防壁ではない。物理的に――物理的な勢いでかき消されてしまったのだ。

「……」

「……」

妙な沈黙が部屋を襲った。時間が妙に制止している。唯一、体制を整えたライが首を傾げる。

「ほら、な。火ってあんまり熱くないだろ？」

「……」

「……」

「よ、よーし、よしよし。ちょっと待てちょっと待て。色々と整理しよう」

次に動きを回復したのはサンツだった。
少し中身のこぼれた鍋を机の上に置いてからドアの脇に戻りこめかみを揉む。

「よし、俺は鍋をおいた。だから坊主、お前はお姫様をとりあえずベッドに戻せ。それから火球を撃ったのはお前だな？　うーんと、状況からなんとなく理由はわかるんだが、とりあえずは『ふざけるな』と。それからライ、お前も『ふざけるな』と。えーと、それから…」

――ドンッ　めきゃっ――

何の前触れもなく、ドアがいきなり内側へ蹴破られた。
ドアの前に立っていたサンツは直撃を受けてモロに吹っ飛ぶ。一回転にさらに微妙なひねりを加えて床に着地―もとい叩きつけられる。

「さっきからドンドンうるっさいのよ！　お陰で落ち着いて調合すらできないじゃない！…ってあら、サンツさんそんな所に寝っ転がってどうしたの？」
「…ルミナ、お前せめて扉の向こうに人がいないことを確認してからドアを開けてやれ。不意打ちでこいつ意識ないぞ」

ちゃっかりとドアの攻撃範囲から避難していたライがそう哀れそうに呟く。
また奇妙な沈黙が訪れた。

「う、う～ん」

苦しそうなうめき声が聞こえて布団がガサゴソと動いた。動きに

合わせて額のタオルが剥がれ落ちて胸元に落ちる。むくりと起き上がった金髪の少女は回りを見渡す。

「あ、あの…これは…？」

目を覚ましたフランは、顔が引きつったまま固まったままのハーヴェと、黒髪の男と赤毛の女、それから横たわる茶髪の男を順々に眺めて、困惑げにそう尋ねた。

## 第2話「芽吹く」？

「フラン・ウィ…いえ、私はフラン・ダズニフと申します」

ベッドの上に座ったまま、綺麗な金髪の少女が腰を折る。しかし次の瞬間には腰を折ったまま激しく咳き込む。慌てて駆け寄る少年を押しとどめて再び顔を上げる。

「そして、こちらはハーヴェ。ハーヴェ・ダズニフです」

「ダズニフ？」

「えぇ、姉弟なんです」

疑問の声を上げるライに対し、フランはそう答える。

ライは何も言わずにハーヴェの顔を凝視した。

「なんだよ」

「いや…」

「へー、姉弟にしては似てないね！」

口ごもったライを遮るようにルミナが率直な感想を述べた。

「あ、ごめん」

「いえ、血は繋がっていませんから」

「あ、そうなの」

ルミナ自身もケーニッヒ夫妻の養子であるため、あまり血のつながりについては偏見を持たない。その反応を見てフランが安心したように微笑んだ。

「あ、私はケーニッヒ薬局の実力派跡取り娘ルミナです」
「…ハバーレス街で便利屋をやっている、ライだ」

スカートを軽くつまんで挨拶するルミナ。その後ろでライは『実力派』の表現に口元を引きつらせる。

「で、そこで頬を押さえてうずくまってるのが東警備隊のサンツよ」
「誰のせいだ！　誰の！」
「立ってる場所が悪いのよ」
「ドアは手で開けるもんだ！　蹴破るもんじゃねぇ！お陰で口の中切っちまったじゃねえか！」
「なによ、後でいくらでも新作の軟膏塗ってあげるわよ！」
「ややややめろ！　落ちつけ、早まるな！　俺が悪かった！」

急に低姿勢になるサンツ。その様子を見て力が抜けてしまったのか、ハーヴェは崩れるように床に座り込む。

「は、はは…」
「ハーヴェ？」

フランが心配そうに覗きこむ。

「大丈夫？」
「うん、なんかダサくて安心した」
「おい、誰がダサいって！？」

サンツが吠える。だが、それでもハーヴェは力ない表情を浮かべるだけだ。
母親が死んでから今までフラン以外誰も信用しないで生きてきた。信用してこなかったのは、信用されなかったからだ。周りの人間が

騙し合い、嘲り笑っていたからだ。
だから、サンツとルミナの口喧嘩はハーヴェにとってひどく懐かしい耳心地だった。

「――くしゅんっ」

そんな喧騒のなかで小さく、しかしはっきりとクシャミの声が響いた。
寝汗をかいて体を冷やしてしまったのか、フランがそこから立て続けにクシャミをする。

「あちゃー。ごめんね、放ったまんまで。体拭いて上げるから、また少し寝ようか」

ルミナが手際よく水とタオルを準備し始める。ライの部屋だが、そこは勝手知ったる他人の部屋。恐らく部屋の主よりも手早くそろえてしまうとキッと男3人を睨みつける。

「ほら、男は出てって！」
「…俺の部屋だぞ」

ライの主張もむなしく男たちは、部屋の外に追い出される。
ドアへ向かって歩き始めたハーヴェの傷だらけ裸足の足元を見て、サンツは少しだけ眉をしかめた後――――とても悪い、悪魔の顔をした。

「あ、ルミナ？」
「なに？」
「ハーヴェくんだけどさ、彼も裸足で怪我しちゃってるみたいだからさ。ちょっと簡単に治療してあげてよ」

「え？」

満面の笑みを浮かべるサンツと嬉しそうな反応を返すルミナ。ハーヴェとフランは疑問顔だ。ライはハーヴェの足の傷とルミナの笑顔を見比べて顔をひきつらせた。

「ほら、ハーヴェ。遠慮するな」
「い、い、いや、いいよ。なんか嫌な予感がする」
「遠慮しなくていいのよ、ハーヴェくぅん」
「いや、フランのを先にやるんなら俺は外にいるよ」
「大丈夫よ、包帯で目隠しきつくしてあげるから。見えないようにしてあげる」
「怖い！　むしろ怖い！　絶対イヤだ！」
「ダメよ、ハーヴェ！」

本能的に危機を避けようとしたハーヴェにフランが声を掛ける。

「あたしのせいで足怪我させちゃってごめんね。せっかく治してもらえるんだから、治してもらってよ。お願い」

その涙声にハーヴェは神妙に頷き、ルミナは喜びの笑みを、そしてサンツは黒い笑みを浮かべた。
ドアがしまると同時に口数の少なかったライがぼそりと呟いた。

「結構えげつないことしたな」
「お前が言えるのか！　俺に同じことしやがったくせに！」

そして次の瞬間、ライの部屋から絶叫が聞こえてきたのであった。

「ライ、ちょっと」

ルミナが扉を開けてライを手招きする。薄暗くなり、部屋にはランプが灯されていた。部屋の隅には包帯で簀巻きにされたハーヴェが無惨に転がされている。おそらくわざとであろう、目の部分は入念に包帯が巻かれていた。

「これ、ちょっと見て」

ルミナがベッド脇で寝ているフランの右手を取る。フランはベッドで静かに寝ていた。

先ほどまで包帯で覆われていた右手は、ルミナによって露わになり手の甲の様相を晒していた。

「これは――」

その様子にサンツが口をつぐむ。

「ライ。これって――――貴族の『紋章』？」

ルミナも不安そうにライを見上げている。

フランの手の甲には、複雑な紋様が描かれている。だが、それはライが以前見たことがあるものより、複雑ではなく、そして何よりもフランの手は爛れていた。
紋様の周りは炎症で腫れ上がり、紋章自体からも薄く血が滲んでいる。

「フランちゃんって貴族、なの？」

ルミナが顔をひきつらせている。仕方がない。貴族と平民の格差はここ１０年くらいで急激に開いた。特に大戦をを経て、霊術という圧倒的武力をもつ貴族の地位は完全に隔離され保証された。
場末の一般市民など貴族と喋る機会はおろか見かける機会すらないと言える。

「これ、血出ているけど治療していいのかしら？」
「と、とりあえずお前の薬はやめておけ」
「そ、そうね。貴族相手に失礼よね」
「い、いや、そういう意味じゃ…まあいいや」

ライは再び手の甲の紋章をよく見る。血が固まっていて少し見えにくいが、それでもよく見てみると、以前アデスが戦場で見せてくれた紋章との違いがわかってくる。

（霊結石が剥き出しだ。それに家紋も不完全？）

紋章は６つの霊結石と呼ばれる宝石が核として配置されている。その配置は全ての紋章において共通しているらしい。霊力を集約する構造だよ、とアデスが笑っていたのを思い出す。

その集約した霊力を霊術として行使する一方で、紋章自体を使っ

た霊術がある。それが霊術の独技と呼ばれるものだ。
独技は紋章の紋様―すなわち家紋に左右され、一子相伝の霊術である。その分、非常に強力だ。アデスで言えば「破炎」がそれにあたる。

その家紋が未完成となっている。

「この子は一体……？」

全員が疑問に包まれていた。

「養子なんだ」

それに滲みでるような声で答えがあった。
ハーヴェである。
部屋の隅で包帯にグルグル巻きにされながら、ハーヴェが唇をかんでいた。

「フランは、貧民街の出身だよ。貴族のウィリス家の養子なんだ」

目に当てられた包帯は斜めにずれている。ずれた場所から覗いているハーヴェの茶色い瞳とライの紫金の瞳がかち合う。

「どういう事だ。話せ」

ライが続きを促す。
それに答えようとしてハーヴェは体の動きがとれないことを思い出した。

「とりあえず、包帯外してくれよ……」

## 第2話「芽吹く」？

1年前のある春の日。ウィリス家は悲しみに包まれていた。ウィリス家の一人娘であるサリーが病によってこの世を去ってしまったのだ。

花のように笑う少女だった、と屋敷の従業員は全員口を揃えて言う。それがたったの9歳で逝去してしまわれるとは。そう言って誰もが悲しんだ。

ウィリス家の長男であるデイビットは、横暴で粗野な振る舞いで従業員を困らせていたので、幼いながら優しいサリーは従業員からかわいがられていたのだ。

特に家主のアーサー・ウィリスの落ち込み方は半端ではなかった。確かに年齢的にも若くはなかったが、それでもめっきりと老け込んでしまった。

貴族としての仕事にも手をつけず、娘の部屋にこもって遺品を眺める日々。

しかし、数ヶ月後、彼は見つけてしまったのだ。

気晴らしにでかけて馬車での散策の時に、窓から見えた裸足の少女。

通りを同じ年代の少年と一緒に駆けていく、大輪の花のように笑う亡きサリーによく似た少女。

――フラン・ダズニフを。

◇　◇　◇　◇　◇

「それからはあっという間だった。俺は無理矢理フランと引き離されて、フランはあっという間にウィリス家の養子になっちまった」

包帯を解いてもらったハーヴェが悔しそうに話す。

場所は1階のケーニッヒ夫妻とルミナが暮らす住居部分のダイニングである。簡単な夜食を全員で食べている。

ライの暮らす2階部分からこの住居部分へは直通の階段があり、これを使ってルミナはよく食事をライへ持っていっていた。

「俺は手切れ金を押しつけられるだけで、文句すら言う機会すら与えられなかった！　貴族だから！　全てはその一言で終わらせられた！　アーサー・ウィリスの顔すら見たことない！」

当時の悔しさを思い出したのか、絞り出すようにハーヴェが言う。力を込めて机を叩き、机にうずくまるように顔を伏せた。

「それでも――」

腕の間からくぐもった声が漏れる。

「それでも、フランが幸せになるんならいいと思っていたんだ。貴族の子女としてマトモな生活ができるようになるならって」

フランは嫌がっていた。結局フランが嫌がろうが喜ぼうが、フラ

ンが養子になることは決定してしまっていたのだが、それでもフランは嫌がった。

『わたしだけ幸せになるなんてイヤ！』

そう言って嫌がった。フランがウィリス家にハーヴェも同様に養子に迎えてほしいと懇願していたことをハーヴェは知っていた。

だが、それは望みのないことだった。

ウィリス家は養子が欲しいわけでなく、サリーの替えが欲しかっただけなのだ。

それでも構わなかった。

ひとりぼっちだったハーヴェを助けてくれたこの心優しい少女が幸せになるのだったら、何でもしようと思っていたのだ。

『だって、わたし名字変わっちゃうんだよ？　もうハーヴェと姉弟じゃないんだよ？　せっかくハーヴェからもらった名字じゃなくなっちゃうんだよ？』

それでも、それでもいいのだ。

そうハーヴェは思う。

俺がフランにあげられたのはダズニフという親父の名字だけだから。

それ以上のものを僕はたくさんもらったから。

恩返しがしたいんだ。

そのためなら、再び一人になることだって構わない。

『大丈夫、フランは貴族になって幸せになればいいんだ。それが、

俺の願いだから』

「幸…せになる…って思ってたから、だから…だからっ…」

うずくまったまま嗚咽が漏れる。

泣き出すハーヴェを囲むように座っていたライとルミナとサンツは顔を見合わせるしかない。

夜の静かな空気に嗚咽だけが響く。

ライは、机の上にあった紙を手に取る。そこにはフランの右手にあった紋章が簡単に描き写してあった。

「紋章刻印の儀式か」

そう、ぼそりと呟く。

◇　◇　◇　◇　◇

久しぶりに会ったフランの様子が変わってきたのは一ヶ月ほど経ったころだった。

フランは身分は貴族の子女となったものの、持ち前の身軽さを生かして時々屋敷を抜け出してきてハーヴェに会いにきてくれていた。

ハーヴェはその度に来ちゃだめだよ、と注意するものの、その訪問を心待ちにしていたし、フランも会うと屋敷での話を愚痴ってス

ッキリして帰っていった。
愚痴はたくさんあった。作法にうるさい、自由がない、従業員が時々わたしをサリーと呼ぶ、時々家に帰ってくる軍属の兄デイビットが意地悪で怖い、などなど。
フランは、時々自分を通して自分ではない人を想っているのがよくわかって不快だと言っていたが、おおむね屋敷でも大事にされ幸せそうであった。

そのフランが腕に包帯を巻いてきたのだ。しかも包帯には血が滲んでいた。
どうしたんだ、と詰め寄るハーヴェに対しフランは痛みに耐えながら重い口を開いた。

『貴族の紋章を刻印する儀式なんだって』

大丈夫だ、と言い張るフランを信じ、何も言わずに屋敷へ戻したハーヴェだったが、回数を重ねるごとにフランの右腕の包帯は厚くなり、痛みに顔をしかめる回数も増えていった。

エトラント族という特殊な一族によってしか成すことができない紋章の刻印儀式。
そのエトラント族の腕が悪いのではないか。ウィリス家が貴族といってもあまり大きくないから腕の悪いエトラント族が寄越されているんじゃないか。
ハーヴェはそんなことを考えて、フランを苦しめるウィリス家やエトラント族を憎んでいた。

だが、ある日ハーヴェはフランの口から衝撃の言葉を聞いてしまうのだ。

久しぶりにあったフランが痛みに耐えられなくなって膝を吐いてしまったのを見てハーヴェは怒りをこらえられなくなって叫んでしまった。

『どうなってるんだよ！　畜生！』

もちろんウィリス家やフランの紋章刻印を行っているエトラント族への怒りだったのだが、フランは必死の形相で痛みこらえながらこう言ったのだ。

『ごめんなさい、ハーヴェ。わたしがんばるから。わたしがんばってちゃんと貴族として幸せになるから。だから怒らないで。大丈夫だから。これくらいの痛み大丈夫だから。ちゃんと貴族になるから。貴族になって幸せになるから。ごめんなさい、ごめんなさい』

悲痛なまでの懇願だった。

その時、ハーヴェは気づいてしまったのだ。

貴族として幸せにならなくてはいけないという枷を填めてフランを苦しめていたのは自分だったということに。

最初から、貴族になることがフランの幸せにつながるわけではなかったのだ。現に今フランは苦しんでいる。

そうしてしまったのは自分とウィリス家だが、そしてフランをその状況に縛り付けてしまったのはハーヴェ自身だったのだ。

フランは貴族として幸せになろうとしていたのではない。ただ、ハーヴェの願いをかなえようとしていたのだ。

悲痛なまでのすれ違い。

それが分かったハーヴェは決心する。自分のためにフランが辛い目にあってはいけない。フランはハーヴェの願いを叶えたくて、ハーヴェはフランを幸せにしたい。

なら――

「俺が――俺がフランを幸せにすればいい」

そして残っていた手切れ金を全て使って計画を練り、フランを奪取することに成功した。

必死にフランを引っ張って逃げるハーヴェが選んだ潜伏場所は、貴族も警備隊も寄りつかない見捨てられた街ーハバーレス街だった。

◇　◇　◇　◇　◇

## 第2話「芽吹く」？

「あのさ、あたしよくわかってないんだけどさ……」

おずおずといった調子でルミナが手を上げる。

「紋章刻印ってのはそんなに大変なの？　いや、なんかエトラント族にしかできない作業だってのは知ってるんだけど、フランちゃんにも負担をかけるものなの？」

タオルで顔を拭っているハーヴェを横目でみながらルミナはライとサンツの方へ問いかける。

問いかけられたサンツは大きく首を傾げた後、ルミナと同様、ライのほうを見る。

２人の視線に問いかけられてライは、少したじろいだ。

「昔聞いた話だと…」

目線をわざとそらしながら喋り始める。

「たしか『霊力』ってのは、体内から溢れる魔力と違って、空気中に霧散してるらしい。だから、それを体内に取り込むとあまりの強力さに体が拒否反応を起こす…らしいよ」

手元のフランの紋章が書きうつされた紙を再び手に取る。

「だから、貴族は幼年期のうちに紋章を刻んで『霊力』に体を慣らすんだとさ。だから、フランのようにある程度成長してから紋章を刻印するのは、体に負担を強いるのかもしれないな」
「へー、霊力って体に悪いんだ」
「強力な分、諸刃の剣ってことらしいよ」

へー、ほー、とルミナとサンツが同じような反応をする。

「霊力って言われても庶民の俺らにはねー」
「まー、関係ありませんからねー。あたしたちが使うのは魔力を使った魔術ですしー」
「ですしねー」

「「あはははははは」」

笑っている二人は放っておく。
ライとて魔力すら持たない人間だ。霊力や霊術のことについてさほど詳しいわけではない。
だが、過去の戦場において戦友であった貴族が暇つぶしに色々と話してくれたことがあったのだ。

（確かあの時アイツはなんて言ってたんだっけ？）

『ライ、霊力ってさ――』

（軍部内の派閥の話をしていて―）

『貴族にとっても――』

◆◆◆◆◆

「ライ、霊力ってさ貴族にとってもまだ未知の力なんだよねー」
「未知？」
「うん、そう。俺らって霊術使ってるけどさ、霊術がなんなのかよくわかんねーんだ」

戦場では破炎と恐れられた男は、椅子に深く座り直しながら、自身の右手をヒラヒラさせる。
砦の内部に設けられたアデスのための私室で、ライとアデスは向かいあっていた。

「魔術もよく分からないものじゃねえの？」
「んにゃ。魔力は一応人間との親和性が高いことから、生命力とかそういうものらしい。この世界に満ちていて、意識的にも知覚できるし、コントロールもある程度容易じゃん」
「まぁ俺はよくわかんねぇけど」

ライの口調は上官であるアデスに対しても、くだけた言い方をするが、この部屋では誰も咎めるものはいない。

「でも、霊力は違う」

もちろんアデスは気にしない。そのまま話を続ける。

「霊力はまず知覚できない。大気に満ちていると言われているけど、それを認識できることはできないんだよねー」
「え、そうなの？　貴族は気配とか感じてるんだと思ってた」
「認識してないんだ。ただ紋章を使うと霊力が集まってくるだけでさ」

アデスが右手を頭上まで持ち上げて光に透かすように目の前に掲げる。
微かに紋章が光った。

「何故かわからないけど、霊力が集まってきて。何故かわからないけど、手順を踏むと霊術が発動する、ってわけ」
「……」
「紋章の刻印はエトラント族の独自の技術だ。けど、エトラント族ですら霊力がなんなのかすら分かってないっぽくってさ」
「……よくわかってないのに、使ってんのか。なんかアホだな」
「ね、そう考えると怖くなるよねー。俺たちは子供のころから霊力に慣らされてきたから、なんとか扱えるけど、これは本来人間が扱うべきものじゃないのかもしれない、なんてことまで考えちゃうよねー」
「不思議な力なんだな」

ライの言葉にアデスが静かに首肯する。
ふと手を元の位置に戻すと、ライのほうに真剣に向き直る。

「正直な話、俺も霊力がなんなのか気になってはいるだよねー。自分の力の拠り所がはっきりしないというのは不安だからさ」
「そっか」
「けれども、それに関して最近ちょっときな臭いんだ」

真剣な目をしたアデスを見て、自然とライの背筋が少し伸びる。
「霊力に関する研究を行っている部署が軍部の中にあるのを知ってる？」
「あぁ、確か――」
「『情報技術局』」
言葉尻を奪うように、アデスが言い切る。
「軍部のなかで唯一エトラント族も交えて霊術の向上を研究している研究機関だ」
そして少し息を吐き出すと、アデスは不満そうだったライに１つだけ忠告をする。
「ライ、情報技術局には気をつけた方がいいよ」

◆◆◆◆◆

「――、――イ、ライ！」
名前を呼ばれてハッと我にかえる。

「どうしたの、考え事？」
「いや、なんでもない」
過去の出来事へ戻っていた思考を浮上させる。フォークを持ったまま固まってしまっていたようだ。
目の前ではルミナとサンツとハーヴェがこれからどうするかを思案していた。
９歳の少女に刻印されかけている紋章。
強い拒絶反応が起きるほどの危険な刻印をなぜ強行しているのだろう。
アーサー・ウィリスの強い意志か。
王家に召し抱えられているエトラント族がそれを承諾するだろうか。
不思議とそういう事が気にかかる。
王家とエトラント族の繋がりは密接だ。紋章が貴族の証である以上、紋章は王家がエトラント族を通じて与えるもの、となっている。
「結局のところ、２人は商都コマーサンドを出た方がいいんじゃない？ってあたしは思うんだけど」
「そうだね、四大商人の１人、西のラングウッド商会はウィリス家と繋がりが深いし、正直商都には居づらいと思うよ」
「…サンツのくせによくそんなこと知ってるわね」
「サンツのくせにってなにさ！　これでも守備隊だからね、そこら辺の事情は知ってるよ」
「なんか意外な感じ。ね、ライ？　あんた商都の外に知り合いとかいないの？」
「ん？　あぁ…そうだなぁ」

気になるとはいえ、些細なことでしかない。
２人が逃げ切れてしまえばなんの問題もないのだ。
そう思い直して、今後の話に加わろうとしたとき――

――　パリンッ　ガチャンッ　――

「きゃあああああああああああああ」

二階のライの部屋から窓が割れる音と、争う音、そしてフランの悲鳴が聞こえてきた。

## 第2話「芽吹く」？

「フラン！」

一番最初に早く反応したのは、ハーヴェとライだった。
階段を3段飛ばしで駆け上がるとライが止める暇もなくハーヴェは部屋に飛び込む。

「バカ！　気をつけろ！」

部屋を開けると同時にナイフがハーヴェに迫る。
それを後ろからギリギリのところで持っていたフォークで弾き飛ばした。

「――ッ」

目の前でナイフが弾かれたことにハーヴェも投げた敵も驚く。

「あ、ありがとう」
「お前がさっきサンツにやったことだろうが」

侵入者は全部で3人だった。全員が共通の黒い服装をしている。
顔には黒い能面の仮面が付けられ、足元から指先までは全て布で覆われ肌の露出がない。
特徴的といえば特徴的だが、個性の埋没したその装備にライは見覚えがあった

（軍部の特殊工作部隊！）

大戦中に何度か合同で任務に当たったことがあった。軍部の裏の顔と言ってもよい。秘密裏に動き、数々の裏工作を行う部隊。
裏舞台の暗躍者である。

「うおっ」
「なによ、こいつら！」

背後からサンツとルミナのあわてる声が聞こえる。
部屋の外にも二人ほどいるようである。

窓は蹴破られて窓枠しか残っていない。
気絶させられてしまったのか、ぐったりと気を失ったフランを工作部隊の1人が外へ運び出そうとする。

「待て、このやろう！」

ハーヴェがフランを担いでいる男へと特攻をかける。
それを防ぐように動いた別の男をライは手持ちのフォークを投げて牽制する。

部屋の外では、腰の短剣を抜いたサンツと侵入者の一人がもみ合いになっている。
ルミナは階段の下に突き落とされそうになって、必死に抵抗していた。
つまり――乱戦だった。

「くそっ、この女いい加減落ちろ！」
「いやよ、こんな急な階段おちたらけがするじゃない！」
「くそ、離せ！　人の服に捕まりやがって」
「ちょっとサンツ、助けてよ！　こいつなんとかして！」
「無茶言うな、こっちだって取り込み中だ！」

部屋の外ではルミナとサンツが侵入者の二人と争っていた。
争っているというよりは――もみ合い状態だった。

「きゃー、あんたどこ触ってんのよ！　変なとこ触らないでよ、変態！」
「くそっ、ならさっさと離して落ちろ！　第一触るほど価値が貧弱な小娘にあんのか。このまな板！」
「かっちーん！　なによ、こいつ超失礼！　やっぱあんたが落ちればいいじゃない」
「いや、おまえが落ちろ！」

階段付近で争っているルミナと侵入者の一人はその不安定な足場でもみ合っている。
階段が急なため、お互いが相手を必死に下に突き落とそうとしているのである。

「どうしよう。深刻な状況のはずなのに、なんか笑いそうなんだけ

ど」

そう言いながらもサンツのほうはそれほどの余裕はない。
向き合っている侵入者は短剣を逆手に構えてこちらの隙を伺っている。その構えには隙がない。

「――っ！　これだ！」

サンツは階段脇の机に置いてあった薬瓶のひとつを手に取る。
その動きの隙に会わせるように、侵入者は距離を詰めてくる。だが、サンツは落ち着いて薬瓶をあけると、それをそのまま投げつけた。

――パリン――

相手はそれを左で地面にたたき落とす。
だが――

「―っ！？」

床からモクモクと煙が上がり、侵入者の視界を奪う。しかもその煙は目に染みて痛い。

「今だ！　ルミナ、かがめ！」

その言葉にルミナが素早くかがむ。
サンツは助走つきのドロップキックを浴びせると、はじきとばされた侵入者は階段にいたもう1人の侵入者を巻き込むようにして階かに落下していく。

「っと」

バランスを崩しそうになっているルミナに手を伸ばして2階に引き上げると、サンツは手近な戸棚を開け始める。

「お、あったあった」

「あ、それあたしの新作の傷薬…」

ルミナが何かを言い終わる前に、サンツはそれを振りかぶって階下でうずくまっている侵入者2人に投げつける。

数秒遅れて、絶叫が上がった。

「……」

「いやあ、初めてルミナの傷薬が世の中のためになったな」

「なにそれ！　超失礼！」

「ほめてるんだよ、すごいぞ、おまえ。さっすがだなあ」

「え？　そう？　そうなの？　へへ、まぁそこまででもないっていうか」

「……」

だめだ、これ。とサンツが嘆息したとき、

――――カッ――――

「なにこれ、まぶしい！」

「なんだこれ、なんも見えねえ！」

強烈な閃光がライの部屋から広がり、視界を奪った。
光が収まり、視界が回復して来たとき、部屋のドアがあいてライとハーヴェが姿を現す。
2人とも肩を少し落としている。
「だめだ、逃げられちまった。フランもいねぇ」
「……」
サンツとルミナがあわてて階下を覗くと、いつの間にか倒したはずの侵入者2人の人影はなく、割れた薬瓶があるだけであった。

「軍部だ」
散らかった部屋を片付け始めながら、ライがそう切り出した。
「軍部？」
「あぁ、さっきの侵入者は軍部に所属している特殊工作部隊だ。以前も……見かけたことがある」
「まじか」
「しかも貴族が混じっていた」
「え、貴族が！？」
「あぁ。軍閥貴族だ。最後のあの閃光は霊術の一つだ。遮蔽物に関

係なく、一定範囲の視界を奪う術。魔術にはない術だ」

割れた薬瓶のかけらを慎重に拾いあつめる。

横ではハーヴェが無言で床を雑巾で拭いていた。固く唇をかみしめている。もどかしいのだろう。

「でもさ、おかしくない？」

ルミナが階段に腰掛けながら疑問を発する。

「ウィリス家って軍閥貴族じゃないわよね。なんで、軍部が出てくるの？」

「わからん。おそらくフランが何か関係しているんだろう」

全員で一度手をとめてため息をつく。

「どっちにしろ、フランちゃんは奪われちゃったしなぁ」

サンツがため息をつきながらそうこぼす。

「どうするんだ、これから？」

ライがハーヴェに聞く。

「諦めないよ」

ハーヴェは雑巾を握りしめたまま、そう力強く答える。

「ダズニフ家の男はあきらめが悪いんだ。簡単に諦めるなって親父に散々言われているんだ。『諦めないでいられるように強くあれ』

ってね」
「…親父さんは？」
「死んだよ。大戦に練兵団として参加したんだ」
「そうか」
ライはしばらく考えるように黙ったが、あっさりと結論を出した。
「よし、手伝ってやろう」
その言葉にハーヴェの顔がくしゃくしゃにゆがんで下を向いた。
「ありがとう」と一言だけ絞り出すとハーヴェは少しだけ泣いた。
そんなハーヴェの様子を見ながらライは湧き上がる様々な事柄に困惑していた。
（軍部が関わっている理由はわからねぇ。けど、俺の記憶が正しければ、工作部隊の中で軍閥貴族が混ざっている可能性があるのは――情報技術局だ
未だ解明されない霊力の謎。刻印途中の紋章。情報技術局。それに――”ダズニフ”
ちっ、情報が少ない。
意外とやっかいな事件に首つっこんじまったかもしれねえな）

「どう、思われますか？」

ライの家から程良く離れた場所から一連の行動をみていた従者は横にいる主人に問いかける。

「軍部が動いているの？」

「はい。おそらく、情報技術局です」

その言葉に女が美しい顔を歪めた。

「軍閥貴族じゃないウィリス家に、軍部が介入するその理由はなにかしら？」

「おそらく、姫様の予想通りかと」

2人は黙り込む。夜のぬるい風が女の銀髪を揺らした。

「ねぇ」

「は」

「そのさ――姫様っていうのやめない？」

「…は？」

予想外の言葉に従者が顔を上げる。主人の顔はふざけてるわけでもなく真剣な顔のままだ。

「姫様って呼ばれるの好きじゃないの知ってるでしょ？」

「しかし…」

「しかし、でもなんでも」

「それでは…」

「普通に呼んでいいのに。あたしとあなたの仲じゃない」

「では、フレイア様、と」

「様もいらなのに」
「すみません、さすがに無理です」
仕方ないわね、と女――フレイア――は笑った。
そしてすぐに真剣な表情に戻る。
「『ビオトープ計画』はまだ進んでいるのね」
「おそらく間違いなく」
「懲りない人たちね。大戦中の過ちを忘れたというのかしら」
「……」
「黒装束を全滅させておいて（傍点）、それでもまだ追い求める、か」
ふう、とため息をつく。
「どうなさいますか」
「放ってはおけないわね。少し様子をみながら介入しましょう。できるだけバレない形で」
「了解しました。……あの少女はどうなさいますか？」
沈黙は長かった。
女は長い時間考えた後、髪を掻き上げながら決断を下した。
「もし彼女がビオトープの計画の一環として紋章を刻印されたのだとしたら……かわいそうだけれども、生かしてはおけないわ。
――殺しなさい」

## 第2話「芽吹く」？

――カラン――

「おはよう。早いね、ライ」

「おはよう、ヤズリク。開店前に悪いな」

構わないけど大したものは出せないよ、と言うヤズリクになんでもいいから飲み物、と注文する。

しばらくして出てきたのがコーヒーだったので、砂糖を大量に入れる。

「うちが昨日襲撃を受けたのは知ってるよな」

「もちろん。情報は新鮮さが命だからね。ライともあろう人が出し抜かれて女の子攫われるなんて、らしくないね」

あっさりと返答が返ってくる。

ライは甘くなったコーヒーを一口飲むと目を合わせないまま本題を切りだす。

「その襲撃者の現在の居場所が知りたい。より正確に言うなら攫われた女の子、フランの居場所が知りたい。どうせ、あんたのことだ。掴んでいるんだろう？」

「……」

「金はいくらかまとまって払ってもいい」

「……」

「…ヤズリク？」

ヤズリクの返答がないことに困惑して顔を上げると、困った顔のヤズリクがカウンター越しに見えた。

「……ライ、今回の情報、代金はいいよ」

「…どういう事だ」

「その女の子を奪い返しに行くんだろ？」

「…あぁ」

ヤズリクはカウンターの中で、ゆっくりと今夜のための仕込みを始める。

火をつけ、鍋に材料を入れ、香辛料を手に取る。

「僕は、ハバーレス街のストリートチルドレンを見るたびに思うんだ」

「……」

「戦争の責任を子供たちにまで負わせてはいけない、って」

「…お前が気に病むことじゃない」

「わかってるさ。けれども、彼らに罪はないと思うんだ」

お前にも罪はない。

そう言ってやれたらどれだけ良かったか。

だが、ライは知っていた。ヤズリクが兵役で大戦に参加していたことを。そして戦場で地獄を見てしまったことを。

「大戦の罪は僕たち大人が背負うべきなんだ。子供たちじゃない」

だからこの男はわざわざハバーレス街で情報屋を営んだのだ。もっとも治安の悪い地域。そこに暮らす家なき子供たちの安全をほんの少しでも上げようとして。ライを使ってまでして。

「だから、この情報がハーヴェとフランという子供たちのためになるなら、代金はいいよ」
「そんなことをしていたらお前の生活が持たなくなる」
ヤズリクという男は、本当にそのために身を削っているともいえる。
彼は、定期的にストリートチルドレンを雑用として雇う。大して労働力にならない子供に賃金を払う事がいかに大変なことか。誰も真似をしないことがそれを証明している。
「今回だけさ。それに今ちょうど色々と他の状況が上手くいきそうでね。心配しなくていいよ」
「…そうか。わかった」
ヤズリクがいう「状況がいい」は信用ができる。それならば大丈夫だとライは判断した。
「で、本命の情報だけれども」
「頼む」
「襲撃部隊が帰還したのは、ウィリス家じゃない。ラングウッド商会だ」
「ぶっ！？　四大商人のうちの1人、ラングウッドか？」
「そうだ」
商都コマーサンドは主に東西南北の4つの地域に分けられる。それぞれの地域に地域を代表するような商人がいる。それが四大商人である。西地区はラングウッドという武器商人であった。
予想外の役者の登場に慌てざるを得ない。
「だが、なぜ軍部がラングウッド商会に？　あそこはウィリス家と

繋がりはあっても軍部とはつながりがないぞ」
「あったんだよ。それが」
ヤズリクがため息を吐く。
「デイビット・ウィリス。ウィリス家の長男で、現在軍部にて兵役中だ。だが、軍部での所属先が分からなかった。つまり――」
「特殊工作員」
「そういう事」
なるほど、とライは頷く。
関係性は繋がってきた。軍部とウィリス家をつなぎ、さらに軍部とラングウッド商会を繋いだのはこのデイビットという男だ。おそらくフランの、いやサリーの兄に当たるのだろう。
結局フランの紋章刻印の部分だけが不透明のままだった。
ヤズリクに念のため聞いてみても、首を傾げられるだけだった。。
「ありがとう。役に立ちそうだ。無料で悪いな」
そう言いながらもライはコーヒー代にしては多い額をテーブルの上に載せて席を立つ。
その気づかいにヤズリクも苦笑しながらも何も言わない。
「あぁあとライ。一つだけ気をつけて欲しいんだけど」
「なに？」
「最近、この街に不明な勢力がいる」
「勢力？」
「あぁ貴族にも軍部にも属してないと思う」
「どういう事？」
「分からないんだ。何かが動いてるのがギリギリわかるんだが、全

く正体がつかめない」
「…気をつけとく」
「注意してくれ。気味が悪い感じだからな」
「ありがとう」

改めて礼を言って出ていこうとするライの背中にヤズリクが言葉を投げかける。

「ライは、どうして今回のことに手を貸すことにしたんだい？　ここまで積極的に首を突っ込むのは珍しい気がするんだけど」

ライは止まらずに扉をあけると、一言だけ言葉を残して外へと出ていった。

「似てたんだよ、あのガキが。昔の知り合いに、さ」

## 第2話「芽吹く」？

「よし！　鍛錬終了！　サンツ、良くなったぞ！　今日は上げれ！」
「ハイ、ありがとうございまっした！」

午後の鍛錬を終える。思わずへたり込みそうになるのを必死に我慢する。以前、終了と同時に座り込んで隊長に怒られて追加鍛錬になったことがあるのだ。

「サンツ、もうすぐ復帰してもらうぞ。いつでも行けるように準備しとけ」
「は、はい！」

盗賊退治の一件から臨時休暇をもらっていたが、どうやらそれが解けるらしい。
隊長と武具を片付けながらも会話が続く。

「実は少し大きな『捕りモノ』があるかもしれん。それに人が必要となるのでな。お前の復帰にはいいタイミングさ」
「捕りモノ、っすか」
「あぁ、西のほうがきな臭い」

サンツが所属している守備隊は東である。自分たちの担当範囲以外の地域が出てきて驚く。

「意外か？」
「えぇ。つーか、それは西地区守備隊の担当じゃないんすか」
「色々と事情があってな。うちも担当する。それだけじゃない。帝都から騎士候が派遣されてくるらしい」

「結構規模がデカイ感じですね」
帝都待機の騎士がワザワザ来るとは、かなり重大な案件に違いない。
「そうだ、サンツ。なにか最近西地区の話を聞かないか？」
隊長に問われてサンツは少し迷った。実は鍛錬に来る前に、ライからいくつか状況を教えてもらっていたのだ。
「あー、友達から聞いた噂なんですけど」
「おう」
「西のラングウッド商会と貴族のウィリス家って元々繋がりが強いじゃないですか」
「あぁ」
「そこに何か軍部が混じり始めたそうなんですよね」
「…なんだと？」
予想外の隊長の食いつきにサンツは自分の行動が出過ぎたことかと焦る。
「いや、噂っすよ。噂」
「いいからもっと話せ。どうして軍部がラングウッド商会とウィリス家に繋がりを持ち始めたのか、その理由は？　その根拠は？」
「し、し、知らないっすよ。俺、ただの又聞きですもん。確かラングウッド商会に軍部の人間が出入りするのを見た人がいたって話で」
「…そうか」
嘘は言っていない。昨日の襲撃者はラングウッド商会へと帰還したと聞いている。それをライから又聞きしたのだ。嘘ではない。

さすがにデイビット・ウィリスの事まで話す気にはなれなかった。どこでその情報を得たか問い詰められたら非常に面倒だからだ。

「…な、なにか今度の捕りモノに関係あるんスか」

「ある、かもしれん」

「？」

「今きな臭い状況と言うのは、西地区守備隊とラングウッド商会の癒着問題なんだ」

本来守備隊というのは都市の守備が仕事であって、商人の守備隊ではない。しかしこの商都コマーサンドでは、商会の配置と守備隊の配置が一致するほど、商人の力は強い。

それでも今までは各守備隊とも、商人とも適度な距離を持ちつつ、都市守備を行ってきた。

それが、西地区で崩れているらしい。

「そんな感じで今西はかなりきな臭い。もし西に行く時は気をつけろ。下手に守備隊の隊服着てハバーレス街になんか行ってみろ。ボッコボコにされて生きて帰れないぞ」

「は、はは…了解です」

「よう、ハーヴェ。雑用か？」

果物がはいった重い箱を担ぎあげていると、横から声が掛けられ

た。
歯を食いしばったまま横を見ると、同じ年くらいの少年がニヤニヤしながら立っていた。
「リックだ。今週はそこのヤッジーって酒場で雑用してる。お前と同じだな」
「…ハーヴェ・ダズニフだ。なんで俺の名前知ってるんだよ」
「ライから聞いたからさ」
知り合いの名前が出てきて安心する。
「コラッ、さぼってんじゃないよ！」
後ろから鋭い声がする。屋台を切り盛りするマライルという女店主である。今、サンツが雑用をしているのは、サンツが獣人とやり合った時に被害を受けた屋台である。
賠償するのは無理だから、せいぜいタダ働きしてこい、と飄々と言い放った黒髪の青年を思い出す。
「で、なんの用？」
再び手を動かしながら、会話を続ける。箱の中から果物を取り出し、並べていく。一番上の果物だけ布を持ってきて磨く。
「そう、邪険にするなよ。お前、あの女の子取り返したいんだろ？」
「…うん」
「なら、武器が必要だろ」
「あるのか！？」
思わず手を止めて聞き返す。

「俺が持ってるわけじゃないけど、ある場所は知ってる」
「どこだ！？」
「落ちつけよ。ライの家の倉庫だ」
「…ライの？」

おう、とリックは大仰に頷く。

「ライが大戦時に参加してたのは知ってるか？」
「いや…ていうかライって今１９歳じゃないの。そしたら大戦時には兵役を免れてるはずだけど」

兵役は２０歳からである。現在１９歳で、大戦時には１６歳くらいだったライが大戦に参加してるとは信じられなかった。

「なんか特例で出たらしいぜ。軍のお偉いさんの推薦だか指図があったって言ってた」
「よく、知ってるんだね」
「俺が雑用してるのは、この街一番の情報屋が営む酒場だぜ？　色々と聞こえてくるもんもあるってことよ」

ししし、と笑うリック。
どうやら悪い人間ではなさそうだ、とハーヴェは安心した。

「だからライの家の倉庫には武器があるんだ。お前剣とか扱えるか？」
「親父に少しだけ習ってた」
「なら、大丈夫だな。上手いこと盗み出して使っちまえ」

じゃあ俺も仕事があるから、と去ろうとするリックにハーヴェは

思わず問いかけてしまう。
「ありがとう！…でもなんで？」
「いやさ、なんていうか…」
ポリポリと頭を書きながらリックは恥ずかしそうに言う。
「最初はお前ら愛想悪いから放っておいたんだけどさ、あのケンカとか見てさ。なんかもっと声かけとけばよかったって。俺なら逃げ込める穴場とか知ってたのにさ。ちょーっち反省してるんだよね」
「…」
「それに俺にも妹がいたからさ」
いたから。ということは今はいないということだ。
胸の奥を慮ってハーヴェは沈黙する。
「だからさ、まあ上手くやれよ。俺ここらへんのストリートキッズは大体把握してるから、なんかあったら声かけてくれよ。な？」
「うん、ありがとう」
店先にあった皮を剥かなくても食べられる果物を1つリックに放る。それを受け取ったリックは少し驚いた顔をしたあと嬉しそうな顔をして去って行った。
「ほう、売り物をあげるとはいい度胸だね」
「ひぃっ！？」
その後に屋台のなかで悲鳴が聞こえたとか聞こえなかったとか。
とにかくこの日ハーヴェがもらった報酬は『拳骨一発』だった。

## 第2話「芽吹く」？

「……ごめん、ライ。もう一度言って？」

サンツは思わず食事の手を止めて聞き返した。横ではハーヴェが信じられないと言った顔で固まっている。

「『どうしてお前が俺の部屋で』？」

「違う、その前！」

1人だけ食事を続けるライ。早めの夕飯だった。外はまだ日が暮れたばかりだ。

何もおかしなことは言わなかった、という態度に腹が立つ。

「『フラン救出には今日俺が1人で行く。2人はここで待ってろ。…ってか、なんでサンツ、お前が俺の部屋で飯を食ってるんだ』」

「ふざけるな！」

スプーンを握りしめたままハーヴェが憤然と立ち上がる。

「どうして、俺が置いていかれなきゃならねーんだ！　フランは俺の家族だぞ！？」

「そうだぜ、ライ。俺だってこの街の守備隊として誘拐は見過ごせない。何故、1人で行くなんて言うんだよ」

2人が感情激しく抗議するのに対してライは極めて冷静に返答した。

「足手まといだから」

ぐっと詰まる2人。
確かにライと2人の間には決定的な実力差がある。だが、弱いから来るな来るなと言われて、はいそうですか、と引き下がれるものでもない。

「ふざけんな。俺はお前が1人で行ったとしたら、俺だって1人で行くぞ」
「貴族からの追っ手1人すら倒せないのに？」
「うるせえ！　『諦めないでいられるように強くあれ』そう親父に言われてきたんだ。諦めねえよ」

そう言って食事の手を止めて部屋を出ていこうとする。リックの言うとおりなら部屋の外の物置に武器があるはずなのだ。
その背を追うようにライも立ち上がり、後を追いかける。

「実力が伴わない特攻はバカだとお前の親父さんは教えなかったのか？」
「うるせえうるせえ！　親父をバカにすんな！」
「バカにしてないさ。尊敬してる」
「どういう意味――――ぐっ！？」

振り返って怒鳴ったハーヴェの首筋にライの鋭い手刀が入った。
短いうめき声をあげてハーヴェが倒れ込む。その体を抱きかかえてソファに寝かすと、呆然と事の成り行きを見ていたサンツと視線を合わせる。

「なんで？」

スプーンを握ったままサンツがライに問いかける。

その表情は少し硬い。サンツはなんだかんだで生意気ながら必死に生きようとしているハーヴェのことを好いていた。年の近い妹がいるせいもあるだろう。だいぶ感情移入していた。
そんなサンツの視線を受けながら、ライはなんと言葉を紡ぐべきか悩んでいた。

『大戦の罪は僕たち大人が背負うべきなんだ。子供たちじゃない』

昼間、ヤズリクに言われた言葉が甦る。
大戦が終わってから、多くの親なしの子供たちを見てきた。ハバーレス街でも、他の街でも。あまりに多くの子供を見てきたので、そんなこと考えたことなかった。

『ありがとう』

ハーヴェを手伝ってやると本人に言った時、彼はライにそう返答した。その時にハーヴェが流した涙をみて、心が痛んだのだ。
――――俺はそんなことを言われる資格はない。

「こいつの親父さんも、こいつに人殺しをさせるために戦死したわけでもないだろ、って思ったらさ、なんか……うん、そんな感じ」
「…よく分かんねえよ」

サンツが苦笑しながら肩をすくめる。

「ほら、こいつってバカじゃん。単細胞だし、猪突猛進だし、バカだし」
「まぁ、な」
「もうホント、サンツといい勝負レベルにバカじゃん」
「どういう意味だよ！」

思わずツッコミを入れてしまう。

「なんかさ、そういうバカはさ、人殺しとかそういうのと無縁のほうがいいんじゃねぇかって思ったわけ」

「……」

「だから、サンツも。お前まだ人を殺したことないだろ？　この前は殺されかけてたけどさ」

そう言い終えると黙々と1人で準備をする。

黒いの服に着替え、腰に短剣を刺し、顔の半分を覆う黒いマスクをつける。

髪も黒いため、顔の上半分と紫金の目だけが異なる色をしている。

その淡々と準備する後ろ姿がサンツには妙に寂しく見えた。

「…そういうお前はどうなんだよ」

「え？」

ライが人を殺してないとは言わない。大戦の時は救国の英雄として黒装束で狂戦士として隊長を務め、そしてこの前の夜盗退治では元練兵団の夜盗の半分を壊滅させている。

徴兵年齢に達していないライは戦場で何を見てきたのだろうか。

「お前はいつからそういうのに関わってきてるんだよ」

「……」

自分とあまり変わらない年代の青年なのに、何故こんなにも違うのか。サンツは一度聞いてみたかったことを聞いた。

「…俺は、お前らと違ってバカじゃないから、気にしなくていいん

だよ。そういうのは」

だがあっさりと流されてしまう。

装備を整えたライはもう一度体中を確認してから、窓から身を乗り出し屋根へ登ろうとしている。

重ねてもう一度聞こうとしたサンツの言葉を遮るように、「んじゃ、ハーヴェ任せたよ」と言うとライは体をあっさりと持ち上げて屋根へと登っていきあっさりと姿を消した。

残されたサンツは大きなため息をついてソファで気絶しているハーヴェを見、そして自分がまだスプーンを握ったままであることに気付いてまた再びため息をついた。

「姫…フレイア様、準備ができました」

「わかったわ」

「あと、ライオネルも出発したようです」

「そう」

女は少し簡素な格好をしている。黒ではないが、闇に紛れやすい色の服を着、髪は簡単に1つにまとめている。だが、顔は隠さず、その美貌と赤い瞳だけは顕在だった。

幸いと今日は新月だ。どちらかといえば目立たないだろう。

「行きましょう。できるだけ見つからないように」
「はい」
「特にあなたは見つかりそうになったら先に逃げるのよ」
「いえ、私は――」
「実力の問題じゃないの。私の心配がいらないのは分かっているでしょう？」
「…はい」

そうして二言三言言葉をかわすと2人は、音もなく屋根の上を掛けて、ラングウッド商会へと向かって行った。

「う、う～ん」
「お、起きたか。ハーヴェ」
「…ん？　なんでサンツが…？……あぁぁあ！　ライのやつ！」

ソファで気絶していたハーヴェが勢いよく起き上がる。額に載せられていたタオルが勢いよく前に飛んでいく。それを気にせず、立ち上がるとドアを空け、倉庫の扉も無理やり空け、中へと入っていく。

「お、お、おい」
「あった！　武器！　剣だ！」

「け、剣？」

聞こえてきた声に素っ頓狂な声で返しながら、サンツはハーヴェを追いかけて倉庫の中に入る。

「ほら、サンツ長い方あげる」

「うおっ、なんだコレ。ごついな」

倉庫の奥から出てきたハーヴェが剣を一振り投げてくる。受け取った剣は普通の長剣よりもさらに一回り大きく、形は片手剣に似ていたが、サンツでは両手でようやく扱える程度だろう。

一方ハーヴェはその長剣と対になっていたのだろう、少し短めの剣を持っている。体の小さいハーヴェにはそれがちょうど大人が長剣を扱うようなサイズとしてぴったりであった。

「よし、行こう」

「お、おい。行くぞって…あ、コラ！　せめて人の話をちゃんと最後まで聞け！」

「走りながら聞くよ。ほら、サンツ走って！　さっさとライを追いかけよう！」

そう言ってさっさと倉庫の外へ出て、走りだす。向かう先はもちろんラングウッド商会である。

「あぁ、ちくしょう。俺も大概アタマ悪いけど、絶対あいつの方が単細胞だ！」

サンツはそう言って頭を掻き毟りながらも、ハーヴェを追いかけてラングウッド商会のほうへと走り出した。

こうして、３組合計５人の人間がラングウッド商会を目指して走りだしていた。
だが、彼らのうち誰１人として、もう１人の重要な人物がラングウッド商会へと向かっていたのを知っていた者はいなかった。
その人物は、３日前から「視察」という名目のために商都コマーサンドまでやってきていた帝都待機の１人の騎士であった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1853u/

約束が守られるのを、世界は待っている

2011年8月9日03時08分発行